

茨城県教育財團文化財調査報告第228集

高幡遺跡  
加茂東遺跡  
犬田山神古墳

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書VII

平成16年3月

日本道路公団  
財団法人 茨城県教育財團

たか はた い せき  
高 幡 遺 跡  
か も ひがし い せき  
加 茂 東 遺 跡  
かぬ だ やまのかみ こ ふん  
犬 田 山 神 古 墳

北関東自動車道（協和～友部）建設  
事業地内埋蔵文化財調査報告書VII

平成16年3月

日本道路公団  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、岩瀬町高幡・加茂部・犬田地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年2月から平成15年2月まで発掘調査を実施しました。

本書は、高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳の調査成果を収録したもので、本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤 佳郎

## 例　　言

1 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財團が平成13年度および平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県西茨城郡岩瀬町大字高幡に所在する高幡遺跡、大字加茂部に所在する加茂東遺跡、大字大田に所在する大田山神古墳の発掘調査報告書である。

2 各遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

### 高幡遺跡

調査 平成14年7月1日～平成14年8月8日

整理 平成15年12月1日～平成16年1月31日

### 加茂東遺跡

調査 平成14年2月12日～平成14年3月8日、平成15年2月12日～平成15年2月28日

整理 平成15年8月1日～平成15年8月31日

### 大田山神古墳

調査 平成14年4月1日～平成14年4月30日

整理 平成16年3月1日～平成16年3月31日

3 各遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久、調査第二課長鈴木美治のもと、以下の者が担当した。

### 高幡遺跡

調査第1班長 萩野谷 哲 平成14年7月1日～平成14年8月8日

主任調査員 横倉 要次 平成14年7月1日～平成14年8月8日

主任調査員 植 雅彦 平成14年7月1日～平成14年8月8日

### 加茂東遺跡

調査第1班長 海老澤 稔 平成14年2月12日～平成14年3月8日

調査第2班長 村上 和彦 平成15年2月12日～平成15年2月28日

主任調査員 藤田 哲也 平成14年2月12日～平成14年3月8日

調査員 早川 龍司 平成15年2月12日～平成15年2月28日

### 大田山神古墳

調査第2班長 村上 和彦 平成14年4月1日～平成14年4月30日

主任調査員 近藤 恒重 平成14年4月1日～平成14年4月30日

調査員 越田真太郎 平成14年4月1日～平成14年4月30日

4 各遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、以下の者が担当した。執筆分担は以下の通りである。

横倉 第3章

早川 第4章

越田 例言、凡例、抄録、第1章、第2章、第5章

## 凡 例

1 各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、高幡遺跡はX=+38,120m, Y=+28,960mの交点を基準点（A 1 a1）とし、加茂東遺跡はX=+38,360m, Y=+29,600mの交点を基準点（A 1 a1）とし、犬田山神古墳はX=+38,420m, Y=+24,720mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を（ ）を付して併記した。

3 実測図・一覧表・遺物観察等で使用した記号は次のとおりである。

住居跡-S I 土坑-S K 井戸跡-S E 溝跡-S D 道路跡-S F

柱穴-P 古墳-T M 捣乱-K

4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

6 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・軸・赤彩 □ 炉・火床面・石器使用痕・被熱痕 ■

籠部材・粘土・炭化材・黒色処理 ■ 柱痕・油煙・煤・炭化物 ■ 硬化面・— — —

土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△

7 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

① 遺構全体図は高幡遺跡を300分の1、加茂東遺跡を200分の1、犬田山神古墳を250分の1で掲載し、遺構は60分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。

② 遺物は3分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。

③ 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けた記述した。

8 「主軸方向」は、がまたは竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E）

9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

① 計測値の単位は、cm及びgで示した。なお、現存値は（ ）、推定値は〔 〕を付して示した。

② 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。

③ 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

10 遺構一覧表における計測値は、現存値は（ ）、推定値は〔 〕を付して示した。

## 抄 錄

ふりがな	たかはたいせき	かもひがしいせき	いねだやまのかみこふん					
書名	高幡遺跡	加茂東遺跡	犬田山神古墳					
副書名	北関東自動車道(協和~友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次	VII							
シリーズ名	茨城県教育財團文化財調査報告							
シリーズ番号	第228集							
編著者名	横倉 要次 早川 麗司 越田 真太郎							
編集機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2	TEL 029-225-6587						
発行機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2	TEL 029-225-6587						
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
高幡遺跡	茨城県西茨城郡岩瀬町 大字高幡字六枚堀85番 地ほか	08324 - 073	36度 20分 35秒 36度 20分 46秒	138度 49分 21秒 138度 49分 10秒	60 ~ 61m	20020701 ~ 20020808	1,686.73m <sup>2</sup>	北関東自動車道(協和~友部)建設事業に伴う事前調査
加茂東遺跡	茨城県西茨城郡岩瀬町 大字加茂部字加茂1510 番地ほか	-	36度 20分 43秒 36度 20分 54秒	138度 49分 47秒 138度 49分 35秒	73 ~ 74m	20020212 ~ 20030228	573.76m <sup>2</sup>	
犬田山神古墳	茨城県西茨城郡岩瀬町 大字犬田字前田1665番 地の2ほか	08324 - 085	36度 20分 45秒 36度 20分 56秒	138度 46分 31秒 138度 46分 20秒	61 ~ 65m	20020401 ~ 20020430	705.31m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高幡遺跡	狩獵場跡	縄文時代	陥し穴	2基	縄文土器、磨石、圓石、石器		縄文時代から中世以降までの複合遺跡である。特に、弥生時代と古墳時代の集落跡が中心となっている。古墳時代の住居跡からは初期的な遺物が確認された。	
	集落跡	弥生時代	堅穴住居跡	4軒	弥生土器、統錐車、炉右			
		古墳時代	堅穴住居跡	8軒	刀劍器(环、高杯、碗、匙、鏡、壺)、土器、双孔門板、低石			
	その他	中世	井戸跡	1基	土師質土器(小皿、鍋)			
		溝跡	4条	陶器(甕、擂鉢)、砥石				
	不明	土坑	3基					

加茂東遺跡	集落跡	平安時代	堅穴住居跡 4軒 溝跡 1条	土師器(壺, 梶, 盆, 瓢), 須恵器(甕), 灰釉陶器(長頸瓶), 低石 繩文土器	山間部に形成された集落跡であり、遺跡はさらに周辺に広がっていると考えられる。
	その他	不 明	土坑 道路跡 1条	3基	
犬田山神古墳	墓 跡	古 墳 時 代	円墳	1基 土師器(楕)	墳丘が削平された円墳の周溝を確認した。また、中世城郭の一部と考えられる溝跡を確認した。
	城 跡	中 世	溝跡	1条 上部質土器(小皿, 内耳鏡), 瓦質土器(火鉢)	
	その他	不 明	土坑 溝跡 1条	2基 繩文土器, 弥生土器	

# 目 次

序

例言

凡例

抄録

目次

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 高幡遺跡	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	9
1 繩文時代の遺構と遺物	9
(1) 陥し穴	9
(2) 遺構外出土遺物	10
2 弓文時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 遺構外出土遺物	22
3 収墳時代の遺構と遺物	24
(1) 竪穴住居跡	24
(2) 遺構外出土遺物	40
4 中世以降の遺構と遺物	41
(1) 井戸跡	41
(2) 溝跡	41
5 その他の遺構	44
第4節 まとめ	46
第4章 加茂東遺跡	50
第1節 遺跡の概要	50
第2節 基本層序	50
第3節 遺構と遺物	53
1 平安時代の遺構と遺物	53
(1) 竪穴住居跡	53

(2) 溝跡	60
2 その他の遺構と遺物	63
(1) 道路跡	63
(2) 士坑	63
(3) 遺構外山上遺物	64
第4節まとめ	65
第5章 大田山神古墳	66
第1節 遺跡の概要	66
第2節 基本層序	66
第3節 遺構と遺物	66
1 古墳時代の遺構と遺物	66
(1) 古墳	66
2 中世の遺構と遺物	70
(1) 溝跡	70
3 その他の遺構と遺物	72
(1) 士坑	72
(2) 溝跡	75
(3) 遺構外出土遺物	76
第4節まとめ	76

写真図版

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けた茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に岩瀬町高幡地区と犬田地区において、平成12年12月14日に加茂部地区において現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成13年3月28日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に高幡遺跡、犬田山神古墳が存在する旨、さらに平成13年6月26日に加茂東遺跡が存在する旨回答した。

平成13年7月12日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年7月13日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成13年10月9日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成13年10月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、高幡遺跡、加茂東遺跡、犬田山神古墳について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財團法人茨城県教育財団を紹介した。

財團法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年2月12日から調査を開始した。

## 第2節 調査経過

各遺跡の調査経過については、下表のとおりである。

高幡遺跡		加茂東遺跡			犬田山神古墳		
工程	年月	平成14年		平成14年	平成15年	平成14年	
		7月	8月				
調査準備							
表土除去							
遺構確認							
遺構調査		■■■■■		■■■■■		■■■■■	
洗浄・注記・写真整理作業		■■■■■		■■■■■		■■■■■	

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳は、茨城県西茨城郡岩瀬町に所在している。岩瀬町は、茨城県の中西部に位置し、北には富谷山、雨巻山及び高峰山があり、桜木県真岡市・益子町・茂木町に接している。町は山地で取り囲まれた盆地をなし、町の北東部に位置する諏訪岬の川川、鏡ヶ池に源を発する桜川が町の中央部を東西に貫流している。平地は、桜川、大川、筑輪川などの流域と山間部に入り込んだ谷状の低地などである。

当町を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鶩の子山塊、鷦足山塊、筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層とこれを貫く花崗岩類からできている。台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地である。この上層は赤土と呼ばれ、鹿沼軽石を含む火山灰が堆積したものである。また、水田に利用されている桜川流域一帯などは、河川の浸食・堆積作用による冲積地である<sup>1)</sup>。高幡遺跡は高幡地区にあり、桜川支流の筑輪川右岸に面した標高60mほどの丘陵裾部の台地上に立地している。加茂東遺跡は加茂部地区にあり、北東側に羽黒山、西側に桜川支流の筑輪川を望む標高73~74mほどの丘陵裾部に立地している。犬田山神古墳は犬田地区にあり、筑波山塊の北部から西側に延びる標高61~65mの丘陵性的の舌状台地上に立地している。調査前の現況はいずれも畠地である。

### 第2節 歴史的環境

岩瀬盆地の遺跡は桜川及びその支流域の台地上に多く分布し、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している<sup>2)</sup>。

旧石器時代の遺跡については、遺構や出土状況などが明確ではないが、これまでに上野原地内で尖頭器が、富谷地内と高幡地内で石槍がそれぞれ発見されている。また、松田古墳群（4）からも旧石器時代の遺物が出土している<sup>3)</sup>。

縄文時代には、桜川流域の沖積地から入り込む支谷に面した台地上の縁辺部に、集落が形成されるようになり、遺跡は戯辺遺跡（5）、曾根宮下遺跡（6）、長辻遺跡（7）、猪塚遺跡（8）、曾根東台遺跡（9）、加茂遺跡（10）、花園遺跡（11）、松田遺跡（12）、西小塙遺跡（13）、裏山遺跡（14）、宮前遺跡（15）、防人遺跡（16）、原遺跡（17）、月山寺東遺跡（18）、犬田神社前遺跡（19）などが所在している。このうち、犬田神社前遺跡と前述の松田古墳群は平成14年度に発掘調査が行われ、中期から後期の遺構・遺物が多数出土している<sup>4)</sup>。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じ台地上に多く分布している。これまでに桜木県との境地に近い大泉地区から細頸壺形土器と筒形土器が、磯部遺跡からは右包丁が出土している。これらの遺物は単独発見ではあるが、弥生時代中期の資料として特筆されるものである<sup>5)</sup>。また、南駿田遺跡と番匠免遺跡出土の土器は那珂川・久慈川流域に分布する弥生時代後期から終末期の土器と類似している<sup>6)</sup>。当遺跡周辺では、松田古墳群、長辻遺跡、猪塚遺跡、曾根東台遺跡、加茂遺跡、花園遺跡、西小塙遺跡、裏山遺跡、宮前遺跡、防人遺跡、原遺跡、月山寺東遺跡、犬田神社前遺跡などが所在している。

古墳時代になると、遺跡数は増加の傾向を見せるようになり、現在のところ46か所の古墳群、170基を超える古墳が確認されている。また、町の南に隣接する大和村では、桜川流域に沿って7か所の古墳群と4基の古

墳が確認されている<sup>7)</sup>。それらの古墳や古墳群は、桜川流域の冲積地を臨む丘陵上に位置している。これまでに調査された古墳は、狛塚古墳、間中古墳群、青柳古墳群（20）、花園古墳群（第3号墳）（21）、西沢古墳、種古墳群（22）、松田古墳群である。狛塚古墳は長辺寺山西側に所在し、昭和42年に工場建設のために聚落調査が実施された。古墳の軸線は正南よりわずかに東にふれ、規模は全長約40m、高さ約4m（後方部墳丘）の前方後方墳である<sup>8)</sup>。また、標高約130mの長辺寺山山頂には、長辺寺山古墳（23）が所在している。この古墳は未調査であるが、全長約120mの前方部を南東に向けて築造された前方後円墳であり、旧新治園東部地方における最大規模の古墳である。これら二つの古墳は岩瀬盆地のほぼ中央の独立丘陵上に築造されており、古墳時代前期の首長墓と考えられている。

古墳時代の集落とされる遺跡は、磯部遺跡、加茂遺跡、花園遺跡、裏山遺跡、木曾宮西遺跡（24）、防人遺跡、原遺跡、犬田神社前遺跡などが所在している。この中で磯部遺跡は、町立東中学校建設に伴って昭和45年に発掘調査が実施され、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落跡であると報告されている<sup>9)</sup>。また、裏山遺跡では前期から後期にかけての住居跡30軒が調査された。特に中期の住居跡からは石製模造品が出土し、集落内の祭祀を考える上で貴重な資料を提供している。

奈良・平安時代になると、岩瀬地方は新治郡に編入されることとなる。協和町古都地区付近には新治郡衙跡が位置し、その北側に隣接する上野原地区には新治廃寺跡が位置している。奈良・平安時代の遺跡は、裏山遺跡、木曾宮西遺跡、防人遺跡などが位置している。

中世になると、岩瀬地方は「中郡」と呼ばれ、撰閑藤原氏を本宗とする大中臣姓中郡氏が台頭してくるようになる。在地領となつた中郡氏は平安時代末期になると後白河法皇によって創建された京都の蓮華王院への所領である中郡を寄進し、以後、岩瀬地方は中郡莊（庄）と呼ばれるようになる<sup>10)</sup>。中世の遺構は城館跡を中心とし、周囲には橘本城跡（25）、松田城跡（26）、谷中城跡（27）、岩瀬城跡（28）、磯邊城跡（29）などが所在するが、これらの城館跡は詳細については不明な部分が多い。また、犬田神社前遺跡からは中世の集落跡・墓域が検出されている<sup>11)</sup>。

※文中の（ ）内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

#### 注)

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会『日本の地質3 関東地方』共立出版 1986年10月
- 2) 津城県教育委員会『次年度地形図』2001年3月
- 3) 調査報告書は茨城県教育財團より平成16年3月刊行予定。
- 4) 言3と同じ。
- 5) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史 通史編』岩瀬町 1987年3月  
茨城県史編集会『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』茨城県 1991年3月
- 6) 言5と同じ。
- 7) 瓦吹壁「岩瀬盆地考古学点描」「領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集—」阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 8) 西宮一男『常陸狛塚古墳調査報告書』岩瀬町教育委員会 1969年4月
- 9) 野村幸希『磯部遺跡調査報告書』岩瀬町教育委員会 1972年7月
- 10) 中山信名『新編常陸国記』齋藤房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 11) 言3と同じ。



第1図 高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳周辺遺跡位置図

表 I 尚轄遺跡・加茂東遺跡・大田山神古墳周辺遺跡一覧表

番 号	遺跡名	遺跡番号	時代					番 号	遺跡名	遺跡番号	時代				
			縄 文	弥 生	古 墳	奈 良	中 世				石 器	弥 生	古 墳	奈 良	中 世
①	高 軒 遺 跡	08324073	○	○	○			21	花 國 古 墳 群	08324019			○		
②	加 茂 東 遺 跡	-			○			22	稻 古 墳 群	08324004			○		
③	大 田 山 神 古 墳	08324085	○	○	○	○	○	23	長 辺 寺 山 古 墳	08324003			○		
4	松 田 古 墳 群	08324020	○	○	○	○	○	24	木 曽 宮 西 遺 跡	08324065			○	○	
5	磯 邊 遺 跡	08324005	○	○				25	橘 本 城 跡	08324035				○	
6	曾 根 宮 下 遺 跡	08324018	○					26	松 田 城 跡	08324040				○	
7	長 辺 寺 遺 跡	08324026	○	○				27	谷 中 城 跡	08324041			○		
8	猪 塚 遺 跡	08324027	○	○				28	岩 潤 城 跡	08324042			○		
9	曾 根 東 台 遺 跡	08324028	○	○				29	磯 邊 城 跡	08324043			○		
10	加 茂 遺 跡	08324029	○	○	○			30	猪 塚 古 墳 群	08324001			○		
11	花 國 遺 跡	08324030	○	○	○			31	大 國 古 墳 群	08324006			○		
12	松 田 遺 跡	08324031	○					32	加 茂 A 古 墳 群	08324016			○		
13	西 小 墓 遺 跡	08324052	○	○				33	曾 根 古 墳 群	08324017			○		
14	裏 山 遺 跡	08324056	○	○	○	○		34	庚 申 墓 古 墓	08324022			○		
15	宮 前 遺 跡	08324061	○	○				35	ま す み 古 墓 群	08324045			○		
16	防 人 遺 跡	08324068	○	○	○	○		36	諏 託 古 墓	08324053			○		
17	原 遺 跡	08324069	○	○	○			37	御 領 墓 古 墓	08324067			○		
18	月 山 寺 東 遺 跡	08324074	○	○				38	車 墓 古 墓 群	08324071			○		
19	大 田 神 社 前 遺 跡	08324086	○	○	○	○	○	39	池 下 古 墓 群	08324075			○		
20	青 柳 古 墓 群	08324050			○			40	加 茂 B 古 墓 群	08324084			○		

## 第3章 高幡遺跡

### 第1節 遺跡の概要

高幡遺跡は、岩瀬町の南東部に位置し、岩瀬盆地の中央を東西に貫流する桜川の支流である筑輪川右岸に面した標高60mほどの丘陵性台地の裾部に立地している。調査面積は1,686.73m<sup>2</sup>で、調査前の現況は畑地であつた。

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の竪穴住居跡4軒、古墳時代の竪穴住居跡8軒、中世以降の井戸跡1基と溝跡4条、時期不明の土坑3基である。これらの遺構は、調査区内のほぼ全域に分布し、丘陵性台地の裾部平坦面に立地していた。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に8箱出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器片(深鉢)、石器(磨石、回石、石皿)である。弥生時代の遺物は、弥生土器(壺、釜、高杯)、土製品(筋縫車)、炉石などである。古墳時代の遺物は、上部器(壺、高杯、壺、甌、瓶)、須恵器片(杯)、土製品(土壺)、石製品(双孔円板、砥石)などである。中世以降の遺物は、上部質土器片(小皿、内耳鉢)、陶器片(壺、擂鉢)、石製品(砥石)などである。

このように、当遺跡は縄文時代には狩猟場として利用され、弥生時代と古墳時代には集落が形成されていた。また、中世以降も生活の場として利用されていたことが確認され、縄文時代から古墳時代と中世以降の複合遺跡であることが明らかになった。

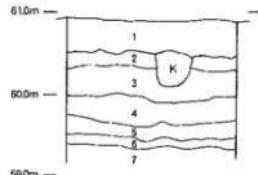
### 第2節 基本層序

調査区内の南西部(B1 i3 K)に深さ約2mのテストピットを設定して、基本層の観察を行った。(第2図)  
第1層 灰褐色の表上層で、耕作による搅乱が見られ、ロームブロックを少量含む。層厚は、35~45cmである。  
第2層 にぶい褐色の旧表上層で、耕作による搅乱が見られロームブロックを中量含む。層厚は、12~18cmである。

第3層 明黄褐色のソフトローム層で、赤色粒子を少量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は、36~42cmである。

第4層 黄褐色のハードローム漸移層で、粘性と締まりはともに強い。層厚は、25~42cmである。

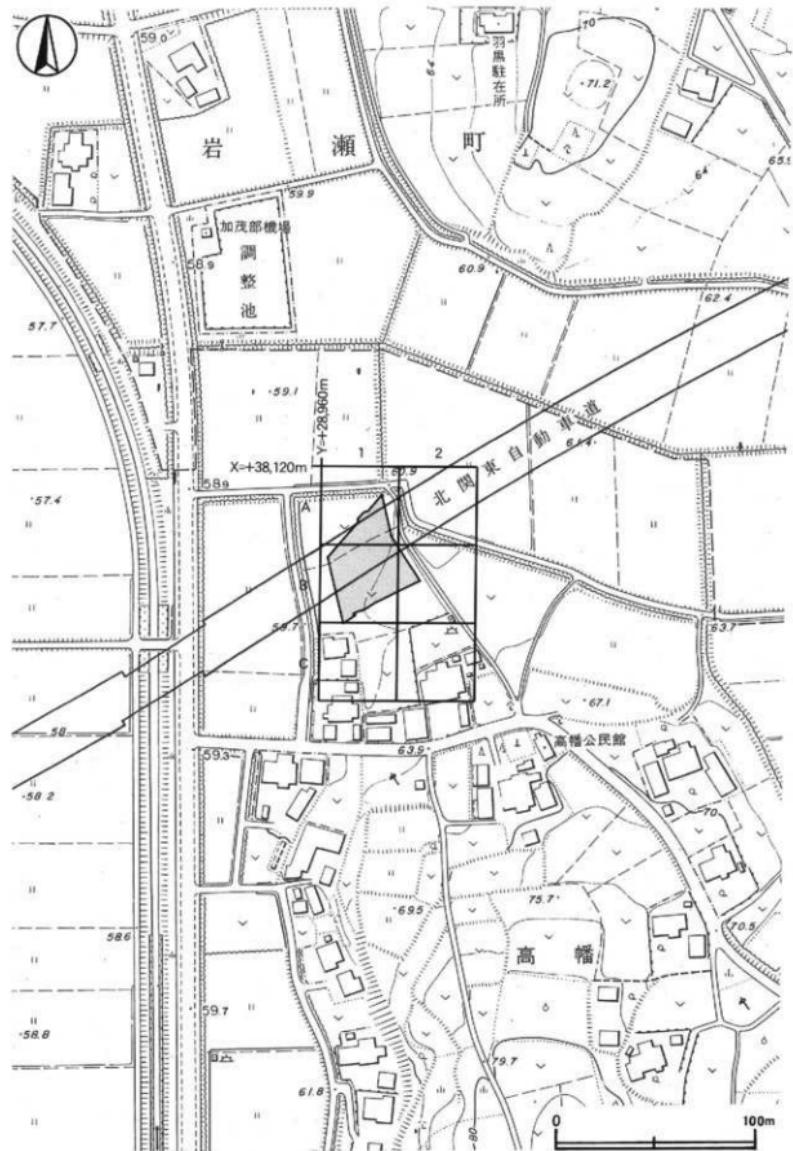
第5層 黄褐色のハードローム層で、鹿沼バミスを少量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は、12~20cmである。



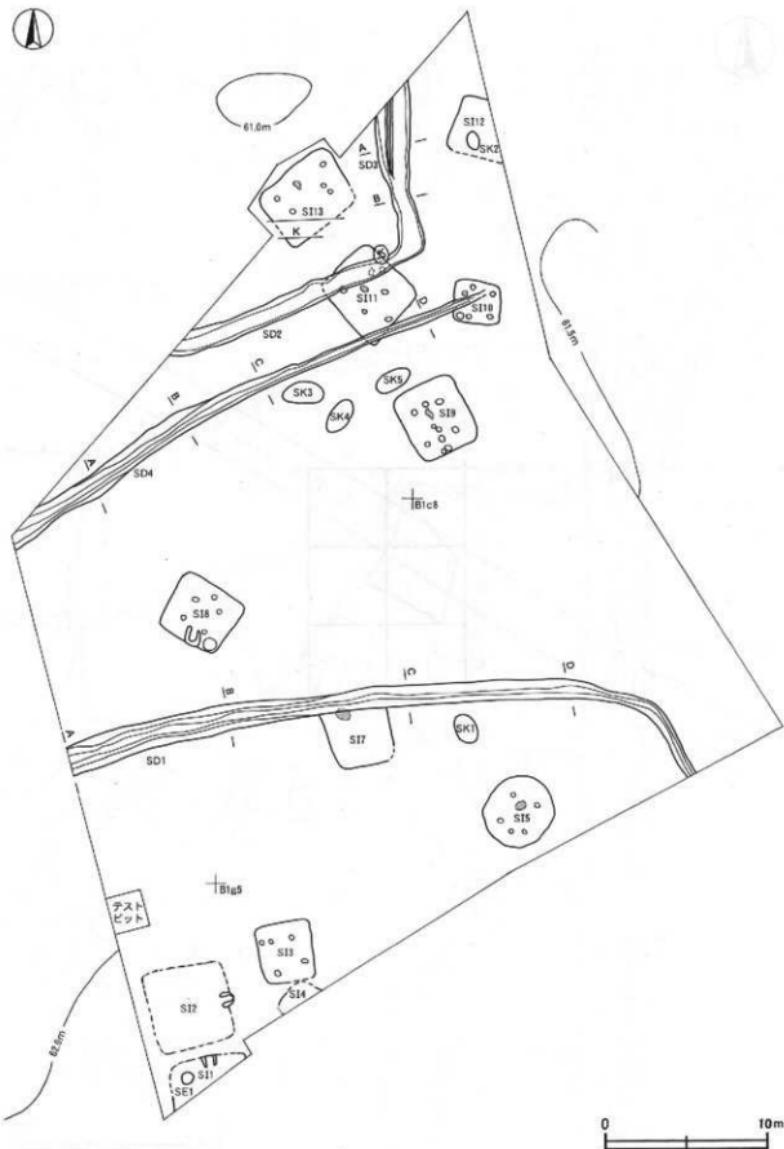
第2図 基本上層図

第6層 明黄褐色のハードローム層で、鹿沼バミスを多量含み、鹿沼怪石層の漸移層と考えられる。粘性と締まりはともに強い。層厚は、10~14cmである。

第7層 黄褐色の鹿沼怪石層である。粘性と締まりは強い。以下、未掘のため本来の層の厚さは不明である。遺構は、第2層上面で確認され、第2層から第3層を掘り込んでいる。



第3図 高幡遺跡調査区設定図



第4図 高幡遺跡遺構全体図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 繩文時代の遺構と遺物

今回の調査で、陥し穴と考えられる土坑2基が確認された。また、遺構外の遺物としては、縄文土器と石器が出土した。以下、遺構と遺物について記述する。

##### (1) 陥し穴

###### 第1号陥し穴 (SK3) (第5図)

位置 調査区中央部のB-1a6区に位置し、台地裾部の平垣面上に立地している。

規模と形状 長径2.53m、短径1.38mの長楕円形で、深さは36cmである。壁は緩やかに傾斜し、底面はわずかに凹凸がある。長径方向はN 86°-Eである。

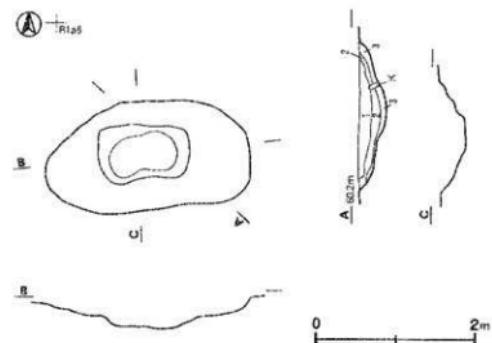
覆土 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

###### 土層解説

- |       |                      |
|-------|----------------------|
| 1 黒色  | ロームブロック少々、炭化<br>植物微量 |
| 2 咸褐色 | 2-3mm粒子中等            |
| 3 黄色  | ロームブロック中量            |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第5図 第1号陥し穴実測図

###### 第2号陥し穴 (SK5) (第6図)

位置 調査区中央部のB-1a7区に位置し、台地裾部の平垣面上に立地している。

規模と形状 長径2.34m、短径1.10mの楕円形で、深さは64cmである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。長径方向はN 56° Eである。

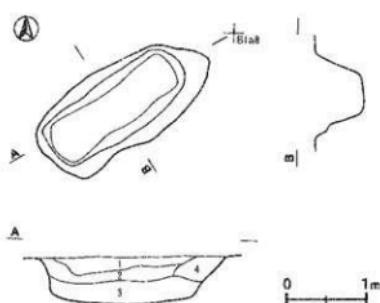
覆土 4層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

###### 土層解説

- |       |                        |
|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量、底上粒子極微量        |
| 2 黄褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子、底上粒子極微量 |
| 3 黑褐色 | ロームブロック微量              |
| 4 咸褐色 | ロームブロック少量              |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第6図 第2号陥し穴実測図

(2) 遺構外出土遺物（第7図）

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第7図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	器種	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 殊	出土位置	備 考
1	繩文土器	深鉢	石英・長石・赤母	にほい・黄橙	普通	沈殿区画による表面繩文地文。	S113覆土中 TP1 PL2	
2	繩文土器	深鉢	石英・長石・赤色粒子	灰	普通	半斜繩文上に沈殿を伴う蓮形を軸行して支拂構成。	B164区表土 中 TP2 PL2	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3	磨石	(9.8)	(5.4)	4.5	(271)	安山岩	自然縫素材。全面を研磨面に使用。	SD4覆土中	Q3 PL12
4	石皿(研石)	(8.1)	(8.8)	4.5	(311)	安山岩	表面1か所、裏面8か所穿孔。	S18覆土中	Q4 PL12
5	石皿(研石)	(10.0)	(10.7)	4.9	(509)	安山岩	裏面6か所、側面1か所穿孔。	S113覆土中	Q5 PL12
6	石皿(研石)	(27.1)	26.5	10.2	(1400)	花崗岩	皿部わざかなくぼみ。表面3か所穿孔。	表土中	Q6 PL12
7	圓石	(13.3)	(9.8)	3.7	(640)	花崗岩	表面2か所穿孔。	SD2覆土中	Q7 PL12

## 2 弥生時代の遺構と遺物

後期後半の住居跡4軒が確認された。これらの遺構は、調査区南部から東部にかけて分布し、台地裾部の平坦面に立地している。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

### (1) 壁穴住居跡

#### 第3号住居跡 (第8・9図)

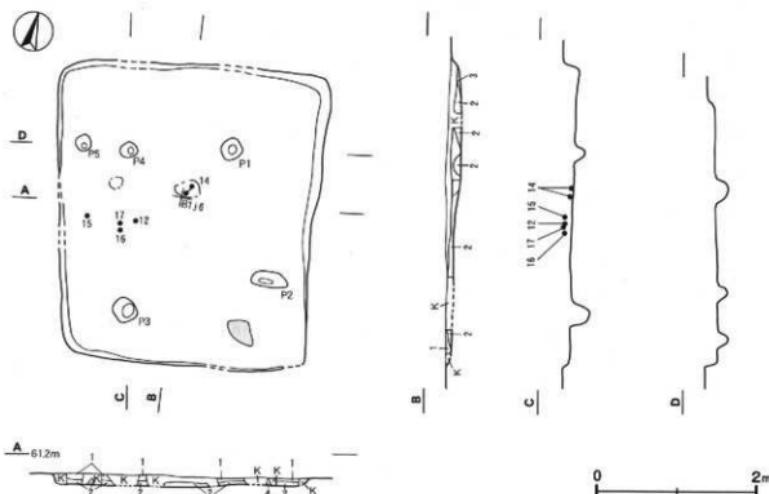
位置 調査区南部のB 1 j6 区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 南東コーナー部の壁と床は、一部遺存していないが、南北の長軸3.77m、東西の短軸3.32mの隅丸長方形である。南北の長軸をもとにした主軸方向は、N-12°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は最大で8cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による搅乱部分が多く、全体的に縮まりは弱い。硬化面は中央部付近でわずかに確認された。南東部の壁際付近に焼土の散布が見られたが、掘り込みや硬化面がなく、炉と判断できなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 5か所。P 1～P 4は深さ18～25cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 5の性格は不明である。



第8図 第3号住居跡実測図

**覆土** 4層に分層される。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

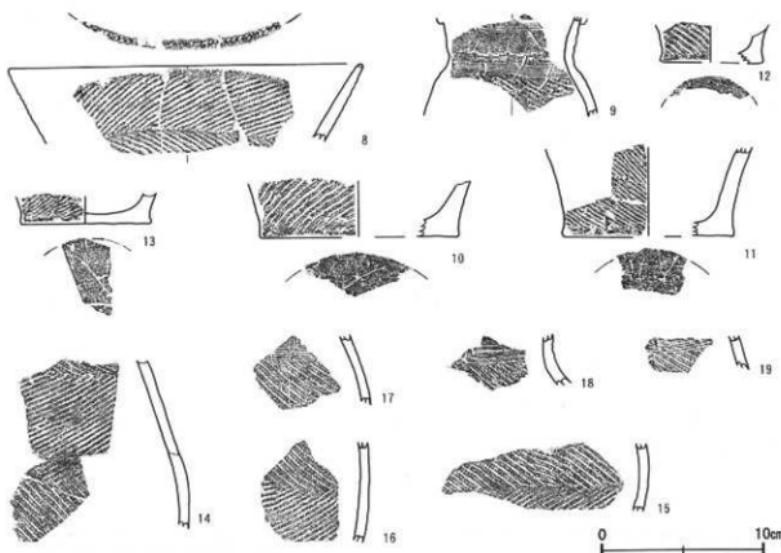
1 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子極微量  
2 褐色 ローム粒子中量

3 暗褐色 ロームブロック中量

4 灰褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量

**遺物出土状況** 弥生土器片23点（口縁部片1、頸部片1、胴部片17、底部片4）と、混入と考えられる土師器片27点、陶器片2点が出土している。中央部の覆土中層から床面にかけて、散在した状態で確認されており、すべて小破片である。第9図8・9は南西部の覆土中層から、12・15・16・17は中央部覆土下層から、14は中央部床面上から、それぞれ出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び構造の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



第9図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	種類	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	弥生土器	壺	[22.3]	(4.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口唇部横文短文。口縁部に斜削欠一縫(深挖り)。周文短文。赤状構成。	南西部覆土中	P8 3% PL7
9	弥生土器	壺	-	(6.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい、黄褐	普通	頂部に複数工具（6本程度）による削走文と波状文を施し、周辺との凹凸に重なる削走文深入。	南西部覆土中	P9 3% PL8
10	弥生土器	壺	-	(3.0)	[12.4]	石英・長石・輝母	にぶい褐色	普通	側面部斜削一縫(附加2条)。溝文捺文。底部木製底。	南西部覆土中	P10 3%
11	弥生土器	壺	-	(5.4)	[10.7]	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	側面部斜削一縫(附加2条)。溝文捺文。底部木製底。	覆土中	P11 3%
12	弥生土器	壺	-	(2.3)	[6.6]	石英・長石・雲母	灰褐色	普通	側面部斜削一縫(附加2条)。溝文捺文。底部木製底。	中央部覆土下層	P12 3%
13	弥生土器	壺	-	(1.7)	[8.2]	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	側面部斜削一縫(附加2条)。溝文捺文。底部木製底。	北西部覆土中	P13 3%

番号	種別	断面	断土	色調	施成	手作の特徴	出土位置	備考
14	弥生土器	素	石英・灰石・雲母	黒褐色	磨光削痕 柱頭切欠	縦斜め削成 横(底)2枚 縦文施成 斜削成	中央部底面	TP14
15	弥生土器	素	石英・灰石・雲母	黒	磨光削痕 柱頭切欠	縦斜め削成 横(底)2枚 斜削成 縦文施成	中央部覆土下層	TP15
26	弥生土器	素	石英・灰石・雲母	混	磨光	縦斜め削成 横(底)2枚 縦文施成 斜削成	中央部底土下斜	TP16
17	弥生土器	素	石英・灰石・雲母	にごり青褐色	磨光	縦斜め削成 横(底)2枚 縦文施成 斜削成	中央部底土下層	TP17 11.8
18	弥生土器	素	石英・灰石・雲母	にごり青褐色	磨光	縦斜め削成 横(底)2枚 縦文施成 斜削成	南西部壁土中	TP18 11.7
19	弥生土器	素	石英・灰石・雲母	灰青褐色	磨光	縦斜め削成 横(底)2枚 縦文施成 斜削成	覆土中	TP19

### 第5号住居跡（第10～12図）

位置 調査区東部のB1g9区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 勝作による搅乱が著しく、壁と床の遺存状況は良好ではなかった。南北の長径4.59m、東西の短径3.90mの楕円形である。出入口施設に伴うと考えられるビットと、炉の位置を結ぶ線をもとにした主軸方向は、N-25°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は17～26cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による搅乱部分が多く、全体的に継まりは弱い。硬化面は炉を掘むように、中央部付近で確認された。また、主に壁に沿った覆土下層から、焼土の散布と炭化材の分布が確認された。

炉 中央部からやや北寄りに付設されている。長径約90cm、短径45cmの楕円形で、ほとんど掘り込みではなく床面を直接使用した地床炉と考えられる。かま床に赤変硬化面ではなく、焼上と住居跡の主軸と直交する方向に掘えられたかき石2点が確認された。

ビット 5か所。P1～P4は、深さ25～60cmで一定ではないが、その規模と配置から主柱穴と考えられる。

P5は深さ15cmで、出入口施設に伴うビットの可能性が考えられる。

覆土 3層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともローム粒子を含んでいる。壁際から床面の傾斜に沿って緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

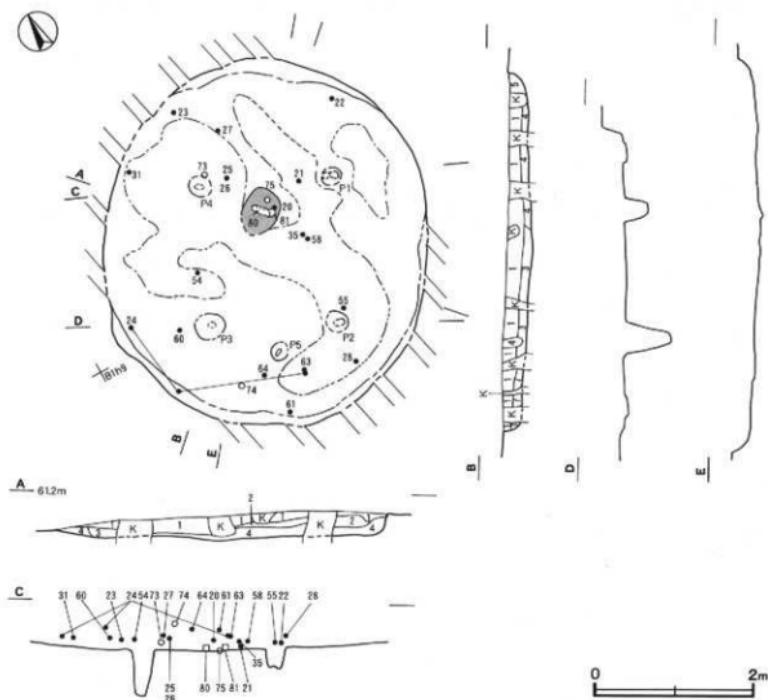
#### 土層解説

- 1 粘 黄色 ローム粘子少量、礫土粘子少量  
2 粘 黑色 ローム粘子少量、炭化粘子少量

- 3 粘 黑色 ロームブロック少量

遺物出土状況 比較的の形状が復元できた弥生土器5点、弥生土器片213点（口縁部片12、頸部片10、底部片10）、土製品3点（紡錘車）、焼成された粘土塊16点、炉石2点と、混入と考えられる土師器片10点が出土している。遺物の多くは小破片で、全域の覆土下層から床面で確認されている。第11図20・21は破損した状態で中央部の床面から、22・23は横位の状態で北部と北東部壁際の床面から、それぞれ出土している。24は南西部壁際付近から、散在した状態で出土した破片が接合したものである。73は北西部、74は南部覆土下層から、75は炉床から出土している。80・81は炉床上で直線状に並んで出土した。また、焼成された粘土塊は、北西部を中心とした覆土中で確認された。

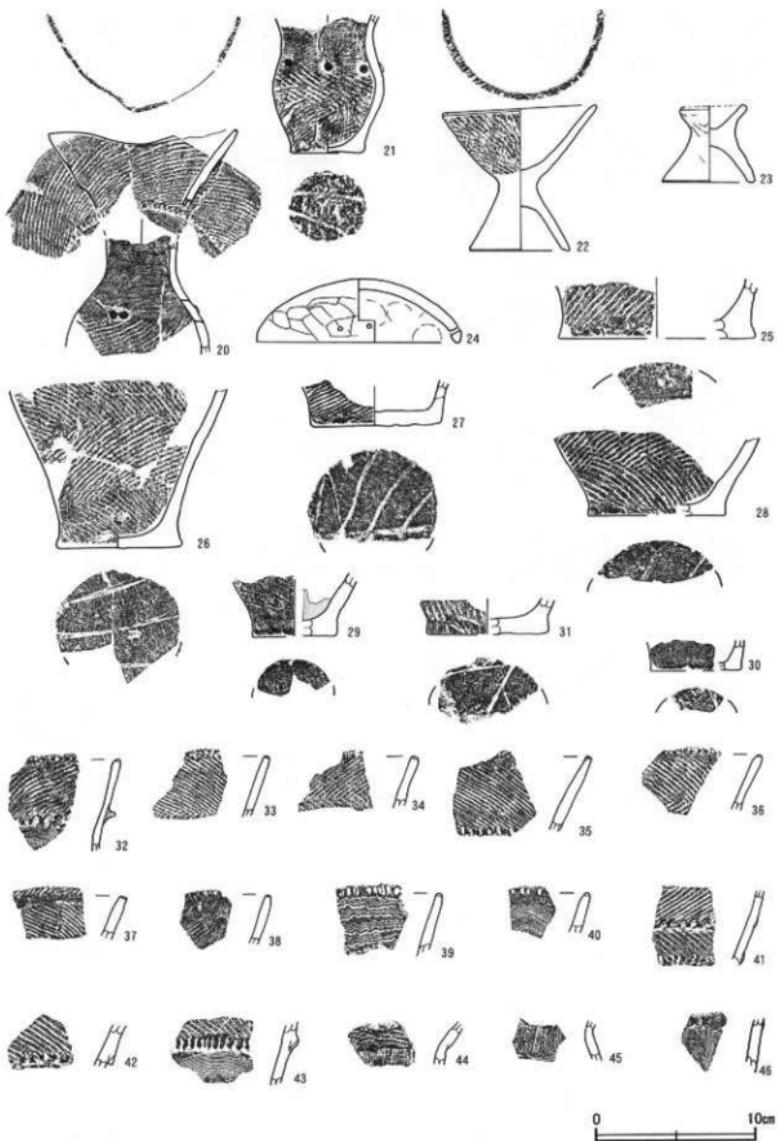
所見 壁に沿うように覆土下層から焼土や炭化材が確認されたことなどから、燒失住居と考えられる。また、蓋、高杯、ミニチュア土器、紡錘車など多様な出土遺物の出土状況からは、集落内における特異性がうかがわれる。さらに、焼成された粘土塊は、土器や土製品の生産に関わる過程で生まれた可能性が推定される。時期は、出土土器と造構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



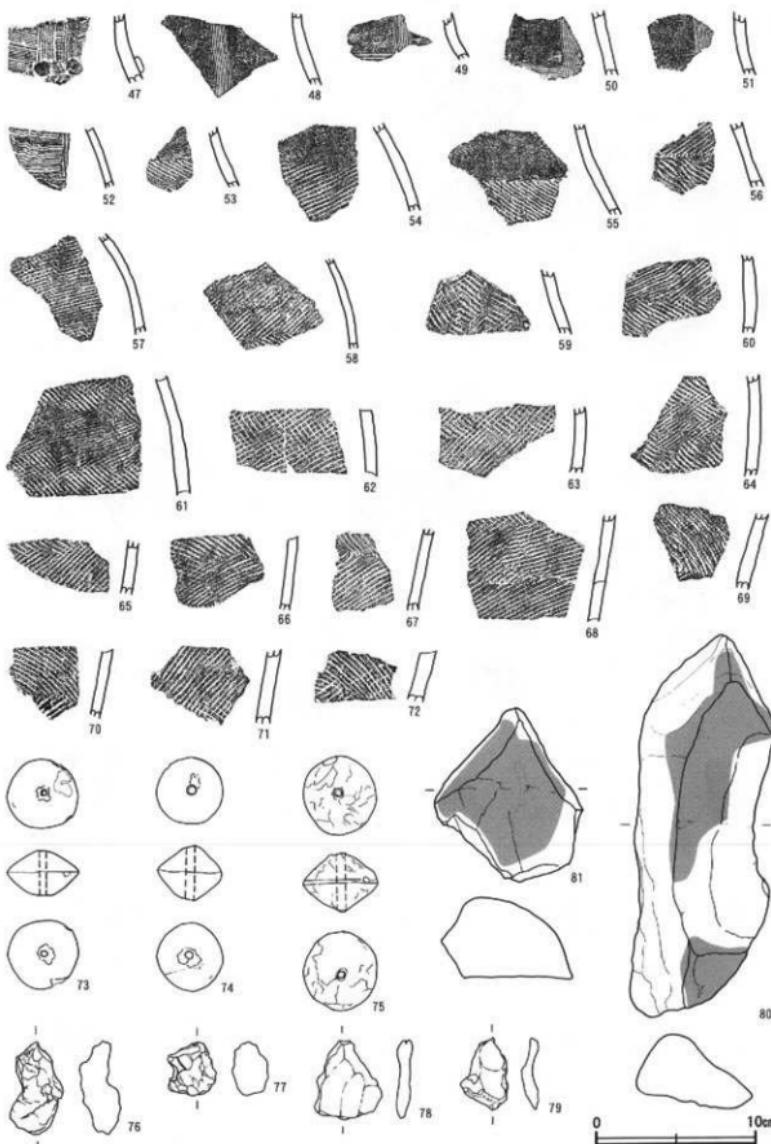
第10図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (第11~12回)

番号	種別	器種	口径	器高	底坪	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考	
20	弥生土器	壺	[11.6]	(12.5)	-	石英・長石 雲母	にぶい 黄緑	普通	口縁は片口弧。口部落と腹部垂れ条一箇(窓加2条)溝文。口部下端溝文斜形底凹。脚部垂れ状工具(6本着付)による張走文充填。底部下端に2箇1単位のボタン状の施付。	中央部覆土下 層	P20 PL8	30%
21	弥生土器	壺	-	(8.6)	4.4	石英・長石 雲母	にぶい 黄緑	普通	脚部垂れ状工具(8本着付)による波状文と、肩部との区間に模走文充填。ボタン状の施付。脚部斜面1箇(窓加2条)溝文無し。	中央部床面	P21 PL9	80%
22	弥生土器	高杯	9.6	9.0	6.2	石英・雲母	にぶい 黄緑	普通	口縁は溝文斜形底凹。外部外腹附加条一箇(窓加2条)溝文無し。脚部内面凹面によるナデ。外溝筋表面研磨。	北東部斜坡底 面	P22 PL9	100%
23	弥生土器	高杯	(4.1)	(4.8)	5.8	石英・雲母	にぶい 黄緑	普通	溝文。外筋内面、脚部内・外腹斜面によるナデ。外溝筋表面研磨。器台転用孔	北部斜坡底面	P23 PL9	20%
24	弥生土器	酒器	-	3.9	12.7	長石・雲母	にぶい 物	普通	外腹斜面によるナデ。内面に指痕あり。壺部付近に2箇1単位の施付。	南西端覆土下 層	P24 PL9	60%
25	弥生土器	壺	-	(3.8)	(12.4)	石英・長石	灰黄緑	普通	脚部附加条一箇(窓加2条)溝文無し。底辺有目地。	中央部覆土下 層	P25	5%
26	弥生土器	壺	-	(9.7)	7.8	石英・長石 雲母	灰褐	普通	脚部附加条一箇(窓加2条)溝文無し。羽状構造。底部木葉灰。	中央部覆土下 層	P26	10%
27	弥生土器	壺	-	(2.7)	8.2	石英・長石 雲母	にぶい 物	普通	脚部附加条一箇(窓加2条)溝文無し。底部木葉灰。	北部覆土下層	P27	5%
28	弥生土器	壺	-	(4.7)	[8.6]	石英・雲母	にぶい 物	普通	脚部附加条一箇(窓加2条)溝文無し。羽状構造。底部木葉灰。	南西端斜床面	P28	5%
29	弥生土器	壺	-	(3.9)	[5.3]	石英・長石 雲母	灰黄	普通	脚部附加条一箇(窓加2条)溝文無し。底部無文。	南東部覆土中 層	P29 PL9	5%
30	弥生土器	壺	-	(1.9)	[5.7]	石英・長石	灰黄緑	普通	脚部下端無文。底部木葉灰。	南西部覆土中	P30	5%



第11図 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第12図 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	石種	基部	底盤	胎土	色調	表面	手 法 の 特徴	出土位置	備考
31	弥生七器	鏡	-	灰色	打削	石英·漂母	二郎山	普通	圓形切削面 線 沟切2列 鋼製鏡身 鎌首延長	北西部腰土中	IP34
32	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身 以日本式切削下端の斜面上に鏡文有 年輪有 既に通称化のみ多岐繁文鏡	南東部腰土中	TP32 PL.7			
33	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身 鋼製鏡身 鋼製鏡身	南東部腰土中	TP33 PL.7			
34	弥生土器	壺	石英·灰石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身 鋼製鏡身	南西部腰土中	TP34			
35	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身 鋼製鏡身	中央部腰土下 47	手尖削除下 47	TP35 PL.7		
36	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身 鋼製鏡身	北西部腰土中	TP36			
37	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南東部腰土中	TP37			
38	弥生土器	壺	石英·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	北西部腰土中	TP38			
39	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南西部腰土中	TP39 PL.7			
40	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南東部腰土中	TP40			
41	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南東部腰土中	TP41			
42	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南東部腰土中	TP42			
43	弥生土器	壺	石英·長石	明褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南西部腰土下	TP43 PL.7			
44	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	明褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	中央部腰土下	TP44			
45	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	明褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	北東部腰土中	TP45			
46	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	明褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南東部腰土中	TP46			
47	弥生土器	壺	石英·長石	明褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) 鋼製鏡身	南東部腰土下	TP47 PL.8			
48	弥生土器	壺	石英·長石	灰褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP48			
49	弥生土器	壺	石英·長石	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	北東部腰土中	TP49			
50	弥生土器	壺	石英·長石	明褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP50 PL.8			
51	弥生土器	壺	石英·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP51			
52	弥生土器	壺	石英·漂母	灰黃褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP52			
53	弥生土器	壺	石英·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	北東部腰土中	TP53			
54	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	中央部腰土下 層	TP54			
55	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土下 層	TP55			
56	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土下 層	TP56			
57	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土下 層	TP57			
58	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	中央部腰土下 層	TP58			
59	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP59			
60	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土下 層	TP60			
61	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP61			
62	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	北東部腰土中	TP62			
63	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP63			
64	弥生土器	壺	石英·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP64			
65	弥生土器	壺	長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP65			
66	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP66			
67	弥生土器	壺	長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP67			
68	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP68			
69	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP69			
70	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP70			
71	弥生土器	壺	石英·長石·漂母	褐色	普通	四面削開丁子一層(剥り2列) による鏡身の鋸歯文施工	南東部腰土中	TP71			

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	効生土器	壺	石英・長石・雲母	橙	普通	側部附加条一箇(附加2条) 裏面支え。羽状構成。	南東部礫土中	DP72

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
73	轎鍵車	4.2	4.5	2.9	44.8	石英・長石	にぶい褐色	普通	断面形算盤玉状。指頭ナデ	北西部礫土下層	DP73 PL.9
74	轎鍵車	4.2	4.0	3.4	41.1	石英・長石	にぶい褐色	普通	断面形算盤玉状。指頭ナデ	南部礫土中層	DP74 PL.9
75	轎鍵車	4.9	4.6	3.7	53.4	石英・長石	にぶい褐色	普通	断面形算盤玉状。指頭ナデ	中央北部斜面	DP75 PL.9
76	粘土塊	5.8	3.4	2.4	23.7	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	指頭による押圧痕有り。	南西部礫土中	DP76
77	粘土塊	3.3	2.0	2.2	16.2	長石・雲母	にぶい黄褐色	普通	指頭による押圧痕有り。	南西部礫土中	DP77
78	粘土塊	4.9	4.1	1.0	10.5	石英	暗灰黃	普通	指頭による押圧痕有り。	北西部礫土中	DP78
79	粘土塊	4.4	2.9	1.0	7.9	石英・雲母	黄灰	普通	指頭による押圧痕有り。	北西部礫土中	DP79

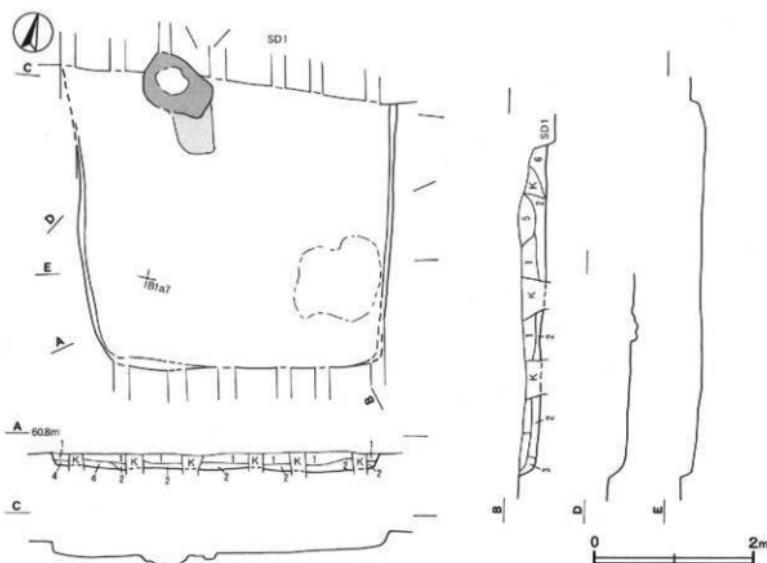
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
80	伊石	24.0	9.2	4.7	1210	花崗岩	柱状の自然巻曲面。發熱痕有り。一部赤変。	炉床中央部	Q80
81	伊石	11.0	9.5	5.3	490	砂岩	発熱痕有り。ヒビにより斷裂。一部赤変および焼付化。	炉床東部	Q81

### 第7号住居跡 (第13~14図)

位置 調査区中央部のB 17区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 北側の約3分の1は、第1号溝に掘り込まれている。また、壁と床の一部は、耕作による著しい搅乱を受けている。

規模と形状 南部の壁はほとんど遺存していないが、南北の長軸は3.90mが確認され、東西の短軸3.71mであ



第13図 第7号住居跡実測図

ることから、隅丸長方形と考えられる。南北の長軸と炉の位置をもとにした主軸方向は、N-18°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は15~20cmである。

**床** ほぼ平坦である。耕作による擾乱部分が多く、全体的に縮まりは弱い。硬化面は南東部付近でわずかに確認された。

**炉** 北西部寄りに付設されている。北側部分は第1号溝との重複によって掘り込まれ、規模が明確でないが、長径約95cm、短径約65cmの不整椭円形を呈し、炉床部の深さは約15cmである。炉床面は全体的に赤変し、中央部に硬化面が見られた。また、がに接して南側部分に焼土が確認された。

**ピット** 確認されなかった。

**覆土** 6層に分層される。全体に水平な堆積状況を示すとともに、第4~6層には焼土粒子や炭化粒子などが含まれ、ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1	黒褐色	ローム粒子少量
2	暗褐色	ロームブロック中量
3	褐色	ロームブロック多量

4	黒褐色	焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子少量
5	黒褐色	幾士粒子・ローム粒子中量
6	黒褐色	幾士粒子・ローム粒子中量

**遺物出土状況** 弥生土器片2点（胴部片、底部片）が出土している。遺物はいずれも小破片で、第14図82・83は覆土中から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



第14図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
82	弥生土器	壺	-	C.0	[15.6]	石英・長石・雲母	にびり相	普通	軽部附加条一種(附加2条) 黄文施文、底部本業施、複土中	PS2	5K

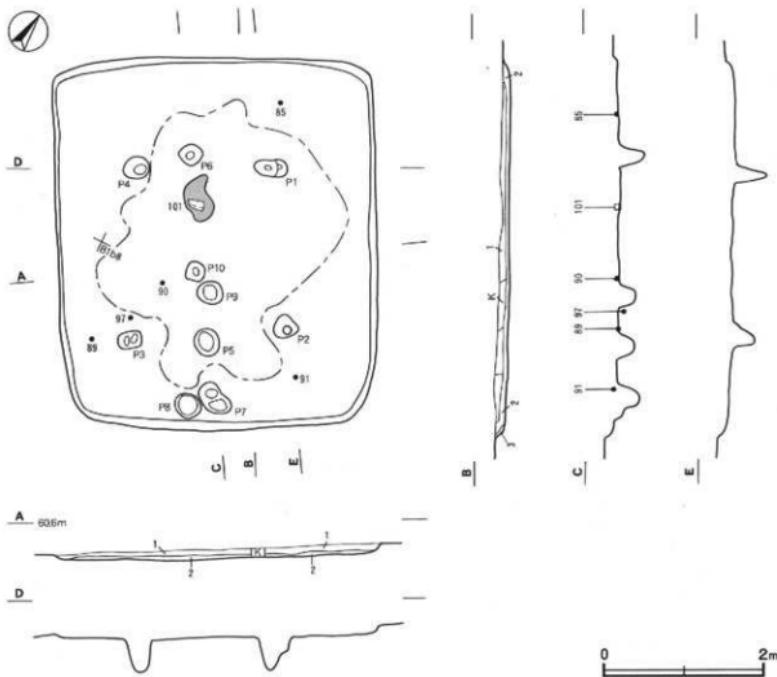
番号	種別	器種	胎土		色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
83	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	-	褐色	普通	軽部附加条一種(附加2条) 黄文施文、羽状構成	北東部複土中	TP83

#### 第9号住居跡（第15・16図）

**位置** 調査区中央部のB 1 a8区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**規模と形状** 南北の長軸4.62m、東西の短軸4.02mの隅丸長方形である。出入口施設に伴うと考えられるビットと、炉の位置を結ぶ線をもとにした主軸方向は、N-28°-Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は4~12cmである。

**床** ほぼ平坦で、主柱穴と考えられる4か所のピットに開まれた内側を中心にして、炉を囲むように踏み固められた硬化面が見られる。



第15図 第9号住居跡実測図

**炉** 中央部からやや北西寄りに付設されている。長径約60cm、短径約35cmの不整円形で、ほとんど掘り込みはなく床面を直接炉床とした地床炉と考えられる。炉床に硬化面は確認されず、焼土と住居跡の主軸と直交する方向に据えられた炉石1点が確認された。

**ピット** 10か所。P 1～P 4の深さは25～42cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P 5とP 6は深さ20cmと32cmで、位置的に棟持ち柱のピットと想定される。P 7とP 8は深さ25cmほどで、出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。P 9とP 10の性格は不明である。

**覆土** 3層に分層される。壁際から緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

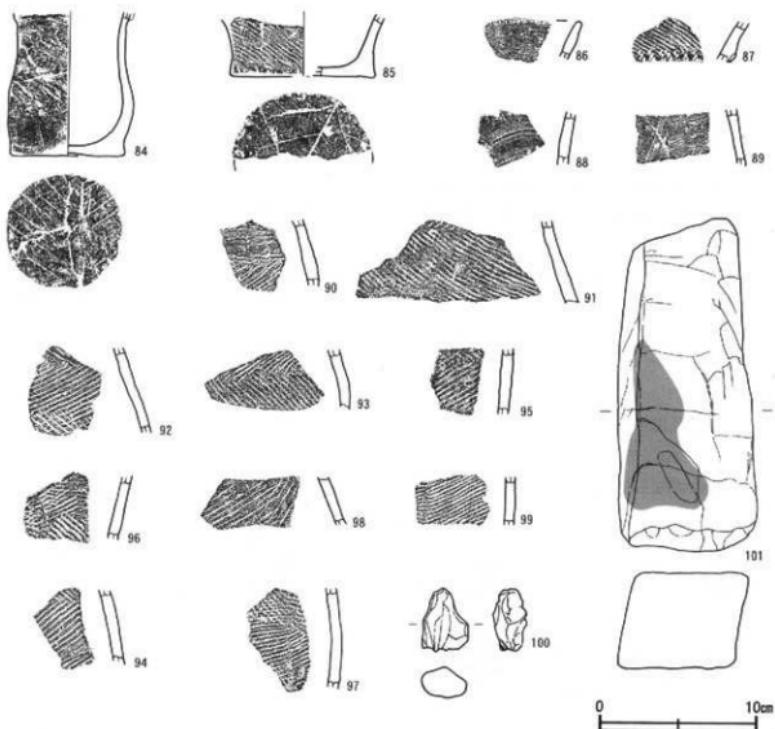
#### 土層解説

- |   |     |                      |   |     |           |
|---|-----|----------------------|---|-----|-----------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子細微量 | 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化物細微量     |   |     |           |

**遺物出土状況** 比較的形状が復元できた弥生土器1点。弥生土器片41点（口縁部片2、頸部片3、胴部片35、底部片1）、焼成された粘土塊2点、炉石1点と、混入と考えられる土師器片17点が出土している。遺物量は少なく、ほとんどが小破片である。主に中央部から南側を中心とする覆土中層から床面上で確認されている。床面上から出土した遺物は、全体量に比較して少ない。第16図84は、南東部の覆土中から散在した状態で確認

された。85・89～91・97は、床面から出土している。101は南側のが床から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



第16図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	断土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
84	弥生土器	壺	-	(9.0)	7.2	長石	にじみ・褐	普通	輪距削加条一種(周辺2条) 織文施文。底部木葉痕。	南東部覆土中 PL.9	625
85	弥生土器	壺	-	(4.0)	[9.1]	石英・長石・雲母	にじみ・褐	普通	輪距削加条一種(周辺2条) 織文施文。底部木葉痕。	北東部床面 PL.9	58

番号	種別	器種	胎 土	色 調	燒 成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
86	弥生土器	壺	石英・雲母	にじみ・赤褐色	普通	口縁部に連続するキズモ施文。	北西部覆土中 TP86	PL.7
87	弥生土器	壺	長石・雲母	にじみ・橙	普通	口縁部に附加条一種(周辺2条) 織文施文。口縁部下部に織文質漆押印。	覆土中 TP87	PL.7
88	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明赤褐色	普通	底部に織文底工具(5本櫛面)による削除状施文。	南西部覆土中 TP88	PL.8
89	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・赤色 粒子	にじみ・黄褐色	普通	底部に織文底工具(8本櫛面)による削除状施文と波状文施文。	南西部床面 TP89	PL.8

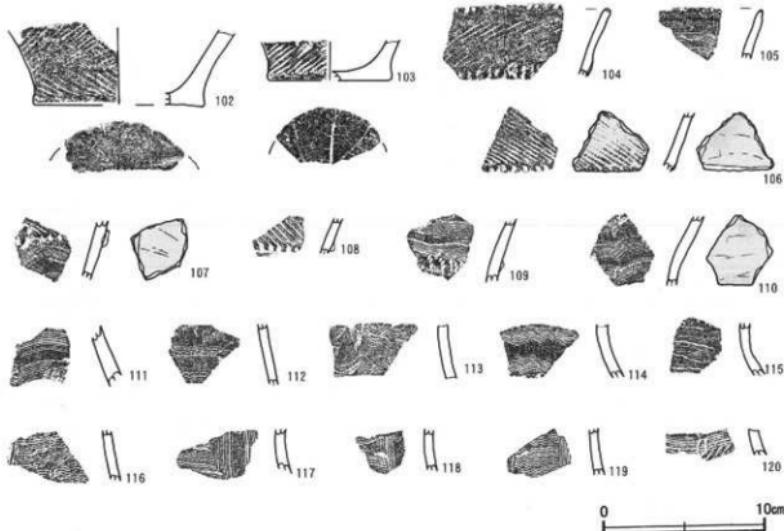
番号	種別	器種	胎 土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
90	弥生土器	壺	石英・長石	黒褐色	普通	網目彫痕状工具（6本櫛）削痕直状、網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。	中央部床面	TP90 PL.8
91	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	南東部床面	TP91
92	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	南東部覆土中	TP92
93	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	北西部覆土中	TP93
94	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	南東部覆土中	TP94
95	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	浅黃褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	北西部覆土中	TP95
96	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	南東部覆土中	TP96
97	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。羽状焼成。	南西部床面	TP97
98	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。	南東部覆土中	TP98
99	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	網目附加条一種（附加2条）圓文旋文。	南東部覆土中	TP99

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎 土	色 調	焼成	特 殊	出土位置	備 考
100	粘土塊	3.9	2.8	2.1	13.2	長石・雲母・赤色鐵子	にぶい褐色	普通	指頭による押圧痕有り。	北西部覆土中	TP100

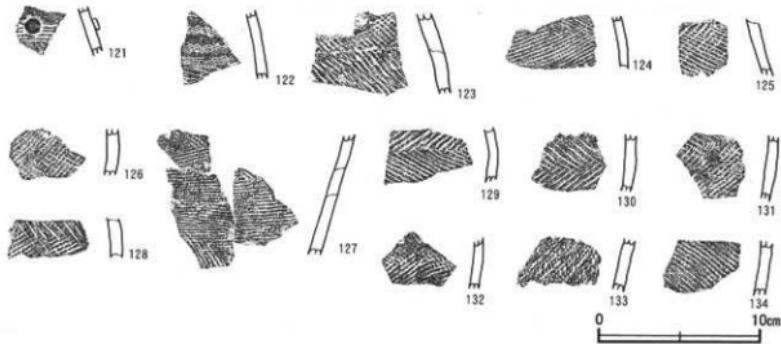
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重 量	材 質	特 殊	出 土 位 置	備 考
101	伊石	20.7	8.7	6.0	1810	砂岩	柱状の自然離散形。波状面有り。ヒビ入り割裂。一部茶色。	炉床中央部	Q101

## (2) 遺構外出土遺物 (第17・18図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第17図 遺構外出土遺物実測図(1)



第18図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第17・18図)

番号	種別	器種	口径	高さ	底形	胎土	色調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
102	弥生土器	壺	-	(4.5)	[10.6]	石英・長石・ 雲母	浅黄褐	普通	側面削加条一様(附加2条) 滲文彫文、羽状構成。底部木葉柄。	S110覆土中	PI02 5%
103	弥生土器	壺	-	(2.5)	[7.5]	石英・長石・ 雲母	にぶい黄	普通	側面削加条一様(附加2条) 滲文彫文。底部木葉柄。	S112覆土中	PI03 5%

番号	種別	器種	胎 土	色 調	焼 成	手 法 の 特 徴	出 土 位 置	備 考
104	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部と口幅部下端再文彫り焼成。口縁部に削加条一様(附加2条) 滲文彫文。	S110覆土中	TP104 PL.7
105	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	口縁部渦巻文彫体焼。口縁部削加工具(5本横衡)による波状文彫。	S112覆土中	TP105
106	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい赤褐	普通	複合口縁部削加条一様(附加2条) 滲文彫文。口縁部・渦巻文彫体焼行。	S113覆土中	TP106 波状渦巻文 赤影 PL.7
107	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	複合口縁部削加条一様(附加2条) 渗文彫文。口縁部下端焼成。底部渦巻文彫工具(10本横衡)による渦巻文彫。	S118覆土中	TP107 游走渦巻文影 PL.7
108	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒褐	普通	複合口縁部削加条一様(附加2条) 渗文彫文。口縁部下端渦巻文彫体焼。	S110覆土中	TP108
109	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	口部渦巻文彫工具(8本横衡)による渦巻文彫。下端部に渦巻文彫。	S118覆土中	TP109 PL.7
110	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加工具(8本横衡)による波状文彫。	S111覆土中	TP110 游走渦巻文影
111	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	側面削加工具(8本横衡)による波状文彫。	S112覆土中	TP111
112	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐	普通	側面削加工具(5本横衡)による波状文彫。	S113覆土中	TP112
113	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐	普通	側面削加工具(8本横衡)による波状文彫。	S116遊K表土中	TP113 PL.8
114	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐	普通	側面削加工具(8本横衡)による波状文彫。	S113覆土中	TP114
115	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加工具(5本横衡)による波状文彫。	S118覆土中	TP115
116	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加工具(4本横衡)による波状文彫。	S110覆土中	TP116
117	弥生土器	壺	石英・長石	黒褐	普通	側面削加工具(5本横衡)によるストリップ状の横区画と波状文彫。	S118覆土中	TP117 PL.8
118	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	浅黄	普通	側面削加工具(6本横衡)によるストリップ状の横区画と波状文彫。	S113覆土中	TP118
119	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加工具(8本横衡)による横区画と波状文彫。	S118覆土中	TP119
120	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	側面削加工具(4本横衡)による横区画。頭部下端に強烈の区画文とボトムの鋸歯状削加条。	S110覆土中	TP120
121	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加工具(4本横衡)による波状文彫。頭部下端に強烈の区画文とボトムの鋸歯状削加条。	S122覆土中	TP121
122	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	側面削加工具(4本横衡)による波状文彫。	S124覆土中	TP122
123	弥生土器	金	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	側面削加条一様(附加2条) 渗文彫文、羽状構成。	S111覆土中	TP123
124	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐灰	普通	側面削加条一様(附加2条) 渗文彫文。羽状構成。	S118覆土中	TP124
125	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加条一様(附加2条) 渗文彫文。羽状構成。	S118覆土中	TP125
126	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰褐	普通	側面削加条一様(附加2条) 渗文彫文、羽状構成。	S118覆土中	TP126
127	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい黄褐	普通	側面削加条一様(附加2条) 渗文彫文。羽状構成。	S111覆土中	TP127
128	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	側面削加条一様(附加2条) 渗文彫文。羽状構成。	S110覆土中	TP128

番号	種別	器種	胎 土	色 調	模様	手 法 の 特徴	出土位置	備考
129	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐色	滑面	壓搾成型・手捏ね(2点) 磨文底なし、滑面側底。	S12覆土中	TP129
130	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐色	普通	壓搾成型・手捏ね(2点) 磨文底なし、滑面側底。	S12覆土中	TP130
131	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐色	普通	壓搾成型・手捏ね(2点) 磨文底なし、滑面側底。	S12覆土中	TP131
132	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐色	普通	「手捏ね(2点) 磨文底なし、滑面側底。」	S13覆土中	TP132
133	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐色	普通	壓搾成型・手捏ね(2点) 磨文底なし、滑面側底。	S13覆土中	TP133
134	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐色	普通	壓搾成型・手捏ね(2点) 磨文底なし、滑面側底。	直上側土表上 中	TP134

### 3 古墳時代の遺構と遺物

中期後半から後期前半の堅穴住居跡8軒が確認された。これらの遺構は、調査区南部から東部にかけて分布し、台地断部の平坦面に立地している。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

#### (1) 坚穴住居跡

##### 第1号住居跡（第19図）

位置 調査区南部のC-1a4区に位置し、台地断部の平坦面に立地している。

重複関係 北西部は、第1号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 南部の大半は調査区域外に位置し、確認された南北軸2.63m、東西軸4.61mの方形または長方形と推定される。竈の位置と南北軸をもとにした主軸方向は、N-4°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は6~14cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による擾乱が著しく、硬化面は竈の付近でわずかに確認された。

竈 北壁の中央部に付設されていた。焚き口部から煙道部までの長さは80cmで、燃焼部は長軸65cm、短軸50cmの丸長方形を呈している。火床面の掘り込みではなく、床面と同じ高さで使用したと考えられる。火床面には焼土と赤変部分が存在したが、硬化面は確認されなかった。煙道部は壁外への掘り込みがほとんど見られず、燃焼部から外傾して立ち上がっている。袖部は最大幅が132cmで、砂質粘土で構築されている。覆土は6層となり、焼土粒子と袖部と天井部の構築材と考えられる砂粒や粘土粒子を含む層が見られた。第7~10層は袖部の構築材で、火床部に面する内側は赤変および硬化していた。

##### 遺土層解説

- 1 焼土褐色 焼土粒子中量、コーム粒子少量
- 2 灰褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 灰褐色 烧土粒子中量、ロームブロック少量
- 4 灰褐色 砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量
- 5 灰褐色 烧土粒子・砂粒中量、ローム粒子少量

- 6 灰褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 7 にぶい褐色 砂粒中量、コーム粒子・焼土粒子・粘土粒子微量
- 8 にぶい褐色 砂粒多量、粘土粒子中量、コーム粒子微量
- 9 灰褐色 ロームブロック・砂粒少量、炭化粒子微量
- 10 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量

ピット 確認されなかった。

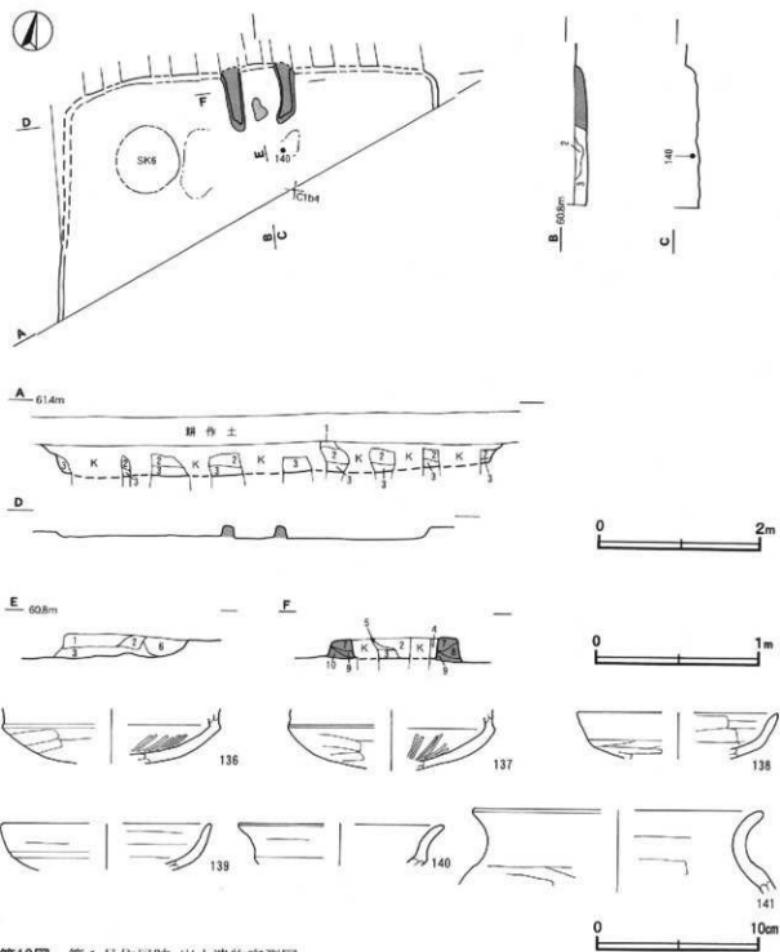
覆土 3層に分層される。擾乱部分が多いため明確でないが、全体に水平な堆積状況を示すとともに、各層には焼土粒子や炭化粒子などが含まれていることから、人為堆積と考えられる。

##### 土層解説

- 1 黑褐色 ローム粒子微量、炭化粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量、焼土粒子微量
- 3 灰褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量

遺物出土状況 土師器片40点（不織26、織類14）、須恵器片1点（环）と、流れ込みと考えられる弥生土器片3点が出土している。すべて小破片で、全城の覆土中から散在した状態で確認されたが、擾乱により原位置を保っているものはほとんど存在しなかった。第19図140は、北部廻前方の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から古墳時代後期前半と考えられる。



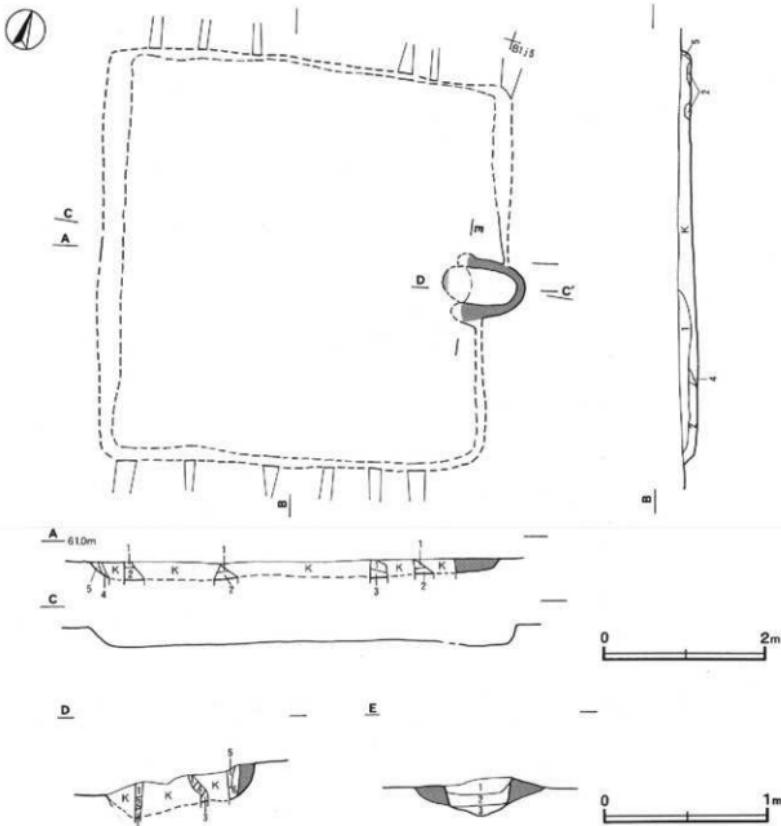
## 第2号住居跡（第20・21図）

**位置** 調査区南部のB 1\_j4 区に位置し、台地据部の平坦面に立地している。

**規模と形状** 耕作による擾乱が著しく、壁や床面の遺存状況は極めて不良である。部分的に確認された南北軸約5.09m、東西軸5.05mの方形と推定される。竈の位置と東西軸をもとにした主軸方向は、N-77°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は最大で25cmである。

**床** ほぼ平坦である。耕作による擾乱が著しく、全体的に縮まりは弱い。

**竈** 東壁の中央部に付設されていた。擾乱のため規模が明確でないが、焚き口部から煙道部までの推定される長さは95cmで、燃焼部は長径85cm、短径40cmの梢円形を呈している。火床面は床面を20cmほど掘りくぼめており、焼土と赤変部分が確認された。煙道部は壁外へ35cm掘り込み、火床部から直立している。両袖の上部は耕



第20図 第2号住居跡実測図

作により削平されているが、最大幅は90cmである。袖部は床面を掘り下げて基底部とし、砂質粘土を積み上げて構築している。覆土は6層からなり、焼上粒子と袖部と天井部の構築材と考えられる砂粒や粘土粒を含む層が見られた。特に、第6層は袖部の構築材を含んでいる。

#### 土壤層解説

- |         |                        |       |                   |
|---------|------------------------|-------|-------------------|
| 1 こいば褐色 | 燒土粒子・砂粒中量、ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 灰褐色 | 砂粒中量、ローム粒子・燒土粒子少量 |
| 2 赤褐色   | ローム粒子・燒土粒子・泥炭中量、炭化粒子少量 | 5 灰褐色 | ローム粒子・燒土粒子・砂粒少量   |
| 3 墓褐色   | ローム粒子中量、燒土粒子・泥炭少量      | 6 灰褐色 | 砂粒・粘土粒多量、ローム粒子少量  |

ピット 確認されなかった。

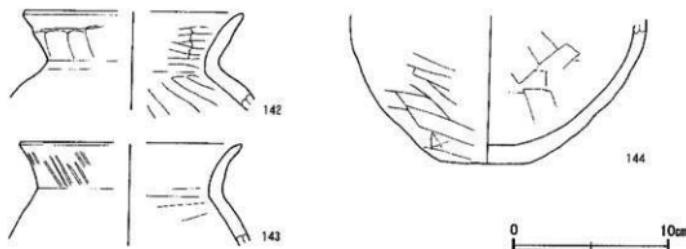
**覆土** 5層に分層される。搅乱部分が多いため明瞭でないが、全体に水平な堆積状況を示すとともに、各層には焼上粒子や炭化粒子などが含まれていることから、人為堆積と考えられる。

#### 土壤解説

- |       |                   |       |                |
|-------|-------------------|-------|----------------|
| 1 墓褐色 | ローム粒子中量           | 4 灰褐色 | ロームブロック・燒土粒子少量 |
| 2 墓褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子・泥炭微量 | 5 灰褐色 | ロームブロック少量      |
| 3 墓褐色 | 燒土粒子中量、ロームブロック少量  |       |                |

**遺物出土状況** 上師器片113点(坏部30、甕瓶77、壙6)、須恵器片1点(壙)と、流れ込みと考えられる弥生土器片41点が出土している。すべて小破片で、全城の覆土中から散在した状態で確認された。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から古墳時代後期前半と考えられる。



第21図 第2号住居跡出土遺物尖端図

第2号住居跡山上遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	剖面	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
142	土師器	甕	13.97	(6.5)	-	右高・長弓 青白・赤褐色 粒子	に高い・幅 普通	口縁部内・外山根ナギ。体部内・外面へラナギ。	南東部覆土中	P142	5%
143	土師器	甕	14.0	(6.5)	-	右高・長弓 青白・赤褐色粒子	に高い・幅 普通	口縁部内・外山根ナギ。口縁部ミガキ。体部内・外面へラナギ。	南東部覆土中	P143	5%
144	土師器	甕		(0.3)	6.0	右高・長弓 青白	に高い・赤褐 青白	青白 体部内・外面へラナギ。	南東部覆土中	P144	5%

#### 第4号住居跡 (第22図)

**位置** 調査区南部のB 1\_j6区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**規模と形状** 南部の大半は調査区域外に位置するとともに、耕作による搅乱が著しく、壁と床面の遺存状況は極めて不良である。部分的に確認された床面は、南北軸1.10m、東西軸2.76mの方形または長方形と推定される。南北軸をもとにした十軸方向は、N -10° Eである。壁の立ち上がりは確認されなかった。

**床** 搅乱部分が多く遺存状態は不良であるが、ほぼ平坦と考えられる。硬化面が部分的に確認された。

**竈** 確認されなかった。

**ピット** 確認されなかった。

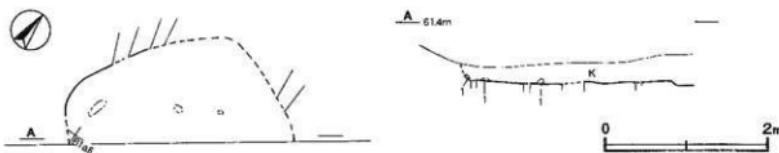
**覆土** 床面上部の1層だけが確認された。遺存部分がわずかで、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

1 桐 色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片2点(甕類)と、流れ込みと考えられる弥生土器片2点が段上中から出土している。

**所見** 遺存状況が不良で出土土器が細片のため、時期の詳細は不明である。推定される主軸方向が、調査区内の占墳時代後期の住居跡とほぼ一致することから判断して同時期と考えられる。



第22図 第4号住居跡実測図

#### 第8号住居跡(第23~25図)

**位置** 調査区中央部のB 1 d1区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**規模と形状** 長軸4.26m、短軸3.83mの長方形と推定される。竈と出入口施設に伴うピットの位置をもとにした主軸方向は、N-151°Wである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は10~35cmである。

**床** ほぼ平坦である。主柱穴と考えられるP 1~P 4の内側および竈の前面には、踏み固められた硬化面が確認された。壁溝は、北西および南東コーナー部を除いた部分にめぐっている。深さは3~10cmである。

**竈** 南西壁のほぼ中央部に付設されていた。焚き口部から煙道部までの長さは90cmで、火床部は長径80cm、短径50cmの楕円形を呈している。火床面の掘り込みは確認されず、床面をそのまま同じ高さで使用したと考えられる。火床面には焼土と赤変部分が存在したが、硬化面は確認されなかった。煙道部は壁外への掘り込みが見られず、火床部から外傾して立ち上っている。袖部は最大幅が95cmで、砂質粘土で構築されている。覆土は4層からなり、焼土粒子と袖部と天井部の構築材と考えられる砂粒や粘土粒を含む層が見られた。第5~9層は袖部の構築材で、燃焼部に面する内側は硬化していた。

#### 土層解説

1 桐 色	炭化粒子少量、ローム粒子、焼土粒子微量	6 灰 黄 色	砂粒多量、粘土粒子少量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 灰 色	焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子、砂粒少量、ローム粒子微量	7 灰 黄 色	ローム粒子、砂粒少量、焼土粒子微量
3 二重漆塗	粘土粒子、砂粒中量、ローム粒子、焼土粒子少量、炭化粒子微量	8 灰 黄 色	ローム粒子、砂粒、粘土粒子少量
4 赤 桐 色	炭土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量	9 灰 黄 色	ロームブロック少量
5 灰 梅 色	砂粒中量、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子、粘土粒子微量		

**ピット** 6か所。P 1~P 4の深さは35~56cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P 5は深さ18cmで北東壁隣寄りの中央部に位置し、竈と向い合っていることなどから、出入口施設に伴うピットと考えられる。P 6は径80cm、深さ16cmで、竈左側の南東コーナー部に位置しており、貯蔵穴と考えられる。

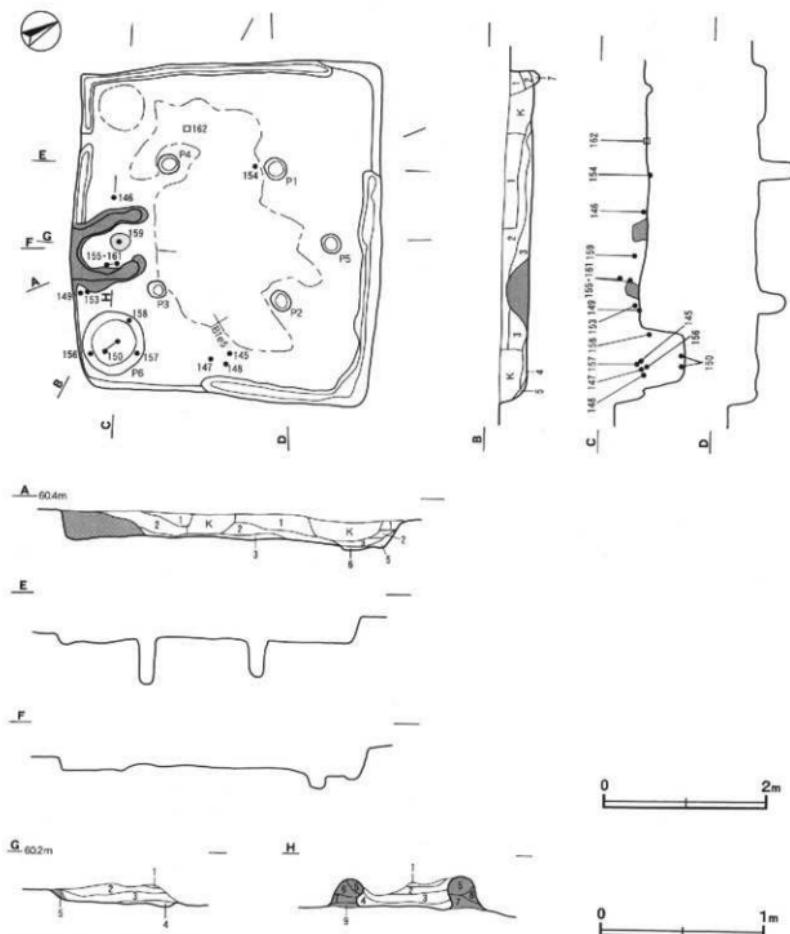
**覆土** 7層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともロームブロックまたはローム粒子を含んでいる。壁

際から緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

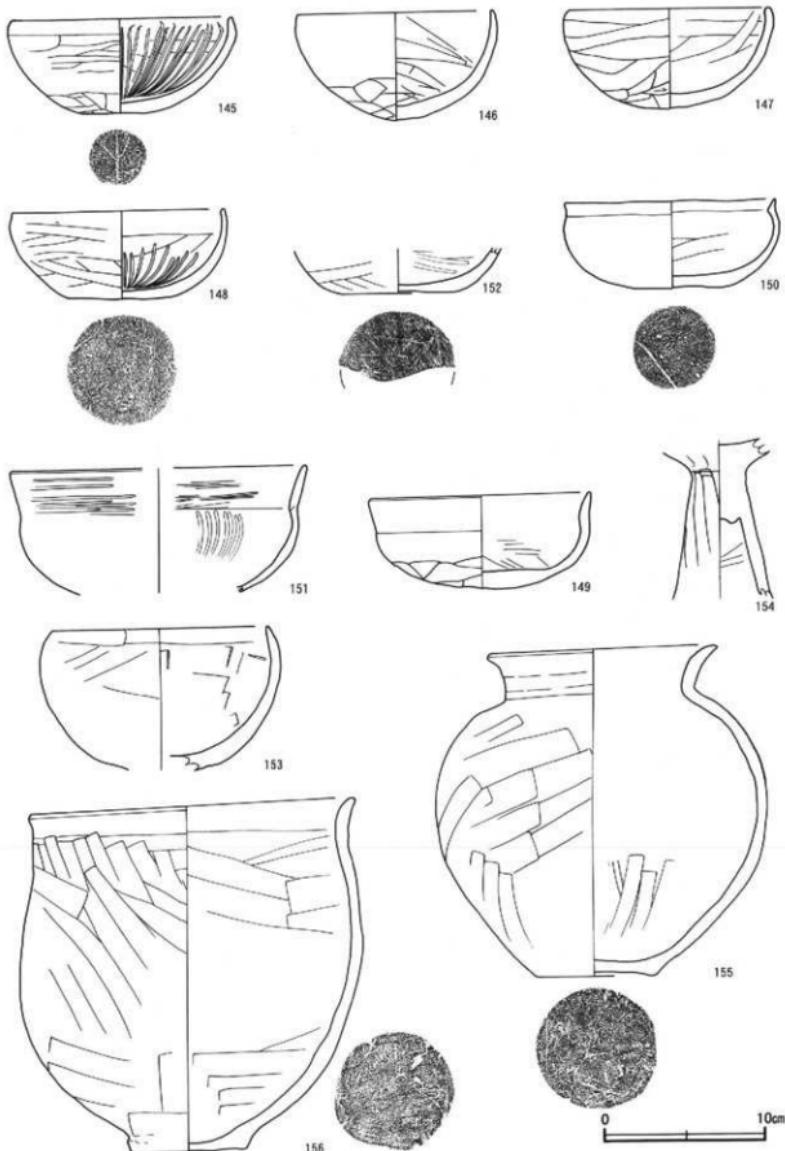
**土層解説**

- |       |                       |         |                       |
|-------|-----------------------|---------|-----------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量     | 5 黄色    | ロームブロック中量             |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 にじみ褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 黄褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量、焼土粒子少量 | 7 にじみ褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子極微量       |
| 4 緑褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量          |         |                       |

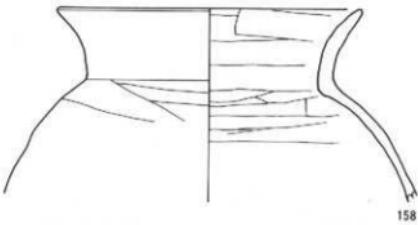
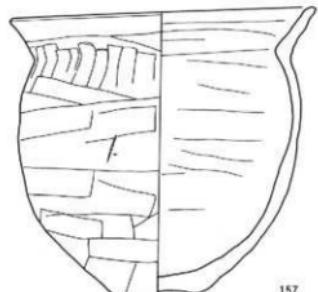
**遺物出土状況** 土師器片132点（壺・瓶類32、高壺1、甕類98、瓶1）と、流れ込みと考えられる弥生土器片21点が出土している。また、自然縫2点が覆土中から出土している。遺物は、主に南西部の竈と貯蔵穴と考



第23図 第8号住居跡実測図

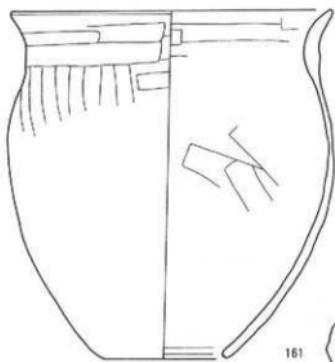


第24図 第8号住居跡出土遺物実測図(1)

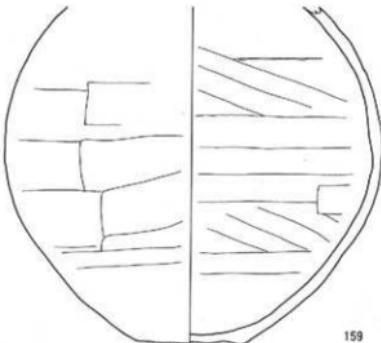


157

158



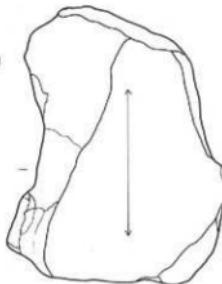
161



159



160



第25図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

えられるP 6周辺に集中し、覆土下層から床面で出土している。第24図145~149は、東部から西部の床面で、150はP 6の底面で確認された。155・156、第25図157~159・161は、竈の上部と周辺から出土している。

**所見** 遺構および遺物の遺存状況が比較的の良好で、竈と貯蔵穴が明確に確認された。特に、竈は南西壁のほぼ中央部に付設され、壁外への掘り込みは見られなかった。形態から初期の竈と判断される。時期は、出土土器および竈の形態から、古墳時代中期末葉と考えられる。

第8号住居跡山上出土遺物観察表(第24・25図)

番号	種別	被覆	口径	深さ	底径	高さ	色	調査	標示	手 玄 の 特 徴	出土位置	備 考
145	土師器	灰	13.8	6.0	3.0	石英・長石	灰褐色	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P145 P146		
146	土師器	灰	12.2	6.7	-	長石・陶母	ぶい身	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P146 P147	100%	
147	土師器	灰	12.4	6.2	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P147 P148	100%	
148	土師器	灰	13.3	5.5	8.7	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P148 P149	95%	
149	土師器	灰	13.6	5.9	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P149 P150	100%	
150	土師器	灰	13.1	6.4	6.0	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P150 P151	98%	
151	土師器	灰	(18.2)	(7.7)	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	北西側壁中 P151	35%	
152	土師器	灰	(2.7)	(8.0)	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	北東側壁中 P152	40%	
153	土師器	灰	13.5	8.9	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P153 P154	90%	
154	土師器	灰	-	(9.9)	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	北内部火窓 P154	30%	
155	土師器	灰	13.8	35.5	7.4	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P155 P156	95%	
156	土師器	灰	20.3	21.9	7.3	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	P6壁上・厨 P156	90%	
157	土師器	灰	16.9	17.7	5.5	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	P6壁上・厨 P157	95%	
158	土師器	灰	18.8	(12.0)	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	P6壁上・厨 P158	10%	
159	土師器	灰	-	(20.9)	6.5	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	竈面下中 P159	45%	
160	土師器	灰	-	(3.7)	-	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	北内部火窓 P160	10%	
161	土師器	灰	19.7	21.6	7.5	石英・長石	削除	削除	口縁部外側斜手すり、底面に黒い色斑、底面に凹凸がある。心窓	東部床面 P161 P162	95%	

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	標示	出土位置	備 考
162	磁石	17.2	13.8	6.2	1970	砂岩	自然磁素材、表面と背面を研磨して使用		北西側床面	Q162

### 第10号住居跡 (第26図)

**位置** 調査区北部のA 1 i8 Kに位置し、台地標面の平坦面に立地している。

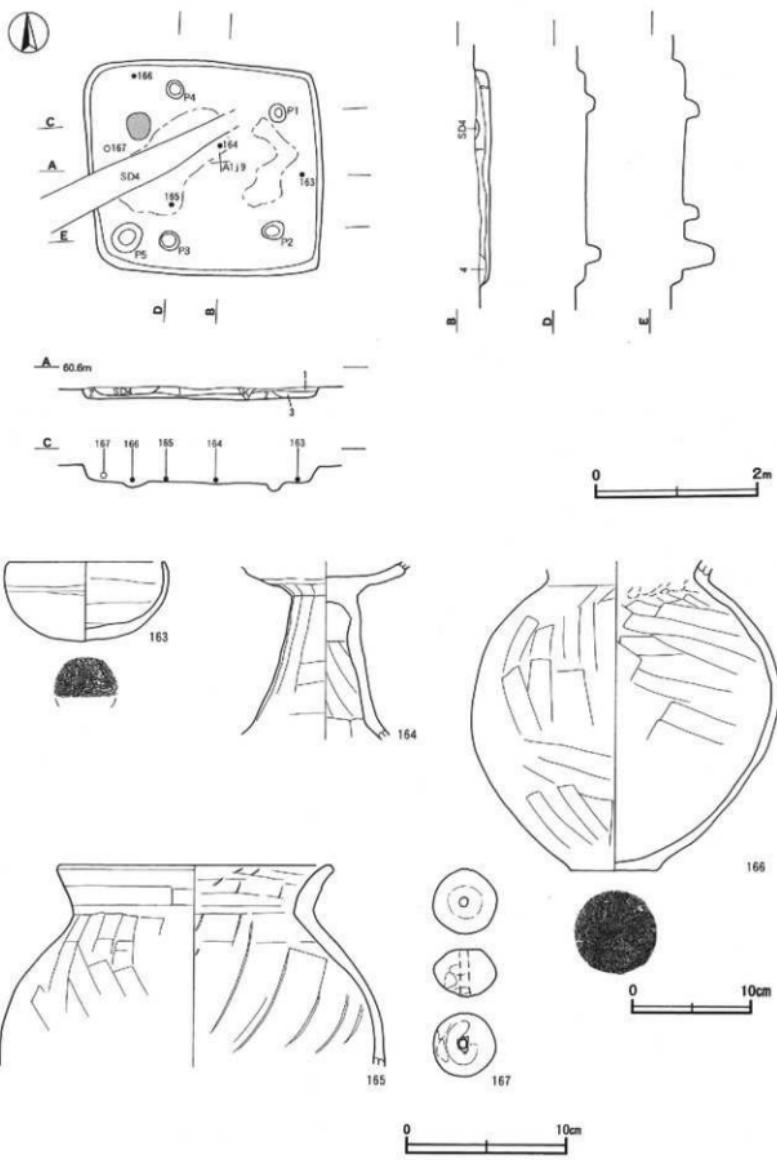
**重複関係** 中央部や北寄りの東側から西側は、第4号構に掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸2.88m、短軸2.66mの長方形である。南北軸をもとにした主軸方向は、N-8°Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は10~20cmである。

**床** ほぼ平坦である。主柱穴と考えられるP 1~P 4の内側に、部分的にはあるがよく踏み固められた硬面化面が確認された。壁構は、確認されなかった。

**炉** 中央部からやや北寄りに付設されている。径28~34cmのほぼ円形の範囲内に、わずかに焼上が確認された。掘り込みではなく、床面を直接が床とした地床炉と考えられる。丸床に硬化面は確認されなかった。

**ピット** 5か所。P 1~P 4の深さは12~20cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P 5は深さ38cmで、南西コーナー部の壁際に位置しているが、性格は不明である。



第26図 第10号住居跡・出土遺物実測図

**覆土** 4層に分層される。各層に焼土粒子と炭化物または炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 焼 土 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	3 烧 土 色 ロームブロック・炭化物少量
2 烧 土 色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量	4 烧 土 色 ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量

**遺物出土状況** 上部器片47点(坏類8、高坏2、甕類37)、下製品1点(上式)と、流れ込みと考えられる弥生土器片13点が出土している。第26回163~166は、いずれも床面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から、古墳時代中期後半と考えられる。

第10号作居跡出土遺物観察表(第26回)

番号	種別	帶種	口径	高さ	底径	内 土	色 調	施成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
163	土師器	坏	9.6	4.9	3.6	長石・石英	黄褐色	普通	有茎柱内・外表面ナメ、内面内・外面ヘリナメ	東側表面	P163 30%
164	土師器	高坏	-	(11.0)	-	石英・長石	明赤褐	普通	有茎柱内・外表面ナメ	中央部表面	P164 50%
165	土師器	甕	18.6	(22.5)	石英・長石	灰白・明赤	普通	有茎柱内・外表面ナメ、外壁内・外面ヘリナメ	中央部表面	P165 30%	
166	土師器	甕	-	(25.7)	7.0	石英・磁石	灰白・明赤	普通	有茎柱内・外表面ナメ、外壁内・外面ヘリナメ、茎端部表面剥離	北西部底面	P166 50%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重積	内 土	色 調	施成	特 徴	出土位置	備 考
167	上式	3.9	4.0	3.0	40	石英・長石	灰白・明赤	普通	トマトナメ、断面ナメ、厚壁内・外壁ヘリナメ、下部ナメ	西側表面	DP167 P19

第11号住居跡(第27~28回)

**位置** 調査区北部のA 1 i 7 区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**重複関係** 北側部分は第2号溝に、南側コーナー部付近は第4号溝に、それぞれ掘り込まれている。また、北東壁の一部は、攪乱のため遺存していない。

**規模と形状** 長軸4.90m、短軸4.30mの長方形である。がと出入口施設に伴うビットの位置と南北軸をもとにした主軸方向は、N=41°~Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は12~20cmである。床 ほぼ平坦である。中央部の土柱穴と考えられるP 1 ~ P 4 の内側から南側にかけて、部分的にはあるがよく踏み固められた硬化面が確認された。また、南東部でわずかに焼土の敷布と炭化材がわずかに確認された。

**炉** 中央部からやや北西寄りに什設されている。長径42cm、短径26cmの楕円形の範囲内に、焼土が確認された。掘り込みではなく、床面を直接炉床とした地床がと考えられる。かく床にはわずかに硬化面が確認された。

**ビット** 6か所。P 1 ~ P 4 の深さは35~58cmで、その規模と配置から土柱穴と考えられる。P 5 は深さ18cmで南東壁際寄りの中央部に位置し、竈と向かい合っていることなどから、出入口施設に伴うビットと考えられる。また、P 6 は深さ14cmで北東部の壁際に位置しているが、性格は不明である。

**覆土** 5層に分層される。ほとんどの層に焼土粒子と炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

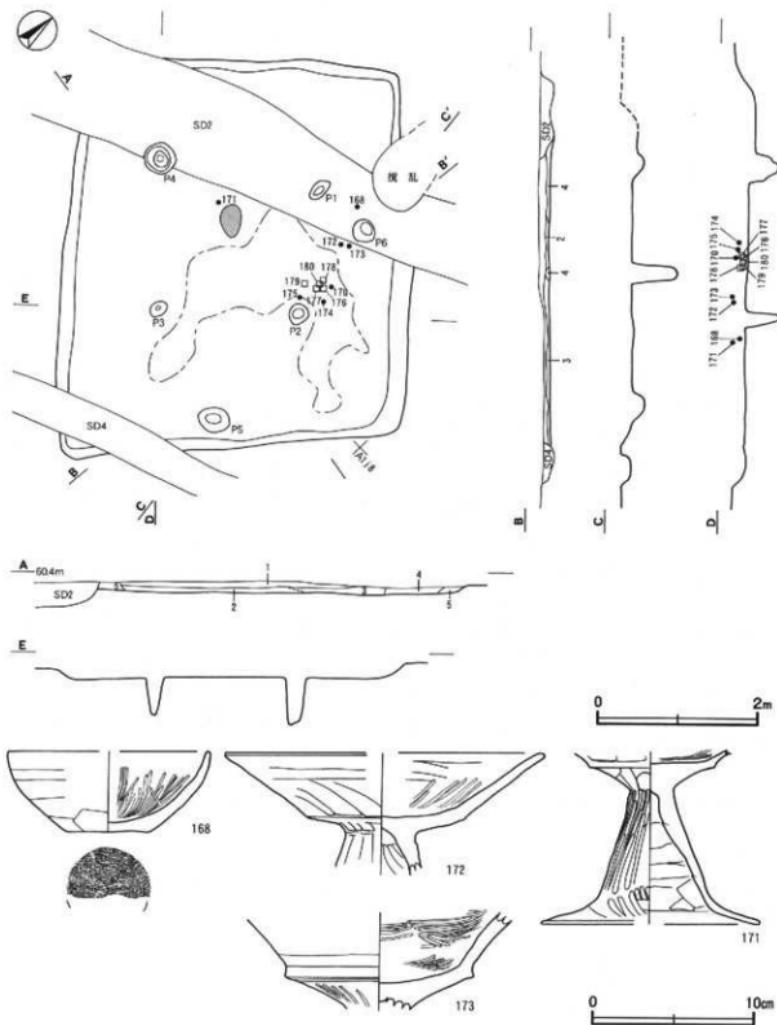
#### 土層解説

1 焼 土 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量	4 烧 土 色 ロームブロック・炭化物少量
2 烧 土 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	5 烧 土 色 ローム粒子中量
3 烧 土 色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子微量	

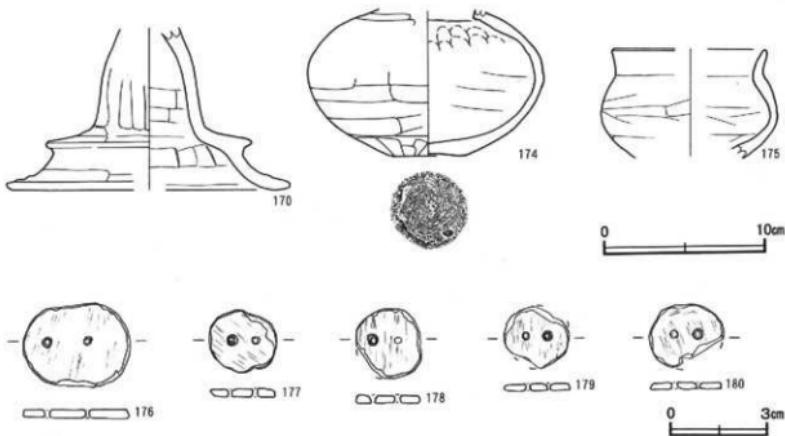
**遺物出土状況** 上部器片28点(坏6、高坏13、甕3、甕類6)、須恵器片3点(坏1、甕類2)、下製品5点(双孔円板)、刺片1点と、流れ込みと考えられる弥生土器片6点が出土している。また、台石と考えられる人頭大の礫1点を含む自然礫7点が覆土中から出土している。第27回171~173、第28回170~174~175は、土中に中

央部から北東部に集中して、覆土中層から下層にかけて破損した状態で確認された。176～180は、北東部の床面からまとまって出土している。

**所見** 高坏の出土割合が高いことや双孔円板が出土していることなどから、祭祀に関わる行為がなされた住居跡と推定される。時期は、出土土器及び遺構の形態から、古墳時代中期後葉と考えられる。



第27図 第11号住居跡・出土遺物実測図



第28図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表(第27・28図)

番号	種別	器種	口径	縦高	底径	胎 土	色 調	度成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
168	土器器	环	[12.3]	5.0	[5.0]	滑石・赤色 粘土	板	普通	口縁部内・外表面ナガ。体部外下端へフリ。体部内端へフリナギ。	北部壁下層	P168 30%
170	土器器	高环	-	(10.0)	[17.3]	石英・赤色 粘土・赤色 粘土	明赤施 白	普通	胎室内・外面へナガ。胎部部内・外表面ナガ。	北東部壁下層	P170 23%
171	土器器	高环	-	(10.8)	[13.7]	滑石・赤色 粘土	に赤い 施白	普通	胎部外曲面へナガ。胎部内面・胎部外曲面ミガキ。胎部内面へフリナギ。	中央部壁下中層	P171 50%
172	土器器	高环	[18.0]	(7.8)	-	石英・赤色 粘土・赤色 粘土	板	普通	口縁部内・外表面ナガ。体部外面・胎部外曲面へナガ。胎部内面ミガキ。	北東部壁下中層	P172 20%
173	土器器	高环	-	(6.0)	-	石英・赤色 粘土・赤色 粘土	赤褐色	普通	胎部内面へナガ。胎部内面・胎部外曲面ミガキ。	北東部壁下中層	P173 10%
174	土器器	埋	-	(8.9)	4.6	滑石・赤色 粘土	明赤施 白	普通	胎体内・外面へナガ。体部内面施白。	北東部壁下中層	P174 55%
175	土器器	夷	[9.6]	(6.7)	-	石英・赤色 粘土	明赤施 白	普通	口縁部内・外表面ナガ。胎部内・外面へナガ。	北東部壁下中層	P175 40%

番号	種 別	長 さ	幅	厚 さ	重 量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
176	双孔円板	2.47	3.28	0.31	1.64	滑石	孔径0.15。2孔とも両面から穿孔。両面斜位の研削。	北東部床面	Q176 PL12
177	双孔円板	1.89	2.07	0.25	1.72	滑石	孔径0.1。1孔ずつ真方向から穿孔。両面斜位の研削。	北東部床面	Q177 PL12
178	双孔円板	2.19	2.00	0.25	(1.94)	滑石	孔径0.15。1孔ずつ真方向から穿孔。両面斜位の研削。	北東部床面	Q178 PL12
179	双孔円板	1.85	1.96	0.21	0.28	滑石	孔径0.1。2孔とも両面から穿孔。両面斜位の研削。	北東部床面	Q179 PL12
180	双孔円板	1.90	2.22	0.29	0.36	滑石	孔径0.15。2孔とも両面から穿孔。両面斜位の研削。	北東部床面	Q180 PL12

第12号住居跡(第29図)

位置 調査区北部のA 1 g8 区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 中央部からやや南寄りの部分は、第2号土坑を埋め戻して床面を構築している。南側の床面と壁は削平されており、遺存状況は不良である。東側部分は調査区域外に延びている。

規模と形状 南北軸3.40m、東西軸3.86mが確認され、北西コーナー部の形状から、平面形は方形または長方形と推定される。南北軸をもとにした主軸方向は、N-24°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は9~12cmである。

床 ほぼ平坦である。硬化面および壁溝は、確認されなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 確認されなかった。

覆土 5層に分層される。各層にロームブロックまたはローム粒子を含み、壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

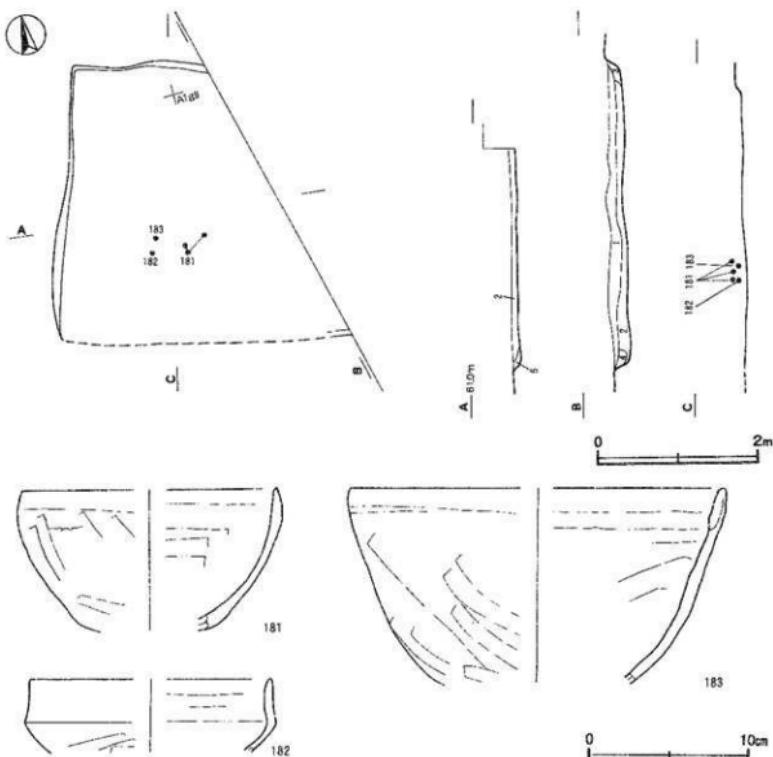
#### 土層解説

- |   |     |         |        |
|---|-----|---------|--------|
| 1 | 培地色 | 白・ム灰・少墨 | 炭化粒子微量 |
| 2 | 灰褐色 | ローム粒子中量 |        |
| 3 | 灰褐色 | ローム粒子微量 |        |

- |   |   |     |           |
|---|---|-----|-----------|
| 4 | 褐 | 白   | ロームブロック中量 |
| 5 | 褐 | (0) | ロームブロック少量 |

遺物出土状況 土器片29点(坪3、焼類26)が出土している。遺物はわずかで、出土した土器はいずれも細片である。第29図181~183は、中央部からやや南西寄りの覆土下層から、比較的まとまって出土している。

所見 遺存状況が不良であり、出土遺物も少ないため詳細は不明であるが、出土土器および推定される主軸方向が調査区内の同時期の住居跡と一致することなどから、時期は古墳時代後期前半と考えられる。



第29図 第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表(第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	手 法 の 特 徴	出土位置	備 考
181	土師器	壺	[15.9]	8.9	-	石英・長石・ 雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外表面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土下 層	P181 30%
182	土師器	壺	[14.9]	(2.0)	-	石英・長石・ 雲母	褐	普通	口縁部内・外表面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土下 層	P182 10%
183	土師器	鉢	[23.5]	(2.2)	-	石英・長石・ 雲母	明赤褐色	普通	口縁部内・外表面ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土下 層	P183 20%

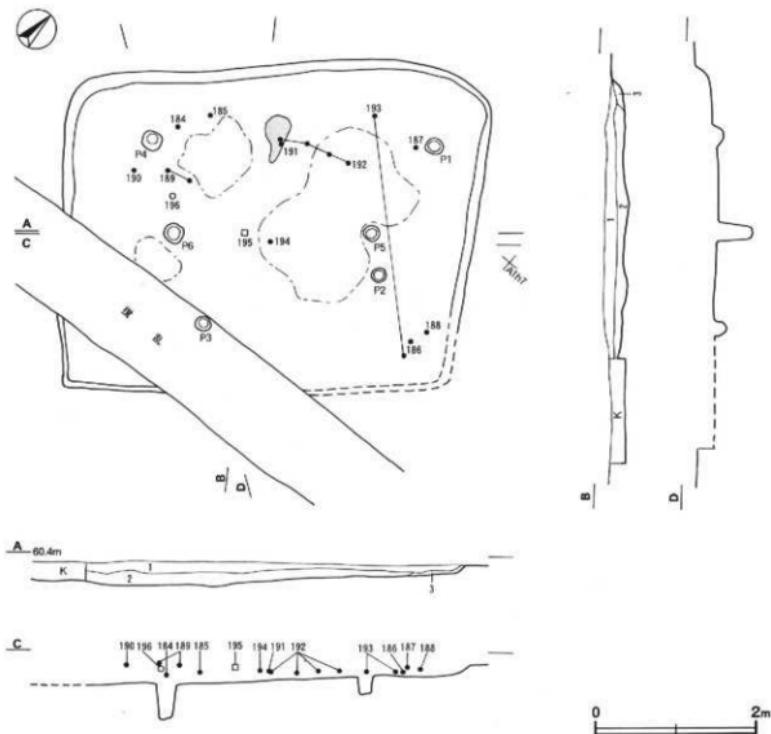
第13号住居跡 (第30・31図)

位置 調査区北部のA 1 h6 区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

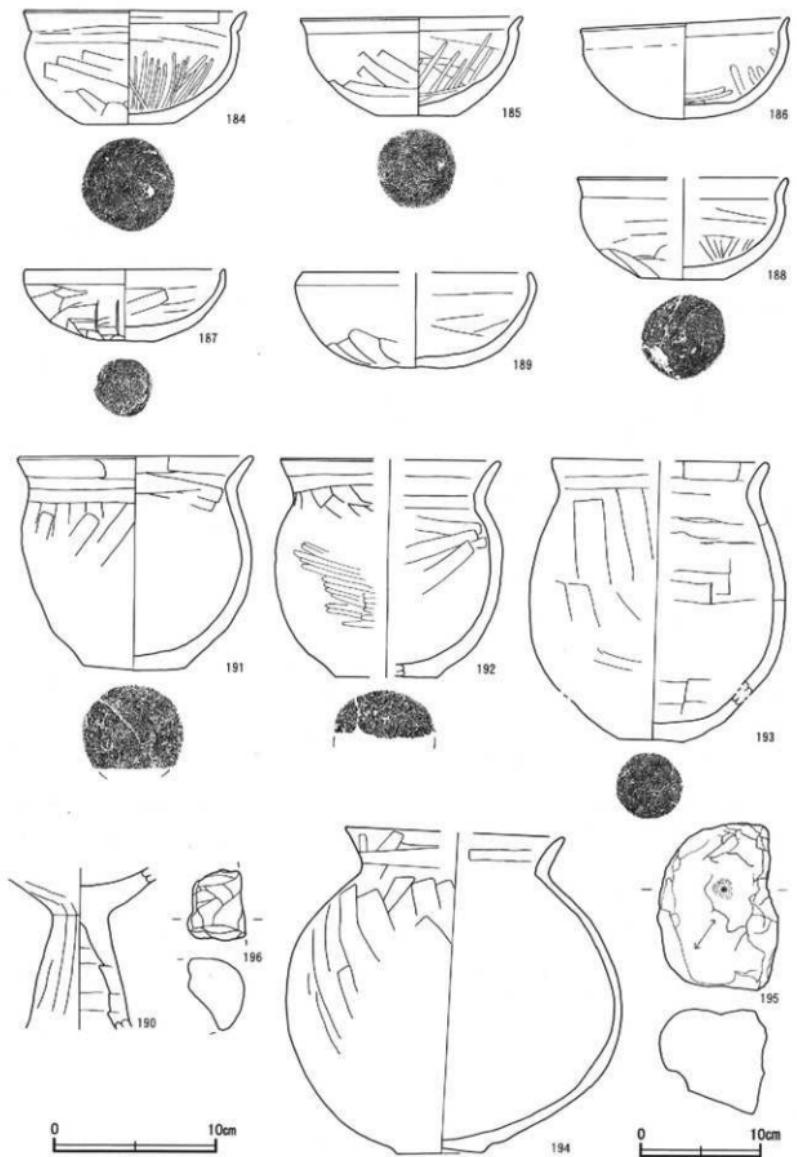
規模と形状 南東コーナー部と南壁の一部が遺存していないが、長軸5.16m、短軸4.01mの隅丸長方形である。

炉の位置と南北軸をもとにした主軸方向は、N-43°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は、13~18cmである。

床 ほぼ平坦である。かの周囲および柱穴と考えられるP 1 ~ P 6 の内側を中心には部分的に踏



第30図 第13号住居跡実測図



第31図 第13号住居跡出土遺物実測図

み固められた硬化面が確認された。また、焼土と炭化物の散布が、主に壁際付近で確認された。

**炉** 中央部から北寄りに付設されている。長径60cm、短径30cmの長楕円形の範囲内に、焼土が確認された。掘り込みではなく、床面を直接炉床とした地床炉と考えられる。炉床にはわずかに硬化面が確認された。

**ピット** 6か所。P1～P4の深さは12～25cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。P5とP6は深さ25cmと45cmで、棟持柱の柱穴または補助柱穴の可能性が考えられる。

**覆土** 3層に分層される。各層にローム粒子またはロームブロックを含み、壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

1 基 極 色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	3 反 極 色 ロームブロック中量、焼土粒子微量
2 基 極 色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量	

**遺物出土状況** 土師器片106点(坏類31、高坏4、甕類71)、土製品3点(支脚1、不明2)、石製品1点(砾石)と、流れ込みと考えられる绳文土器片1点、弥生土器片6点が出土している。また、自然礫2点が覆土中から出土している。遺物量は比較的多く、主に中央部からやや北寄りの範囲を中心に、覆土下層から床面で確認された。第31図184～188・193は、床面から出土している。

**所見** 時期は、出土土器及び遺構の形態から、古墳時代中期後葉と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表(第31図)

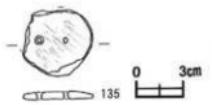
番号	種別	器種	口径	底高	高さ	胎土	色調	焼成	手法の特徴		出土位置	備考
									口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り		
181	土師器	坏	13.8	7.0	5.5	石英・雪母	明赤褐	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り	体面内面ミガキ	P184 100% PLII
185	土師器	坏	13.7	6.2	4.8	石英・長石	褐	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り	体面内面ミガキ	P185 100% PLII
186	土師器	坏	13.0	6.3	-	石英・長石	黒泥	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り	体面内面ミガキ	P186 95% PLII
187	土師器	坏	12.4	4.5	3.4	石英・雪母	灰黄褐色	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P187 90% PLII
188	土師器	坏	[13.0]	6.3	5.1	石英・雪母	にごり・赤色	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部外面下端ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P188 60% PLII
189	土師器	坏	[14.1]	5.9	-	石英・雪母	にごり・赤色	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部外面下端ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P189 30% PLII
190	土師器	高坏	-	[10.0]	-	石英・雪母	明赤褐	普通	輪縁外面ヘラ削り	脚部内・外面模ナデ	脚部内・外面模ナデ	P190 60% PLII
191	土師器	甕	14.6	13.5	6.0	石英・長石	にごり・赤色	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P191 75% PLII
192	土師器	甕	[13.4]	13.5	[6.2]	石英・赤色	明赤褐	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部外面ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P192 40% PLII
193	土師器	甕	[13.2]	[18.4]	4.0	石英・長石	灰褐	普通	口縁部内・外面模ナデ	体部内・外面ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P193 30% PLII
194	土師器	甕	[17.8]	26.7	7.0	石英・長石	にごり・赤褐	普通	口縁部内・外面模ナデ	体面内・外面ヘラ削り	体面内・外面ヘラ削り	P194 80% PLII

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考
							輪縁	内面		
195	砾石	14.0	9.9	8.8	1590	安山岩	自然礫素材	表面を砥面に使用。凹石の転用。	中央部覆土下層	Q195

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴		出土位置	備考	
							輪縁	内面			
196	支脚	(4.0)	(3.7)	(4.3)	(62)	石英・長石	にごり・赤色	普通	指頭ナデによる成形。	北西側覆土下層	DP196

#### (2) 遺構外出土遺物(第32図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第32図 遺構外出土遺物実測図

### 遺構外出土遺物観察表(第32回)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
125	双孔円板	1.96	2.22	0.25	1.92	滑石	孔径0.1, 1孔ずつ対角線から穿孔。周面部分の研磨。	表上中	Q135 P1.2

#### 4 中世以降の遺構と遺物

井戸跡1基と溝跡4条が確認された。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。なお、溝跡の平面図については、全体図で示すことにする。

##### (1) 井戸跡

###### 第1号井戸跡 (SK6) (第33図)

位置 調査区南西部のC 1b4 区に位置し、台地部の平坦面に立地している。

重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は長径0.83m、短径0.79mの円形である。確認面から円筒状に掘り込まれているが、湧水のため、深さ1.30mまでしか明らかにできなかった。ローム層および粘土層を掘り抜いていることが、壁面の観察から確認された。

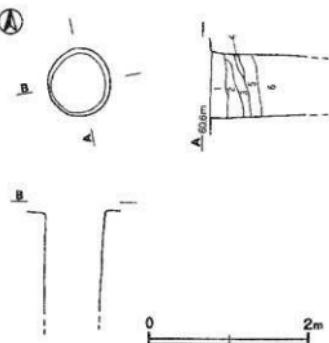
覆土 6層に分層される。全体に水平な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

###### 土層解説

- 1 水泥色 ロームブロック・施泥バニス中量
- 2 黄褐色 ローム紅土中量
- 3 黄褐色 粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 4 黑褐色 地上粒子・ローム粒子微量
- 5 黑褐色 ローム紅土少量
- 6 黑褐色 コームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、古墳時代の第1号住居跡を掘り込んでいることや遺構の形態などから、中世以降と考えられる。



第33図 第1号井戸跡実測図

##### (2) 溝跡

###### 第1号溝跡 (第4・34図)

位置 調査区南東部から西部のB 1f2～B 2g2 区に位置し、台地部の平坦面に立地している。

重複関係 第7号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認した長さは40.20mである。調査区南東側から西側へ向かって弧状に曲線を描きながら、N-75°-E の方向へ延びている。上幅0.51～1.98m、下幅0.16～0.49m、深さ20～46cmで、幅と深さは南東側から西側に向かって大きくなっている。なだらかに立ち上がり、底面は皿状を呈している。

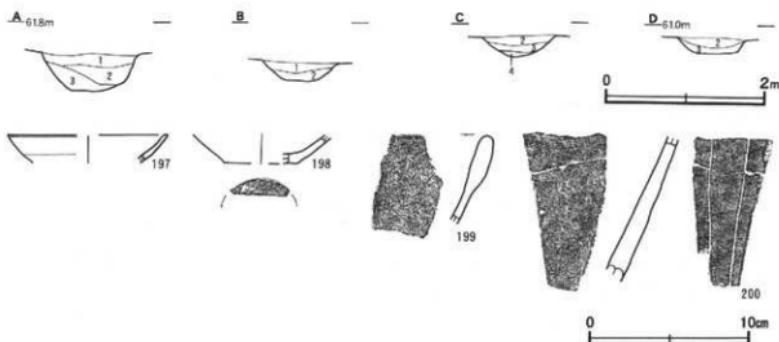
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

###### 土層解説

- 1 植物褐色 ローム粒子・施土粒子・炭化粒子少量
- 2 黑褐色 炭化粒子少量、ロームブロック微量
- 3 黑褐色 ロームブロック微量、施土粒子微量
- 4 水泥色 ロームブロック中量

**遺物出土状況** 土師質土器片3点（小皿2、鍋1）、陶器片1点（擂鉢）と、流れ込みと考えられる縄文土器片2点、弥生土器片4点、土師器片35点、須恵器片1点が出土している。第34図197～200は、南東部の覆土中から出土したものである。

**所見** 平面や断面の形状から、排水溝または流水溝と考えられる。時期は、古墳時代の第7号住居跡を掘り込んでいることや出土遺物などから、中世以降と考えられる。



第34図 第1号溝跡土層・出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底様	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
197	土師質土器	小皿	[9.8]	(1.8)	-	長石強得	にぶい褐色	普通	ロクロ成形。	中央部覆土中	P197 5%
198	土師質土器	小皿	-	(1.8)	[4.6]	石英・長石・雲母 石英・長石・赤色 斑子	にぶい 黄褐色	普通	ロクロ成形。底部回転糸切り。	東部覆土中部	P198 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
199	土師質土器	鍋	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内・外面、体部内・外面ヘラナギ。	東部覆土中層	TP199
200	土師質土器	擂鉢	石英・長石・雲母	にぶい褐色	普通	口縁部内面撻目。体部外面ヘラナギ。	東部覆土中層	TP200

#### 第2号溝跡（第4・35図）

**位置** 調査区北部から北西部のA 1 f7～A 1 j4区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**重複関係** 第11号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 確認した長さは26.90mである。調査区北側から南側へ直線状にN-0°の方向で10.50m延び、向きを変えて南西側へ直線状にN-68°-Eの方向で16.40m延びている。上幅0.98～1.40m、下幅0.60～0.92m、深さ13～43cmで、幅と深さは北側から南西側に向かってやや大きくなっている。なだらかに立ち上がり、底面は皿状を呈している。

**覆土** 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

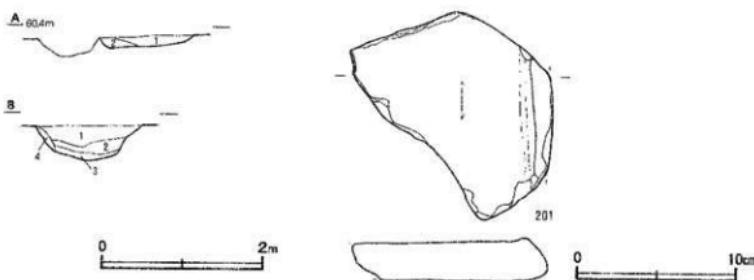
#### 土層解説

- 1 灰褐色 砂粒中量、ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ロームブロック・砂粒少量

- 3 にぶい褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 伴山の遺物は明確でないが、石製品1点（砥石）と、流れ込みと考えられる弥生土器片7点、七輪器片31点、須恵器片1点、石器1点（削石）が出土している。第35図201は、南東部の覆土中から出土したものである。

**所見** 平面や断面の形状から、区画溝または排水溝と考えられる。時期は、古墳時代の第11号住居跡を掘り込んでいることや山上遺物などから、中世以降と考えられる。



第35図 第2号溝跡十層・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
201	砥石	0.31	(0.7)	2.7	(550)	玄武岩	自然端素材。表面を砥石に使用。	覆土中	Q301 PL12

#### 第3号溝跡 (第4・36図)

**位置** 調査区北部のA 1 g7区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**重複関係** 第2号溝跡に掘り込まれている。

**規模と形状** 確認した長さは4.00mである。調査区北側から南側へ直線状にN-5°-Wの方向で延びている。上幅0.40~0.77m、下幅0.22~0.52m、深さ24cmで、なだらかに立ち上がり、底面は皿状を呈している。

**覆土** 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示して

いることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黄灰色 ローム粒子微細
- 2 黄灰色 ロームブロック少量

**遺物出土状況** 出土していない。

**所見** 平面や断面の形状から、区画溝または排水溝と考えられる。時期は、並行している第2号溝に掘り込まれていることから、ほぼ同時期の中世以降と考えられる。

#### 第4号溝跡 (第4・37図)

**位置** 調査区北部から北西部のA 1 g8~B 1 e2区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

**重複関係** 第10・11号住居跡を掘り込んでいる。

**規模と形状** 確認した長さは125.40mである。調査区北東側から南西側へ直線状にN-65°-Eの方向で延びて



第36図 第3号溝跡十層実測図

いる。上幅0.44~1.44m、下幅0.24~0.40m、深さ11~27cmで、幅と深さは北東側から南西側に向かってやや大きくなっている。なだらかに立ち上がり、底面は皿状を呈している。

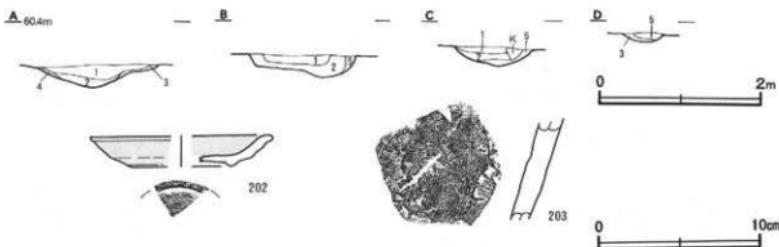
**覆土** 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

**土層解説**

1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子極微量	4 灰色 ロームブロック少量
2 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量、燒土粒子極微量	5 深褐色 ローム粒子中量
3 黑色 ロームブロック中量	

**遺物出土状況** 陶器片5点(小皿2、甕3)と、流れ込みと考えられる弥生土器片6点、土師器片27点、須恵器片5点、石器1点(磨石)が出土している。第37図202-203は、いずれも南東部の覆土中から出土している。

**所見** 遺構平面や断面の形状から、排水溝または流水溝と考えられる。時期は、古墳時代の第10・11号住居跡を掘り込んでいることや出土遺物などから、中世以降と考えられる。



第37図 第4号溝跡土層・出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
202	陶器	小皿	[11.0]	1.9	[6.4]	長石	灰	良好	ロクロ成形、底部切妻切り。体部内・外面上に乳白色釉を施す。	南東部覆土中	P201 30%
<hr/>											
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考			
203	陶器	甕	長石	にぶい緑	普通	体部内・外面上にラナダ。無釉。外面上に花弁状の押印。	南東部覆土中	TP202 常滑系			

### 5 その他の遺構

その他の遺構として、時期および性格不明の土坑3基が確認された。一覧表中に掲載し、平面図については全体図で示すこととする。

表2 陥し穴一覧表

番号	位置	長径(輪)方向	平面形	規格		背面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	B1a6	N-96-E	長楕円形	2.53×1.36	36	緩斜	凹内	-	自然	-	新田開墾(01→新), その他
2	B1a7	N-96-E	楕円形	2.34×1.10	64	緩斜	平坦	-	自然	-	SK5

表3 阿生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁構	内部施設				土塗	主な出土遺物	時期	調査時期(年)						
				長径×短径(m)	深さ(cm)			柱数	火炉	柱	井										
									柱	火炉	柱										
3	B1-6	N-12° W	圓角方形	3.77	3.32	8	平坦	4	-	1	-	自然	弥生土器	後期後半							
5	B1-9	N-25° E	横円形	4.59	3.90	17~26	平坦	-	4	-	1	自然	弥生土器、鍛錬車、焼成粘土塊、石器	後期後半							
7	B1-7	N-18° W	圓角方形	(3.96) × 3.71	15~20	平坦	-	-	-	1	人為	弥生土器	後期後半	本跡-SD1							
9	B1-8	N-28° W	圓角方形	4.62	4.02	4~12	平坦	-	4	-	2	1	自然	弥生土器、焼成粘土塊、石器	後期後半						

表4 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁構	内部施設				土塗	主な出土遺物	時期	調査時期(年)						
				長径×短径(m)	深さ(cm)			柱数	火炉	柱	井										
									柱	火炉	柱										
1	C1-1	N-4° W ↓は長方形	方形または長方形	4.61	×(2.63)	6~14	平坦	-	-	-	-	複数1	人為	土師器(灰、焼)	後期前半	本跡-S61					
2	B1-4	N-77° E ↑方 形	[方 形]	5.09	×5.05	25	平坦	-	-	-	-	複数1	人為	土師器(灰、焼、塵)	後期前半						
4	B1-6	N-10° E ↓は長方形	方形または長方形	(2.76) × (1.10)	-	平坦	-	-	-	-	-	不明	土師器(黒)	後期							
8	B1-8	N-15° W 長 方 形	4.36	× 3.83	10~35	平坦	半周	4	1	1	1	複数1	自然	土師器(灰、焼、高杯、灰壺、灰瓶)	中期末葉						
10	A1-8	N-8° E 長 方 形	2.88	× 2.66	10~20	平坦	-	4	-	1	-	複数1	人為	土師器(灰、高杯、土壺)	中期後半	本跡-S64					
11	A1-7	N-41° W 長 方 形	4.90	× 4.30	12~20	平坦	-	4	-	1	1	複数1	人為	土師器(灰、高杯、壺)、双孔背板	中期後葉	本跡-S62-S63					
12	A1-8	N-20° E ↑方 形	[方 形]	(3.86) × (3.10)	9~12	平坦	-	-	-	-	-	自然	土師器(灰、焼)	後期前半	SK2-本跡						
13	A1-6	N-43° W 圓角方形	3.16	× 4.01	13~18	平坦	-	5	-	2	1	複数1	自然	土師器(灰、高杯、支脚、砾石)	中期後葉						

表5 井戸跡一覧表

番号	位置	長径(幅)方向	平面形	規模		床面	底面	覆土	主な出土遺物				調査時期(年)	
				長径×幅(幅)(m)	深さ(cm)				柱	火炉	井			
1	C1-1	-	円形	0.83	× 0.79	(130)	直立	-	人為					S11-本跡

表6 溝跡一覧表

番号	位置	長径(幅)方向	平面形	規模		床面	底面	覆土	主な出土遺物				調査時期(年)				
				長径×幅(幅)(m)	深さ(cm)				柱	火炉	井						
1	B1-2~ B2-2	N-75° E	張状	(40.2)	0.51~ 1.98	0.16~ 0.69	20~46	緩斜	直状	自然	土師質土器(小皿、鉢)、陶器(抹跡)		S17-本跡				
2	A1-7~ A1-8	N-0° N-48° E	直線状	(36.9)	0.98~ 1.10	0.60~ 0.92	13~13	緩斜	直状	自然	砾石		S11-本跡				
3	A1-7	N-5° W	直線状	(4.0)	0.40~ 0.77	0.22~ 0.52	24	緩斜	直状	自然	-		本跡-S62				
4	A1-8~ B1-2	N-65° E	直線状	(25.4)	0.44~ 1.14	0.24~ 0.40	11~27	緩斜	直状	自然	陶器(小皿、甕)		S11-本跡				

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	方向	形状	規模		床面	底面	覆土	主な出土遺物				調査時期(年)	
				長径×幅(幅)(m)	深さ(cm)				柱	火炉	井			
1	B1-8	N-13° W	横円形	1.69	× 1.11	64	緩斜	直状	自然	-	-	-	-	
2	A1-8	N-22° W	長椭円形	1.13	× 0.72	14	緩斜	直状	人為	-	-	-	-	本跡-S62
4	B1-6	N-33° E	長椭円形	2.03	× 1.11	36	緩斜	直状	自然	-	-	-	-	

## 第4節 ま と め

高輪遺跡の調査の結果、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の堅穴住居跡4軒、古墳時代の堅穴住居跡8軒、中世以降の井戸跡1基、溝跡4条、時期不明の土坑3基が確認された。また、これらの遺構とともに、各時代を特徴づける土器や石器、上製品・石製品などが出土し、当遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、特に当遺跡内で集落が形成された弥生時代と古墳時代の遺構と遺物を中心、特筆すべき点を取り上げながら、各時代の概略を述べまとめてみたい。

### 1 縄文時代

陥し穴2基が確認された。遺構の形状から縄文時代と判断したが、詳細な時期を特定することは困難であった。当遺跡内の一角は、狩猟場として利用されていたと考えられる。遺物としては、遺構に伴わない縄文土器と石器が出土している。縄文土器は細片であるが、中期後葉の加曾利E.IIまたはE.III式期に編年されるものであろう。住居跡など居住活動を示す遺構は確認されていないものの、石器としては、磨石、凹石、石皿など、生業に関わるものが含まれていた。

これまでの分布調査の結果などから、当遺跡で確認されている縄文上器の時期は、前期関山式期、中期阿玉台式期から後期加曾利B式期<sup>11</sup>とされているので、調査区域以外の周辺地域において集落などが形成された可能性が高いと考えられる。

### 2 弥生時代

確認された弥生時代の堅穴住居跡4軒は、調査区南部を中心に分布していた。住居跡の形状や内部施設等について、耕作機械による攪乱等により全体像を明確にできない部分も存在するが、平面形は第3・7・9号住居跡が四丸長方形で、第5号住居跡のみが梢円形を呈していた。ピットは第7号住居跡では確認されなかつたが、他の住居跡で確認され、主柱穴と考えられるピット数は4か所を基本としている。さらに、出入口施設に伴うピットや桿持柱の柱穴と考えられるピットが加わる住居跡も確認された。

炉跡は3軒の住居跡で確認され、第5・9号住居跡では角柱状の自然礫を用いた炉石が据えられていた。岩瀬盆地を挟んで西側に位置する松川古墳群の調査においても、がれ石を設置した住居跡が確認されており<sup>21</sup>、県西部におけるがれ石を用いた住居跡の分布を示す新たな事例と言える。炉石は、いざれも住居跡の主軸と想定される方向と直交するように炉内に設置されており、茨城県の後期弥生文化を代表する十王台式上器と上橋吉式上器の文化圏において確認された住居内の炉石でも、同じような設置方法がとられている<sup>22</sup>。異なる上器文化圏と対比しながら、炉の形態や構築方法を検討していくうえでも、重要な手がかりを与えるものと思われる。

遺物としては、弥生土器、紡錘車などが出土している。弥生土器は小片または細片がほとんどで、器形全体をうかがえるような上器は少ない。壺形上器の文様は、大きく口縁部、頸部、胴部の3つの文様帶で構成されている。口縁部は、折返し口縁または複合口縁と、単純口縁に大きく分けることができる。折返し口縁または複合口縁部には、羽状構成の附加条一種（附加2条）縄文が施されるものが多く、無文の割合は少ない。口縁部下端の調整は、指頭による押圧を加えたもの、キザミを施したもの、刺突文を施したものなどが見られるが、縄文原体の押圧がなされる割合が高い。単純口縁の場合は、櫛齒状工具によって多条の波状文または逆弧文が施されている個体がほとんどである。また、口縁部を中心に赤彩が施されている土器片（第17図106・107・110）も見られ、内部に赤色顔料の痕跡が残る壺形上器（第11図29）の山上とともに、施文の工程を考える上で

興味深い事例である。頸部の文様帯は、破片数が限定されてはいるが、有文のものと無文のものとに大きく分けられる。有文のものは、櫛歯状工具による逆弧文、縱位の区画文、横位の波状文、区画文と波状文の組み合せによる文様などを施している。胸部と頸部を区画する位置には、多条櫛描文が周回するものやボタン状の瘤が貼付されるものが存在する。胴部は附加条一種（附加2条）繩文の施文が圧倒的に多く、施文方法も羽状構成が主体となっている。底部は、ほとんどが木葉痕であるが、わずかに布目痕も含まれている。

紡錘車は、第5号住居跡だけから3点が出土している。住居跡の平面形とともに出土遺物の様相が、他の住居跡とは異なっている。出土遺物は縄頬の壺形土器（第11図20）とともに、壺や高杯のミニチュア土器（同図21・22・44・45）、高杯の脚部転用と考えられる器台（同図23）などが存在する。このような土器組成からは、祭祀的な行為がなされた住居であった可能性も考えられる。また、出土した紡錘車3点は、いずれも算盤式状を呈していた。この形状の紡錘車の類例としては、水戸市十万原遺跡<sup>41</sup>、二の沢B遺跡<sup>42</sup>、笠間市石井遺跡群<sup>43</sup>、茨城町石原遺跡<sup>44</sup>、栃木県益子町水堂遺跡<sup>45</sup>などに散見するが、数量的には少ないものと思われる。一般的には円盤状を呈しているものが多い中で、算盤式の特異な形態の紡錘車を主体として、1軒の住居から3点以上出土している事例としては、車堂遺跡の第4号住居跡に見られる。この事実は単に生業の道具としてだけではなく、紡織に関わる儀礼的な行為の中で用いられるといった、実用以外の道具としての一端をも示唆するものではないだろうか。さらには、蓋形土器（第11図24）や焼成された粘土塊が確認されていることも、第5号住居跡の特異性を示していると考えられる。蓋形土器は手捏ね風の成形手法がとられ、端部に2個単位の穿孔がなされている。成形手法が類似し、口縁部に穿孔がなされた壺または皿形土器は、前述の十万原遺跡第20・23号住居跡や石原遺跡第45号住居跡から出土している。時期的な変遷の中で組成に加わった可能性を考えられると同時に、地域的な広がりの中での関連を予想される土器である。

このように、当遺跡出土の弥生土器や紡錘車は、成形や施文の方法、文様の構成など、栃木県方面から茨城県西部に分布する二軒屋式土器の特徴を有していると考えるが、口縁部や頸部に多用されている櫛描文の文様構成からは、茨城県中央部から北部において成立した十上台式土器の要素を確認することができる。このような傾向は、同じ弥生時代の集落が確認された松田古墳群においては、あまり顕著ではなかった現象であり、時期的には当遺跡が後続の遺跡であると推定される。さらに、当遺跡は十上台式土器などの異なる文化圏との交流や影響が大きくなりつつある後期後半の時期にあって、一つの段階を示す遺跡であると捉えておきたい。

### 3 古墳時代

確認された古墳時代の堅穴住居跡8軒は、調査区全域に分布していた。出土土器と住居跡の形状や内部施設等をもとにして、中期と後期に大別することが可能である。

中期の住居跡は、第8・10・11・13号の4軒が該当する。調査区中央部から北寄りの範囲を中心にして、住居跡が確認されている。住居跡の規模と形状は、長軸4～5m、短軸4m前後の長方形または隅丸長方形を呈し、中形が主体であるが、第10号のように長軸および短軸が3mに満たない小形の住居跡も確認された。内部施設等について見ると、ピットはすべての住居跡で確認され、主柱穴はすべて4か所を基本としている。さらに、出入口施設に伴うピットも、第8・11号住居跡で確認された。炉は第10・11・13号の3軒の住居跡で、床面の中央またはやや北寄りの位置で確認され、すべて地床炉であった。第8号住居跡では、南北壁のほぼ中央部に窓が付設されていた。煙道部は室外への掘り込みが見られず、火床部も住居内の床面を直接用いているなど、形態的な特徴から初期窓と捉えられる。岩瀬町裏山遺跡<sup>46</sup>の第27号住居跡においても、同様の窓の付設が推定されている。時期的には、出土土器や煙道部が壁外へ掘り込まれていない段階<sup>47</sup>の窓という判断から、5世紀

中葉から後葉にかけての時期と考えられる。また、当住居跡では、壁溝と貯蔵穴が確認されている。竈の付設位置、竈と貯蔵穴との位置関係、竈と出入口との位置関係など、詳細な検討によって、過渡的な時期にあった住居の構造や性格が明らかになるであろう。

これら 4 軒の住居跡から出土した遺物は、土師器が主体で、石器、石製品、土製品がわずかに含まれていた。器種は、壺、高壺、椀、甕、壠、甕などで構成されており、壺、椀、甕の出土割合が高い。壺と椀の形態は、口縁部付近で内彎し、器種の区別が明瞭にできないものがあり、時期的な特徴とも考えられる。また、口縁部内面に稜を有し、わずかに屈曲する器形の壺も見られる。整形の手法はヘラナデが主体で、さらに体部内面はヘラミガキ、体部下端から底部はヘラ削りによる調整がなされている。底部は、ヘラ削りによって成形された平底と丸底が存在する。高壺は第10・11・13号住居跡で出土しているが、第11号住居跡からは 4 点が確認されている。脚部は円筒状あるいは朝顔状を呈し、脚部の下位に稜を有する。第27図173・第28図170の高壺は、壺部と脚部にそれぞれ鶴状の凸筋が付けられ、形態の特徴から木器を模倣した高壺と考えられる。

特に、第11号住居跡では双孔円板が 5 点出土しており、高壺や壺などの器種構成とともに、祭祀的な行為がなされていたことを十分に想定できる住居跡である。また、限られた調査区内ではあるが、1 軒の住居跡から集中して祭祀に関わる遺物が確認されたことは、ほぼ同時期における岩瀬町裏山遺跡<sup>11</sup>でも同じ様相が見出されており、集落内における祭祀形態を示すものと言えるであろう。甕の形態は、大きく 2 つに大別できる。体部は球形状を呈し肩部が張り、頸部は屈曲して外反しながら口縁部にいたる器形と、底部がやや突出し、体部と口縁部の径がほぼ同じ器形のものが見られる。整形の手法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はヘラナデが主体であるが、体部外面上にヘラミガキが加わるものもある。甕は、第 8 号住居跡で第25図161の 1 点が出土している。この甕は無底式のもので、内彎しながら立ち上がり、口縁部に最大径を持つものである。

これらの上器は、概ね 5 世紀中葉から後葉に位置付けられるものと考えられる。この古墳時代中期末から後期初めの過渡的な時期に集落が形成されるとともに、住居内に竈が導入されていったものと思われる。

後期の住居跡は、第 1・2・4・12 号の 4 軒が該当する。調査区東部から南部の範囲を中心にして、住居跡が確認されている。規模と形状は、調査区域外に延びるものや、調査区南部では耕作機械による著しい搅乱を受けているものなど、全体像を明確にできないもののが多かった。確認された範囲で判断すれば、平面形はいずれも方形または長方形と考えられる。規模は、第 1・2 号住居跡が一辺 4.5~5.0m 前後で、第 12 号住居跡が一辺 4.0m 以下で、やや小形と推定される。いずれの住居跡においても、ピットや喰溝などは確認されなかつたが、2 軒の住居跡からは竈が確認された。竈の付設位置は、第 1 号住居跡が北壁中央部、第 2 号住居跡が東壁中央部となっている。第 1 号住居跡の竈は、煙道部の壁外への掘り込みがわずかに確認され、初期的な竈から発達したものと捉えることができるであろう。

出土した遺物は、土師器のみである。器種は、壺、甕、鉢が確認された。壺が主体であり、形態を見ると、体部からやや内彎しながら立ち上がって口縁部に至るものと、口縁部がわずかに屈曲して稜を有するものとが存在する。底部が完全に残存している個体はないが、ほとんどが丸底になると考えられる。整形の手法は、体部内外面とともにヘラナデが主体で、口縁部がわずかに屈曲して稜を有する壺の内面には、ヘラミガキが加わるもののが含まれる。甕も器形全体をうかがうことはできないが、体部は球形と考えられ、頸部で屈曲して口縁部は緩やかに外反している。口縁部と体部の内外面は、ヘラナデによる調整がなされている。

これらの上器は、概ね 5 世紀後葉から 6 世紀初頭に位置付けられるものと考えられる。この時期の住居跡は、調査区の南東寄りで確認されており、住居内における竈の定着とともに、前時期とは位置をわずかに変えて、集落が展開していくものと考えられる。

古墳時代における当遺跡の集落変遷は、中期後葉から後期前葉にかけてたどることができた。集落の規模は、決して大きいものではないと思われるが、岩瀬盆地東部では、同時期における裏山遺跡や磯部遺跡<sup>12)</sup>の様相、さらには当遺跡の周辺に多く分布する古墳の築造などと関連付けて、集落の動態を追究することが重要と考えられる。たとえば、盆地を挟んで当遺跡から西方の丘陵上に立地している松田古墳群<sup>13)</sup>では、古墳時代前期後半から中期前半の住居跡が確認されており、当遺跡に先行する時期に、すでに集落が形成されている。また、古墳が築造されたのは後期初頭と判断され、当遺跡においては集落が展開する時期に当たる。短絡的に集落の動向を捉えることはできないが、岩瀬町周辺における古墳時代をも含めた発掘調査が進展する中、広い視野からの遺跡や遺構、遺物の検討によって時代の様相が浮かび上がってくるであろう。

#### 4 中世

中世の遺構は、井戸跡1基と溝跡4条が確認された。遺物としては、溝跡から土師質土器や陶器などが出土している。具体的に人々の営みを示すような遺構は乏しいが、排水溝または流水溝と考えられる溝跡から出土した遺物から、15世紀以降の当遺跡の近隣には、居住活動の場が存在していたと考えられる。

- 1) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史 新史編』 岩瀬町 1987年3月
- 2) 横倉要次 「松田古墳群 北関東自動車道(滋賀～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書V」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集 (財)茨城県教育財团 2001年3月
- 3) 鶴見貞雄 「炉石住居跡群 茨城県の弥生・古墳時代の住居例からー」『研究ノート』5号 (財)茨城県教育財团 1996年6月
- 4) 告川 修 「「十萬原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書II 十萬原遺跡I」『茨城県教育財団文化財調査報告』第179集 (財)茨城県教育財团 2001年3月
- 5) 江幡良夫 沢澤秀雄 「二の沢A遺跡 二の沢B遺跡(古墳群) ニガサワ古墳群 十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集 (財)茨城県教育財团 2003年3月
- 6) 鹿島清光 「第1章 原始社会と古墳文化」『筑波山史 上巻』 筑波山 1993年12月
- 7) 村上和彦 「やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書「石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集 (財)茨城県教育財团 2000年3月
- 8) 岩上照朗他 『水堂』 益子町史編さん委員会 1985年3月  
小森紀男 「第3章 弥生時代 車空道跡」『益子町史 第1卷 考古資料編』 益子町 1987年3月
- 9) 岩澤秀雄 「一般県道西小高真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書「裏山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第73集 (財)茨城県教育財团 1992年3月
- 10) 佐村克行 「塙合遺跡における初期カマドの様相について」『茨城波』第3号 弥次波俱楽部 1999年3月
- 11) 9) と同じ。
- 12) 野村幸希 『磯部遺跡調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1972年3月
- 13) 2) と同じ

## 第4章 加茂東遺跡

### 第1節 遺跡の概要

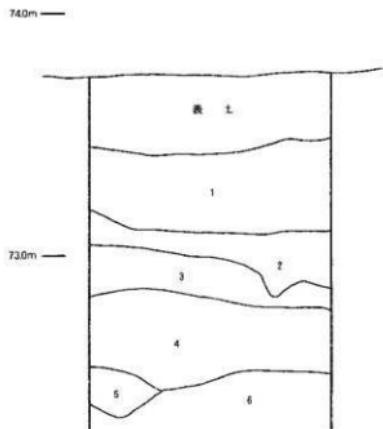
加茂東遺跡は、縄文時代と平安時代の複合遺跡である。調査前の現況は畠地で、調査面積は平成13年度と14年度を合わせて573.76m<sup>2</sup>である。

調査の結果、窓穴住居跡を4軒、土坑3基、溝跡1条、道路跡1条を確認した。

遺物は、遺物コンテナ(60×40×20cm)に6箱出土している。出土した主な遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、灰陶軸器、石製品(砥石)である。

### 第2節 基本層序

A1-h8区にテストピットを設定した。現地表面より約1.4m掘り下げる岩盤に達したため、基本土層の観察はそれよりも上の上層の観察に留まった。



第38図 基本上層図

第1層は黒褐色の表土層で、粘性・締まりは強い。粘質土に粒子の細かい砂粒が混じる。層厚は30~35cmほどである。

第2層は暗褐色の粘土層で、粘性・締まりは強い。粒子の細かい砂粒が混じる。層厚は15~28cmほどである。

第3層は黒褐色の粘土層で、この層より砂粒の含有量が少なくなる。粘性・締まりは強い。層厚は10~25cmほどである。

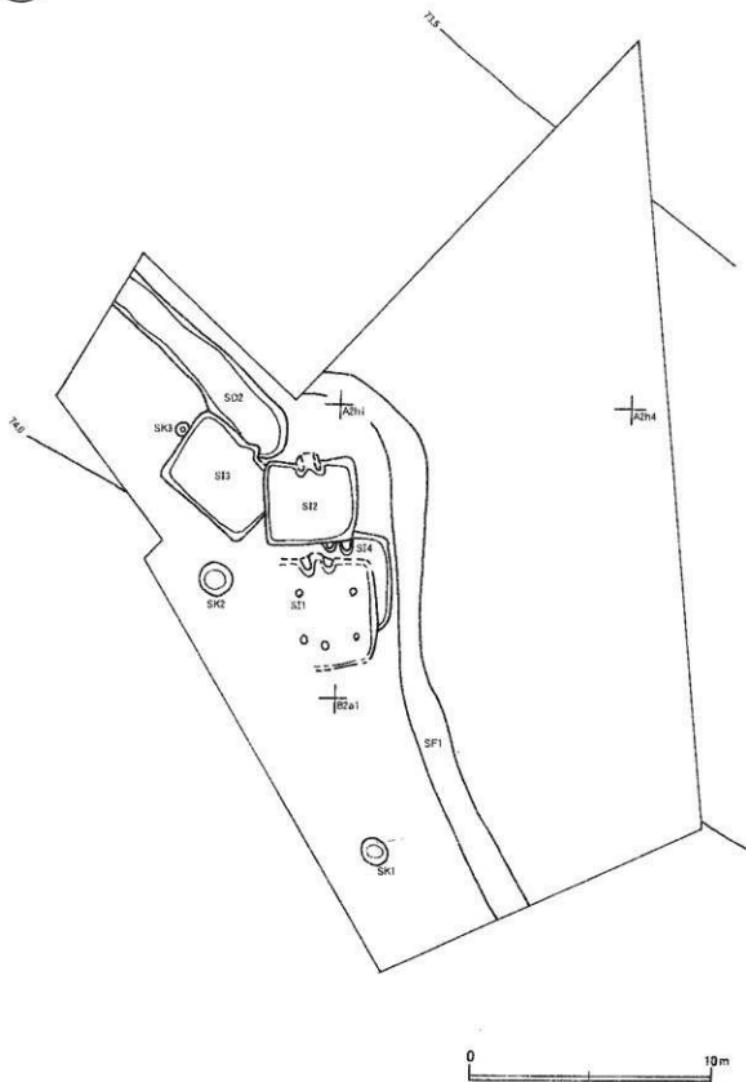
第4層は暗灰黄色の粘土層で、鉄分の中ブロックを多く含む。粘性・締まりは強い。層厚は25~45cmほどである。

第5層は暗褐色の粘土層で、鉄分の小ブロックを多く含む。粘性・締まりは強い。層厚は20cmほどである。

第6層は橙色の岩盤層で、鉄分を多く含む。



第39図 加茂東遺跡調査区位置図



第40図 加茂東遺跡遺構全体図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 平安時代の遺構と遺物

平成13・14年度の調査では、堅穴住居跡4軒、土坑3基、溝跡1条、道路跡1条が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

##### (1) 堅穴住居跡

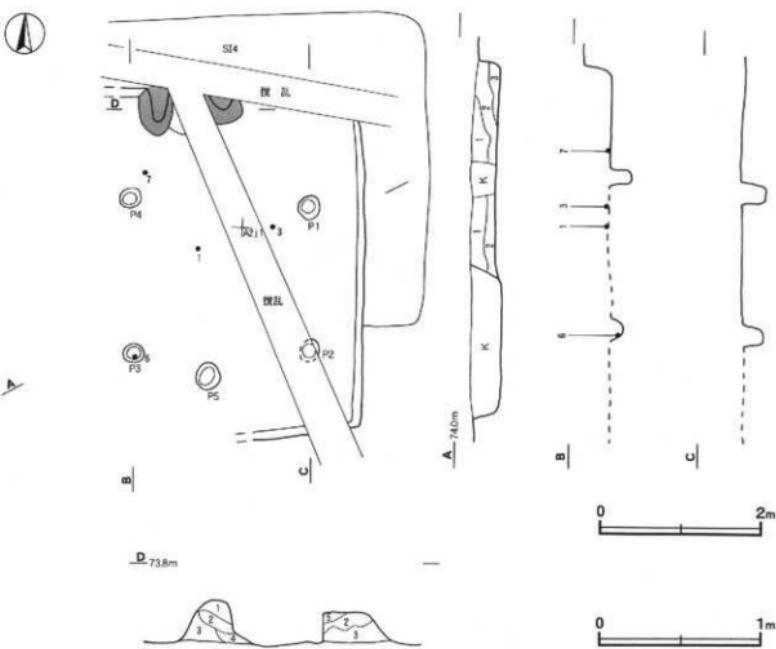
###### 第1号住居跡（第41・42図）

位置 A 1 j0 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 掘乱のため遺存状態が悪く、壁の立ち上がりは部分的に確認されただけである。長軸は北壁と南壁の残存部から4.41mと推定され、短軸は不明であるが方形と推定される。主軸方向はN-4°-Wである。壁高は残存部で29cmであり、垂直に立ち上がっている。

床 地山をそのまま床面としており、確認された部分はほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。壁溝は認められない。



第41図 第1号住居跡実測図

**竪** 北壁の中央部に付設されていたと推定される。擾乱により遺存状態が悪く、袖部が確認されただけである。  
袖部幅は現存値で45cmであり、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。

#### 竪土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子多量、ローム粒子・砂粒微量
- 2 黒褐色 粘土粒子・砂量中量、小繊少量、ローム粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子多量、砂粒・小繊少量、ローム粒子微量
- 4 黒褐色 粘土粒子多量、砂粒中量、ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量

**ピット** 5か所。主柱穴はP 1～P 4で、深さ17～35cmである。出入り口施設に伴うピットはP 5が相当し、深さは15cmである。

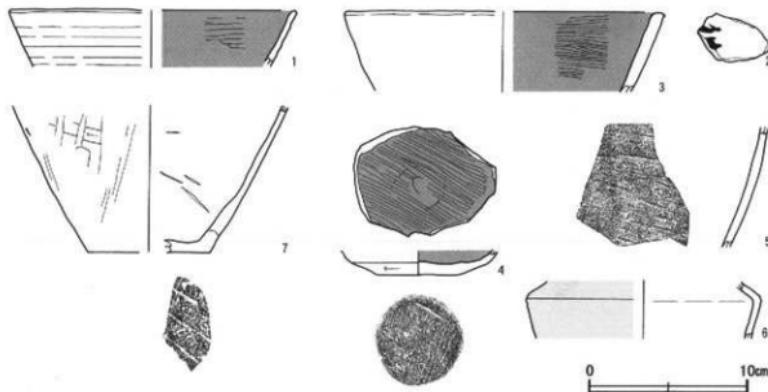
**覆土** 3層からなる。擾乱により西壁側からの堆積の様相が確認できず、堆積状況は不明である。

#### 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒・小繊少量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒・小繊少量
- 3 暗赤褐色 砂粒・小繊中量、ローム粒子・炭化粒子少量

**遺物出土状況** 土師器片167点(壺53、瓶6、甕108)、須恵器片15点(壺12、高台付壺1、甕2)、灰釉陶器片1点(長頸瓶)、繩文土器片5点、陶器片2点が出土している。遺存状態の良い東壁側では、覆土上層から下層にかけて土器片の集中がみられる。須恵器片は上層からの出土であり、混入と考えられる。1・3・7は床面上から、6はP 3内から出土している。2の墨書き土器は覆土中からの出土である。

**所見** 時期は、9世紀末葉の第4号住居跡を掘り込んでいることや須恵器が伴わないとおり出土土器から10世紀前半と考えられる。



第42図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	直徑	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	壺	—	17.9	33.6	—	石英・長石・雲母	椎	普通	内面ヘラミガキ	中央部外面 5% 内面黒色処理
2	土師器	壺	—	—	33.0	—	赤色粒子	黄煙	普通	内面ヘラミガキ	覆土 5% 墨書き 体部 横位 □)

番号	種別	層位	CB	高さ	洗浄	胎土	分類	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	機	-	20.0	(6.0)	赤色粒子	11.6cm	普通	直筒ヘラミガキ	中央部床面	5% 内面黒色処理
4	土師器	手	-	15.5	8.2	赤色粒子・云母	7.5cm	普通	瓦元手筒「直筒ヘラミガキ」	層土	10% 内面黒色処理
5	陶器	素	-	7.1	-	小粒	灰	普通	鉢内ガラス漆塗り	覆土	5%
6	灰化陶器	瓦紙板	-	13.7	-	小粒	粘土リーフ	普通	ロタヨウツ	13内	5% 開口のあきだし
7	土師器	妻	-	19.2	17.6	小・英・長石・雲母	灰	普通	赤面・ラケラストヘラミガキ	壁前面面	

### 第2号住居跡（第43-44例）

位置 A-1h0区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第3・4号住居跡を乗り込んでいる。

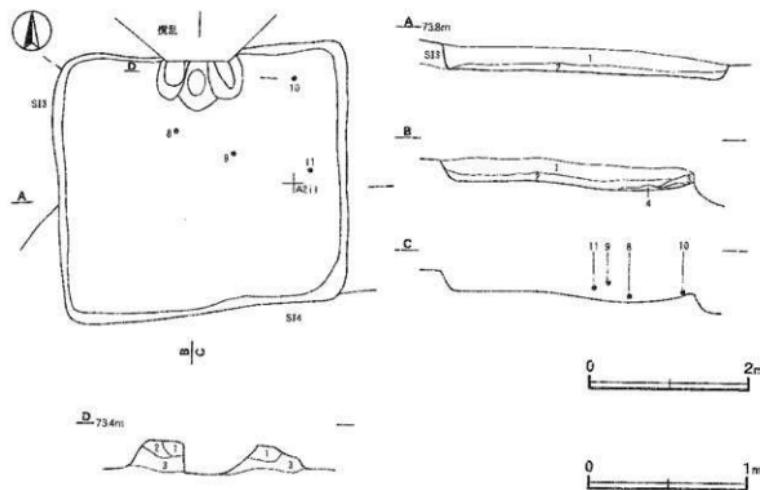
規模と形状 長軸3.65m、短軸3.35mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は18~24cmで、各壁とも外傾して立ち上がりっている。

床 地山をそのまま床面としており、ほぼ平坦で硬化面は確認されなかった。堅溝は認められない。

窓 北壁の中央部に付設されており、煙道部が幌乱により壊されている。袖部幅は30cmであり、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、焼土・炭化粒子の広がりがわざわざに見られるだけで、赤変していない。

#### 出土品解説

- 1 黒褐色 砂質中量、粘土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・燒上粒子微量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量、砂質少量、ローム粒子・燒上粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 3 黑褐色 粘土粒子多量、砂粒・小砾少量、コム粒子微量



第43図 第2号住居跡実測図

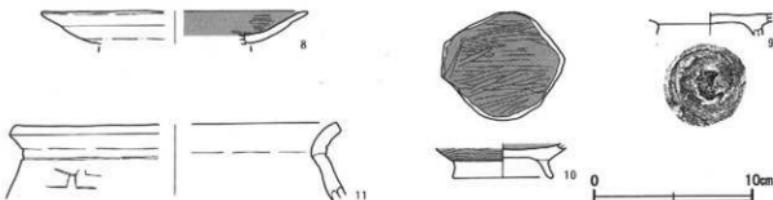
**覆土** 4層からなり、各層とも水平に堆積していることから人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 硫土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・砂粒・小礫微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・硫土粒子・炭化粒子少量、砂粒・小礫微量
- 3 黒褐色 硫土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 黒褐色 硫土ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量

**遺物出土状況** 土器片332点(坪102、楕3、甕227)、須恵器片64点(坪31、高台付坪1、甕30、蓋2)、灰釉陶器片2点(碗)、縄文土器片6点が出土している。土器片は中央部から南西コーナー付近の覆土上層から中層にかけて集中している。須恵器や灰釉陶器はすべて細片で上層からの出土であり、住居を埋め戻す段階で混入したものと考えられる。8・9・11は覆土下層、10は床面上から出土している。

**所見** 時期は、9世紀末葉の第3号住居跡を掘り込んでいることや須恵器が伴わないと及ぼ出士器から10世紀前半と考えられる。



第44図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第44図)

番号	種別	器種	口径	深高	底径	埴土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土器器	高台付組	(16.6)	(2.0)	—	石英・長石・雲母・小礫	褐	普通	内面ヘラミガキ	選前覆土下層	10% 内面黒色処理
9	土器器	楕	—	(1.3)	—	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	瓦溝跡へアリ切妻面貼りつけ	選前覆土下層	20%
10	土器器	楕	—	(2.1)	6.2	長石・雲母	黒	普通	瓦溝跡へアリ切妻面貼りつけ	北東隅床面	20% 内外面黒色処理 PL16
11	土器器	甕	(20.2)	(5.0)	—	石英・長石・小礫	褐	普通	口縁部ヨコナギ	東側隣覆土下層	10%

第3号住居跡(第45・46図)

**位置** A1 h0区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

**重複関係** 第3号土坑、第2号溝跡を掘り込み、第2号住居を掘り込まれている。

**規模と形状** 長軸3.80m、短軸3.30mの長方形で、主軸方向はN-39°-Eである。

**床** 地山をそのまま床面としており、ほぼ平坦で、碳化面は確認されなかった。壁溝は認められない。

**竈** 北東壁の中央部に付設されており、焚口から煙道部まで77cm、壁外への掘り込みは50cmほどである。袖部幅は60cmであり、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、焼土・炭化粒子の広がりがわずかに見られるだけで、赤変していない。

**竈土層解説**

- 1 黒褐色 砂粒多量、炭化物微量
- 2 黒褐色 砂粒多量、硫土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 硫土ブロック少量、炭化粒子微量

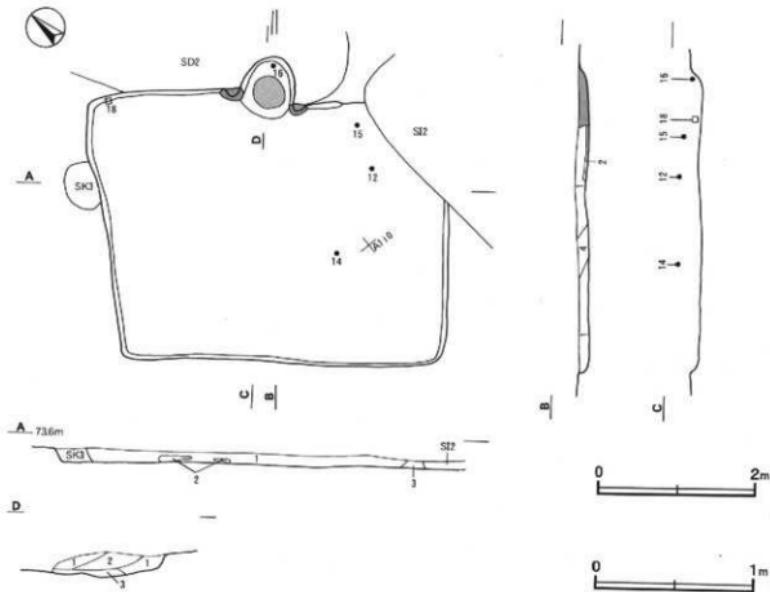
**覆土** 4層からなり、層中に投げ込まれたと考えられる焼土や粘土があることや、土質が違う土砂が不均衡に堆積していることから人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 砂粒多量、施土粒子・炭化粒子少量
- 2 淡黄褐色 施土ブロック多量
- 3 赤褐色 燃土粒子・炭化粒子微量
- 4 開色 砂粒少量、炭化粒子微量

**遺物出土状況** 土師器片97点(环23, 壺74), 須恵器片25点(环19, 壺5, 盖1), 石製品1点(砥石), 細文土器片10点, 陶器片1点が出土している。土器片は窓周辺の覆土中に集中しており、須恵器はすべて細片で覆土中からの出土であり、住居を埋め戻す段階で混入したものと考えられる。12・15は南東コーナー部の覆土上層から, 14は中央部覆土上層から, 16は窓煙道部の覆土下層から, 18は北東壁際の覆土下層から斜位で出土している。

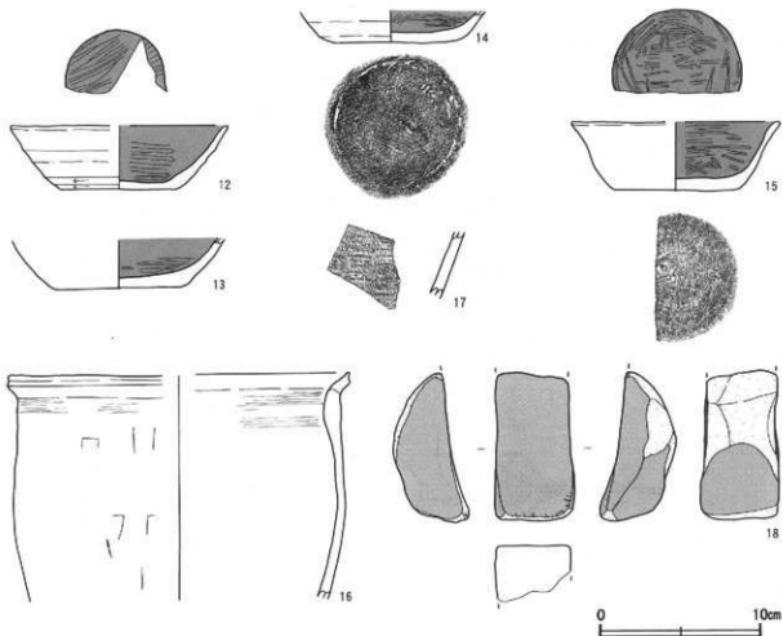
**所見** 時期は、10世紀前半の第2号住居に掘り込まれていることや須恵器が伴わないこと及び出土土器から9世紀末葉と考えられる。



第45図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	土師器	环	(13.4)	3.9	7.0	赤色粒子	にぶい焼	普通	体部下縁回転ヘラケツリ、底部羽板 ヘラ切り	南東コーナー部 窓覆土上層	50% 内面黒色処理 PL16
13	土師器	环	—	(2.9)	7.6	赤色粒子・雲母	焼	普通	内面ヘラミガキ、底部羽板ヘラ切り	窓上	30% 内面黒色処理
14	土師器	环	—	(1.9)	7.5	赤色粒子・雲母	焼	普通	内面ヘラミガキ、底部羽板ヘラ切り	中央部窓覆土上層	50% 内面黒色処理



第46図 第3号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	壺	(12.8)	4.1	7.8	赤色粒子・雲母	にらみ	普通	内面ヘラミガキ、底部凹板ヘラ切り	南東コーナー 部覆土上層	60% 内面黒色処理 PL36
16	土師器	甕	(21.0)	(14.0)	—	小繩、雲母	緑	普通	口縁部コナギ、外面ヘラケズリ	甕内	20%
17	須恵器	甕	—	(4.1)	—	小繩	黄灰	普通	横方向の平行押き	覆土	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
18	砾石	(9.3)	4.9	4.7	(214)	凝灰岩	4面に使用痕	北東コーナー 部覆土下層	PL36

第4号住居跡（第47・48図）

位置 A 2 ii 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第1・2号住居に掘り込まれている。

規模と形状 残存している壁から南北軸は3.86mであり、東西軸は不明であるが方形と推定される。主軸方向はN-7°-Wと推定される。壁高は残存部で15cmであり、やや外傾して立ち上がっている。

床 地山をそのまま床面としており、確認された部分はほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。壁溝は認められない。

竈 北壁の中央部に付設されており、煙道部が焼かれている。袖部幅は35cmであり、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。

#### 竈土層解説

- 1 黒褐色 砂粒中量、粘土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・砂粒中量、粘土粒子少量、ローム粒子微量
- 3 黑褐色 砂粒多量、小礫少量、ローム粒子微量
- 4 焼赤褐色 焼土粒子・砂粒中量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 5 黑褐色 粘土粒子多量、炭化粒子・砂粒少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 黑褐色 砂粒多量、粘土粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子・砂粒多量、粘土粒子中量
- 8 黑褐色 粘土粒子・砂粒中量、ローム粒子・焼土粒子少量

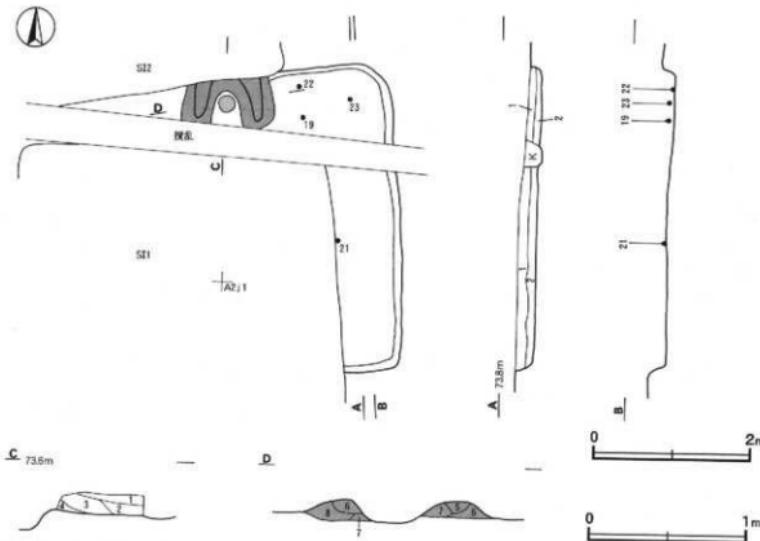
**覆土** 2層からなる。各層とも水平に堆積していることから人為堆積と考えられる。

#### 土層解説

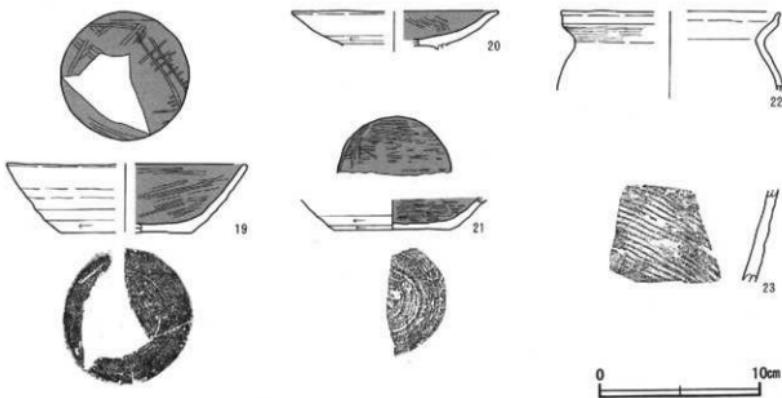
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・小礫少量
- 2 黑褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量

**遺物出土状況** 土師器片113点(环37, 挽2, 高台付皿1, 壺73), 須恵器片30点(环18, 壺10, 盖2), 鋼文土器片1点, 陶器片1点が出土している。須恵器の供膳具は細片で覆土中からの出土であり, 住居を埋め戻す段階で混入したものと考えられる。19・23は覆土下層, 21・22は床面上から出土している。

**所見** 時期は, 10世紀前半の第1号住居に掘り込まれていることや須恵器が伴わないこと及び出土器から, 9世紀末葉と考られる。



第47図 第4号住居跡実測図



第48図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表(第48図)

番号	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
19	土師器	环	[14.8]	4.2	[8.0]	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	底部下端周辺へラクスリ、底部凹部 にラクスリ	北東コーナー 部覆土下端	70% 内面黒色処理 門16
20	土師器	高台付皿	[12.8]	—	[2.4]	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	底部下端周辺へラクスリ、内面へ ラクスリ	覆土	30% 内面黒色処理
21	土師器	环	—	[1.8]	[7.0]	石英・長石・雲母	にぶい緑	普通	底部下端周辺へラクスリ、底部凹部 へラクスリ	東部床面	30% 内面黒色処理
22	土師器	甕	[13.4]	[4.9]	—	石英・長石・雲母	暗赤褐	普通	口縁部コナヂ、外面ナデ	北東コーナー 床面	10%
23	須恵器	甕	—	[5.8]	—	長石・雲母	灰	普通	斜め方向の平行引き	北東コーナー 部覆土下端	5%

## (2) 溝跡

### 第2号溝跡 (第49・50図)

位置 A 1 f8 ~ A 1 h0 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第3号住居に南東端を掘り込まれている。

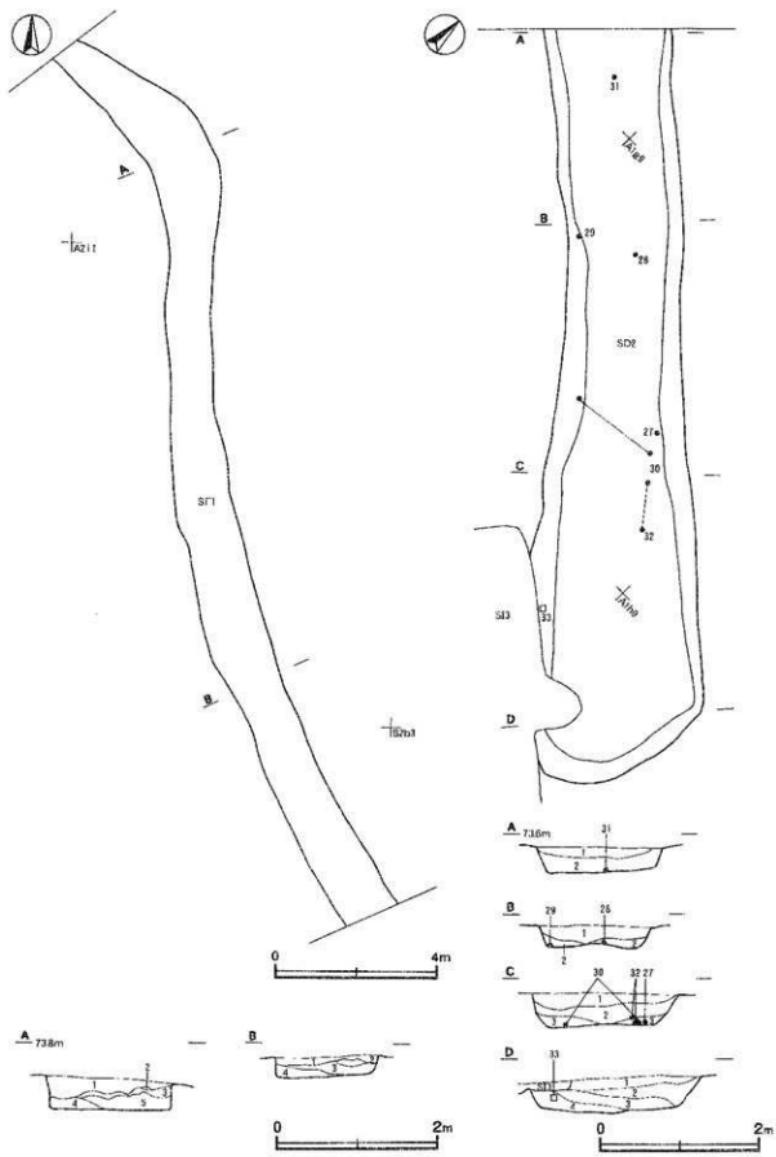
規模と形状 N - 45° - W の傾きで直線的に削削されており、南東方向は A 1 h0 区で外傾して立ち上がり、北西方向は調査区域外にさらに伸びている。上端幅 1.42~1.97m、下端幅 0.98~1.57m で、底面が狭く壁が外傾して立ち上がる断面逆台形を呈している。底面は平坦で、確認面から底面までの深さは北西端で 23cm、南東に向かって緩やかに深くなっている、南東端での深さは 42cm である。

覆土 4 層からなり、壁際から土砂が堆積している状況から自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 純 黒 色 砂粒多量、焼土粒子、炭化粒子微量
- 2 純 白 色 焼土粒子、炭化粒子微量
- 3 黒 暗 色 砂粒少量、炭化物、焼土粒子微量
- 4 黑 暗 色 炭化物少量、焼土粒子微量

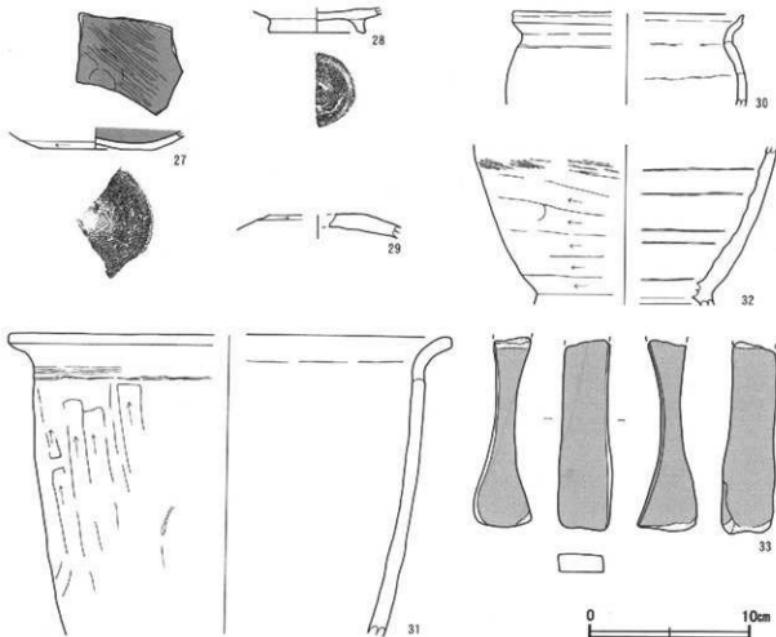
遺物出土状況 土師器片 81 点 (碗 30、甕 51)、須恵器片 26 点 (环 12、高台付环 1、甕 11、長頸瓶 2)、繩文土器片 21 点、陶器片 4 点が出土している。1 層から出土した土器はすべて細片であり、破断面が磨耗していることから、土砂の堆積と一緒に流入したものと考えられる。27・29・30 は壁際の底面から出土しており、壁際堆積土とともに流入したものと考えられる。28・31 は中央底部面から出土しており、28・31 は破断面の磨耗が少



第49圖 第1号道路跡・第2号溝尖測図

ないことから、廃棄されたものと考えられる。32は壁際の底面出土の破片とやや浮いた位置から出土した破片が接合したものである。壁際堆積土とともに流入したものと考えられるが、流入に若干の時間差があるものと考えられる。33は壁際の上層から斜位で出土している。

**所見** 9世紀末葉の第3号住居に掘り込まれていることや、底面出土の土器から9世紀の早い段階に埋没がはじまった可能性が考えられる。調査区域には本跡と同時期の遺構は無く、性格も不明である。調査区域外にその時期の遺構の存在がうかがわれる。



第50図 第2号溝跡出土遺物実測図

第2号溝跡遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	深さ	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
27	土師器	环	—	(1.3)	6.8	石英・長石	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラケズリ、壁部回転ヘラ切り	壁際底面	20% 内面黒色処理
28	須恵器	両台付外	—	(1.5)	6.0	石英・長石・海綿骨角	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼りつけ	中央部底面	20% 底部ヘラ記号「/」
29	須恵器	蓋	—	(1.0)	—	石英・長石	灰	良好	天井部回転ヘラケズリ	壁際底面	30%
30	土師器	甕	(14.2)	(5.7)	—	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口縁部コナデ	壁際底面	10%
31	土師器	甕	(27.2)	(8.6)	—	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口縁部コナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ	中央部底面	30% PL16
32	須恵器	長颈瓶	—	(10.0)	—	長石・小礫	灰	普通	体部外面回転ヘラケズリ	壁際底面・覆土上層	30% PL16

番号	形状	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
30	鉢石	(12.0)	3.3	3.7	(140)	陶灰岩	4刃に使用駆	映照上層	PC.16

## 2 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期及び性格不明の道路跡1条、土坑3基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。また、遺構に伴わない土器が出土しているので、特色ある上層を抽出し、実測図を掲載する。

### (1) 道路跡

#### 第1号道路跡 (第49図)

位置 A 1 hl ~ B 2 c2 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵側部に立地している。

規模と形状 両端が調査区域外に伸びており、全長26.46mほどが確認された。B 2 c2 区から N - 5° - W ほどの傾きで直線に伸びており、A 2 11 区付近で西にやや屈曲する。硬化した路面は1面で、幅は1.04~1.60mであり、側面底面はほぼ平坦で、幅は路面幅とほぼ同じである。

覆土 5層からなり、黒色土と粘土の混合で路面を構成しており、硬化している。

#### 土層解説

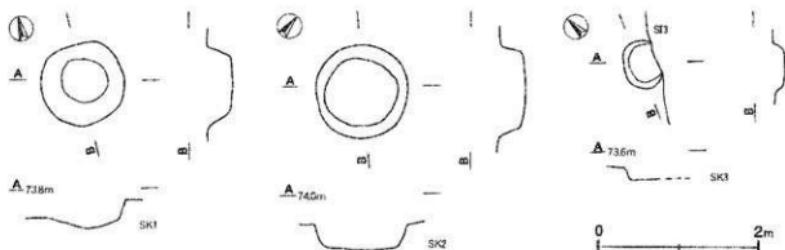
- 1 結 構 色 黏土粒子中等、炭化物・コーム粒子・砂礫少量
- 2 黒 極 無 粘土粒子多量、炭化物・砂礫少量
- 3 オリーブ 黏土粒子多量、炭化粒子・砂礫少量
- 4 オリーブ 黏土粒子多量、草茎中量
- 5 黒 極 無 粘土粒子多量

遺物出土状況 須恵器壺片2点が、路面構築上内から出土しているが、細片のため図示することができなかった。

所見 9世紀末葉から10世紀前半の窓穴住居跡群を避けるように屈曲しており、それらを意識して構築された様子がうかがえる。しかし構造外から近世の陶器片が出土しており、その時期の可能性も推測できるが、特定はできない。

### (2) 土坑 (第51図)

時期及び性格不明の土坑であり、実測図と一覧表で掲載する。



第51図 上坑実測図

(3) 遺構外出土遺物 (第52図)



第52図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第52図)

番号	器種	文様の特徴						出土位置	備考
		深鉢	2本沈線の区画内に刺突文	底面	表面	壁裏	内部施設		
24	深鉢	2本沈線の区画内に刺突文						表土	早期後半
25	深鉢	2本沈線の区画内に刺突文						表土	早期後半
26	深鉢	2本沈線の区画内に刺突文						表土	早期後半
34	深鉢	波状口縁、浮線により巻き文描出						表土	前期後半

表8 住居跡一覧表

番号	位 置	主軸方向 (長軸)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁 高 (cm)	床面	壁裏	内 部 施 設			覆 土	出 土 遺 物	時 代	備 考 断面図 (古→新)	
								柱穴 (孔)	火葬 (外)	量 (枚)					
1	A1b0	N-4'-W	[方角]	[4.41] × [ - ]	29	平坦	-	4	1	-	1	-	不明	上部器、須恵器、灰陶器 器	10世紀前半 SI4→本跡
2	A1b0	N-1'-W	方形	3.65 × 3.35	18~24	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土器器、須恵器、灰陶器 器	10世紀前半 SD1.S3→本跡
3	A1b0	N-39'-E	長方形	3.80 × 3.30	20	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土器器、須恵器、瓦石	9世紀末 SI2.S3→本跡 -S2
4	A2e1	N-7'-W	[方角]	[ - ] × 3.86	15	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土器器、須恵器	9世紀末 本跡-SI3

表9 上坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 遺構番号-折田図 (古→新)
				長径幅	短径幅					
1	D1e4	-	円形	0.6 × 0.6	20	級斜	平坦	-	-	-
2	B1H	-	円形	0.5 × 0.5	14	緩斜	平坦	-	-	-
3	A1b0	-	円形	0.2 × 0.2	20	緩斜	平坦	-	-	本跡-SI3

表10 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規 模(m)				壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	時 代	備 考
				長さ	深さ	上幅	下幅						
2	A1b0~A1b0	N-45'-W	逆台形	(10.55)	0.22~0.42	1.42~1.97	0.98~1.57	外傾	平坦	自然	土師器、須恵器	9世紀以前	-

表11 道路跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規 模(m)				壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	時 代	備 考
				長さ	深さ	上幅	下幅						
1	A1b1~B2e2	N-5'-W	亜状	[26.46]	0.21	1.04~1.60	1.05	外傾	平坦	路面	須恵器	-	-

## 第4節　ま　と　め

今回の調査では、平安時代の堅穴住居跡4軒、それら住居跡群との関連がうかがわれる道路跡1条、溝跡1条、時期及び性格不明の土坑3基が確認された。また、遺構は確認されていないが、縄文時代の深鉢片や近世陶磁器片が出土している。ここでは、平安時代の遺構について概要を述べ、まとめとしたい。

丘陵の斜面部に9世紀末から10世紀前半の住居跡群が重複して位置している。土器の形態や器種組成に明確な時期差は認められないことから、住居の構築・使用・廃絶が短期間だったと考えられる。ただし住居跡群より古い段階の溝跡が存在することは、その時期の遺構があることを示唆しており、集落はさらに古い段階から形成されていた可能性がある。

道路跡は住居跡群のある所でそれらを避けるように屈曲しており、丘陵部から谷沢に向かって延びている様子がうかがえる。集落内の「道」である可能性を指摘しておきたい。

当遺跡では二か年にわたる調査によって、丘陵の斜面部の平安時代集落跡が確認できた。しかし調査区は遺跡の一部分であり、地形的に集落が周辺に広がっていることが考えられる。

## 第5章 犬田山神古墳

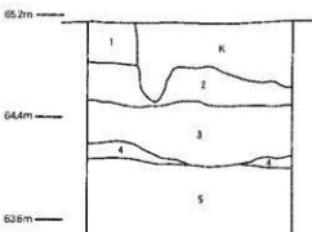
### 第1節 遺跡の概要

今回の調査の結果、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。調査面積は705.31m<sup>2</sup>である。

遺構は、古墳（周溝）1基、周溝2条、土坑2基である。遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に1箱出上している。出土した主な遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、石器（台石）、金属製品（不明鉄製品）である。

### 第2節 基本層序

調査区の北東部にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った（第53図）。以下、テストピットの観察結果から上層の解説を行う。



第53図 基本土層図

第1層は黒褐色の表土である。粘性・締りは普通で、層厚は25~30cmである。

第2層は黄色の鹿沼バミス層で、粘性・締りはともに弱い。層厚は8~30cmである。遺構は本層の上面で確認できた。

第3層は褐色灰色の層で径1.5~2.0cmの小礫を少量含む。粘性・締りは強い。層厚は30~47cmである。

第4層は褐色の層で、径3~5cmの赤褐色の砂岩を多量に含む。粘性・締りは強い。層厚は2~12cmである。

第5層は黄褐色の層で、径1.0~2.0cmの小礫を少量含む。粘性・締りは強い。層厚は現状で12cm以上あるが下層が未削るために本来の厚さは不明である。

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 古墳時代の遺構と遺物

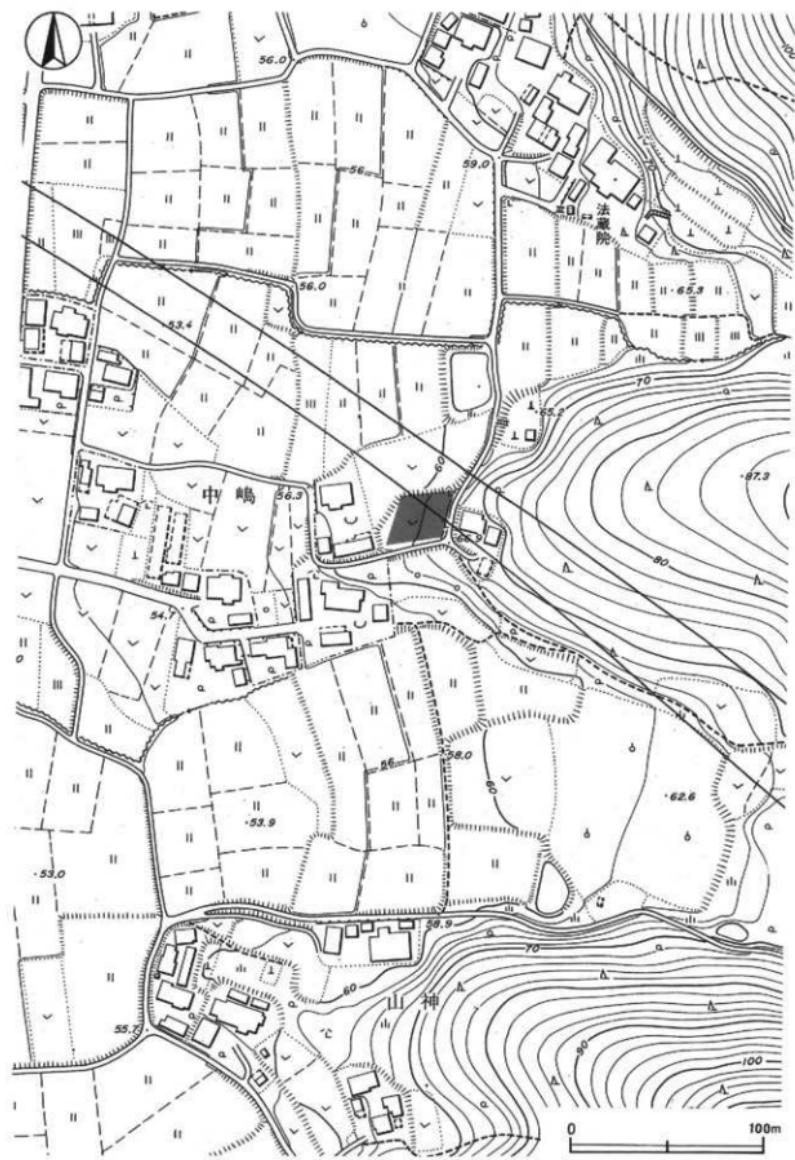
##### (1) 古墳

###### 第1号墳（第56図）

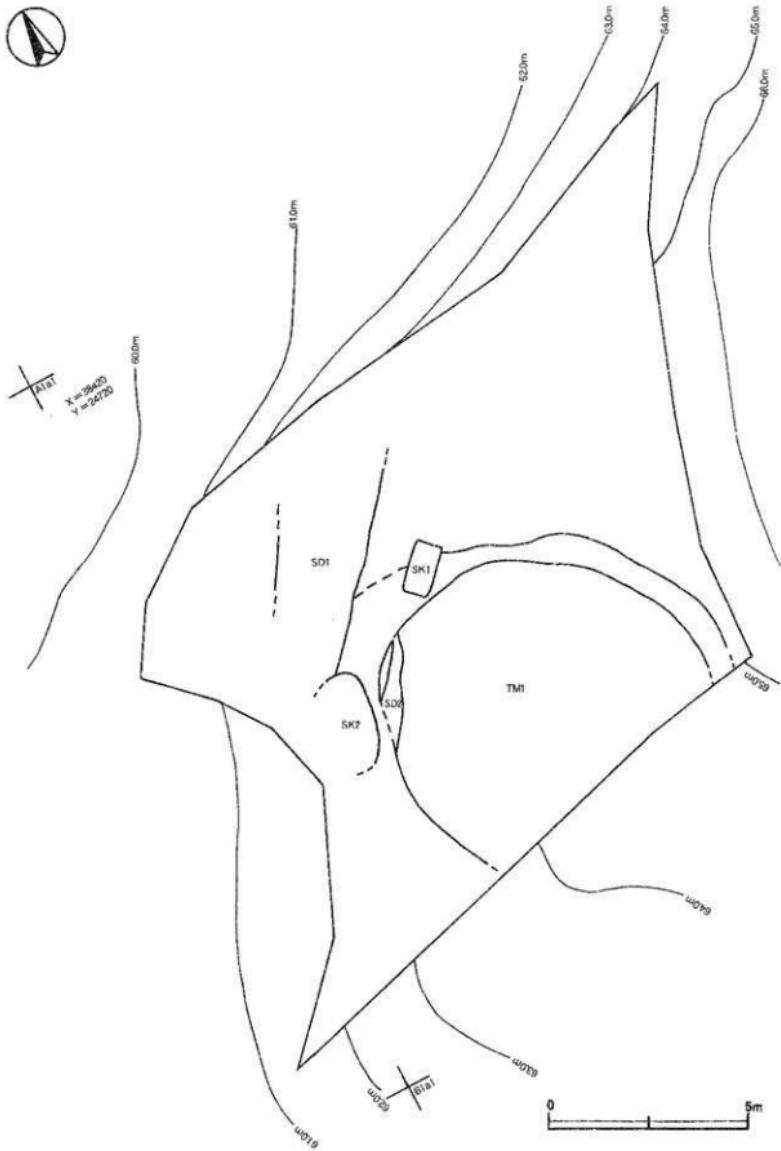
位置 調査区南部のA 1e2区からA 1h7区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第2号溝、第1・2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 墳丘は削平されており、周溝のみ半円形状に確認された。周溝の南部は調査区域外の道路上に延びているため、円形になるのか、前方後円墳の後円部になるのかは不明である。周溝の内径は東西で約16mである。



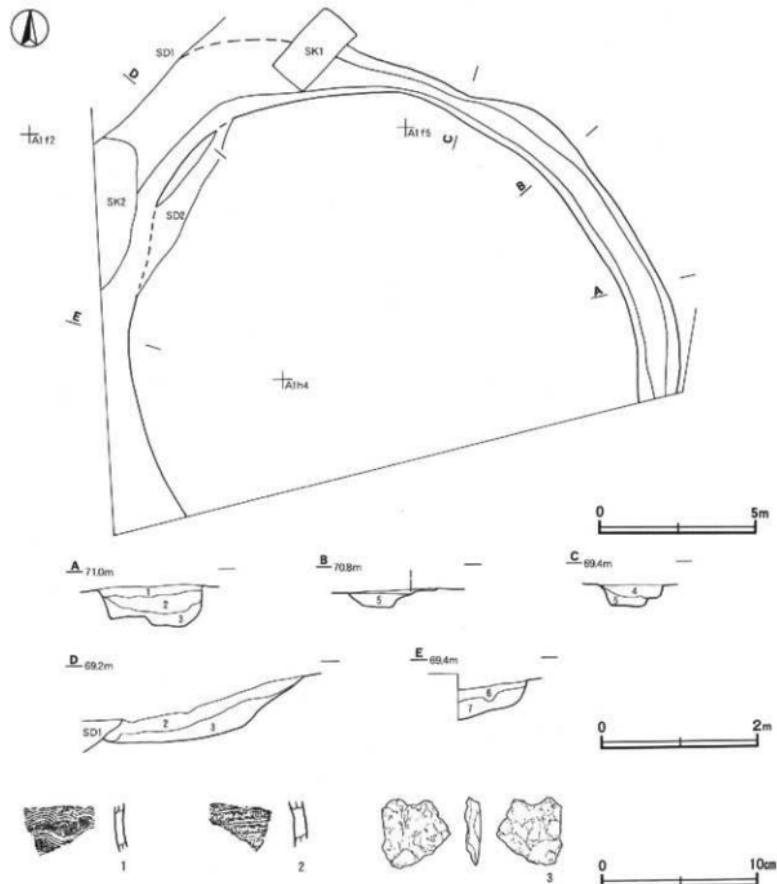
第54図 犬田山神古墳調査区位置図



第55図 大田山神古墳造構全体図

**周溝** 上幅80~140cm、下幅35~100cmの半円形で、深さは20~50cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

**覆土** 周溝内の覆土は7層に分層される。東側ではレンズ状に、西側では斜面上部から土が流れ込んだ状態で堆積しており、自然堆積と考えられる。



第56図 第1号墳・出土遺物実測図

## 周溝土層解説

1	粘	灰	12- ム粒子中量、幾滑ベニス少量、炭化粒子微量、糊り弱
2	砂	黄	コームブロック、幾滑ベニス少量、炭化粒子微量
3	暗	褐色	炭滑ベニス中量、ロームブロック少量
4	暗	褐色	ロームブロック少量、炭化粒子微量、粘性・糊り弱
5	黑	褐色	カーミム粒子多量、粘性・糊り弱
6	暗	褐色	炭滑ベニス少量、ロームブロック微量、粘性・糊り弱
7	暗	褐色	コーム粒子中量、炭化粒子微量、粘性・糊り弱

遺物出土状況 繩文土器片8点、弥生土器片61点、鉄製品1点（不明鉄製品）が出土している。繩文土器と弥生土器はいずれも覆土中から出土で破断面が厚膜しておらず、流れ込みと考えられる。

所見 墳丘が削平されており、土体部も確認できなかった。周溝も一部を確認できただけで、平面形は確定できなかった。良好な遺物が出土しておらず、時期を限定できないが、遺物に埴輪片が見られないことから7世紀以降の可能性がある。

第1号墳出土遺物観察表（第56図）

番号	器種	器種	口径	壁高	底径	胎土	色調	焼成	え様の特徴	出土位置	備考
1	弥生土器	直	-	(3.0)	-	石英	青灰	普通	楕円底状文（4本1單位）	覆土中	6%後頭後方 PL8
2	弥生土器	直	-	(3.0)	-	石英・長石	青灰	普通	圓切朱・楕（羽加之茶）繩文底文	覆土下	5%後頭後半
3	不明鉄製品	-	4.3	4.3	1.0	18.1	鉄	赤血赤褐色	内面暗褐色	覆土中	PL8

## 2 中世の遺構と遺物

## (1) 溝跡

## 第1号溝跡（第57・58図）

位置 調査区北西部のA 1 d4 区からA 1 e2 区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

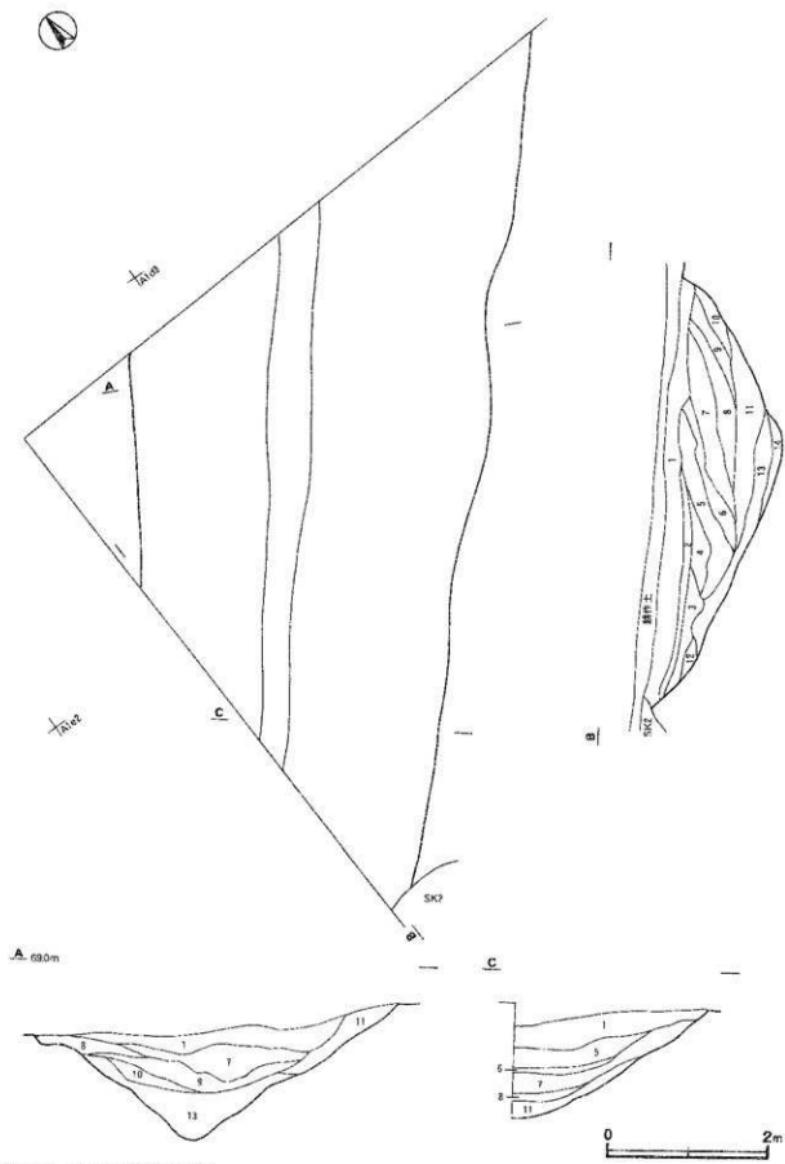
重複関係 第2号上坑に掘り込まれている。

規模と形状 A 1 e2 区から北東方向（N 40° E）へ直線的に延びている。両端は調査区域外へ延びており、確認された長さは約11mである。規模は上幅400~440cm、下幅30~55cm、深さ130~150cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がる簡素状である。

覆土 11層に分層される。第11層以下は斜面上部から上が流れ込んだ状態で堆積しており、自然堆積と考えられる。第10層より上層はロームブロックを多く含み、黒色土と褐色土が北西方向から交互に堆積していることから、斜面の下方から人為的に埋め戻したものと考えられる。

## 土層解説

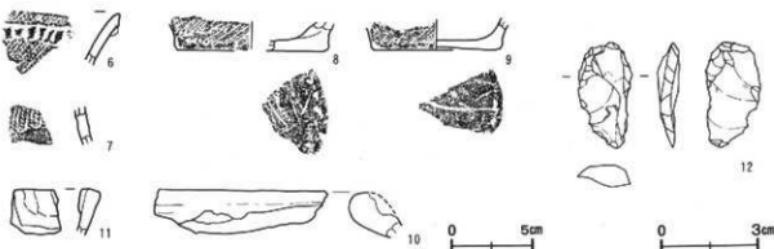
1	粘	灰	1- ムブロック少量、炭化物・鐵滑ベニス微量、粘性・糊り弱	7	粘	色	ローム粒子多量、炭滑ベニス微量
2	暗	褐色	ローム粒子中量、炭滑ベニス少量、炭化粒子微量、粘性・糊り弱	8	黑	褐色	ローム粒子少量、炭化粒子、鐵滑ベニス微量
3	暗	褐色	炭滑ベニス微量、炭化粒子微量、糊り弱	9	褐	褐色	ガーミム粒子中量、糊り弱
4	暗	褐色	ローム粒子微量、炭滑ベニス微量、糊り弱	10	暗	褐色	コーム粒子吸熱、糊り弱
5	黑	褐色	ローム粒子少量、炭滑ベニス微量、糊り弱	11	暗	褐色	ローム粒子微量、糊り強
6	黑	褐色	ロームブロック多量、炭滑ベニス中量、粘性・糊り弱	12	暗	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量、粘性・糊り弱
7	黑	褐色	ローム粒子中量、炭化粒子・鐵滑ベニス微量、粘性・糊り弱	13	黑	褐色	ローム粒子・炭化粒子微量、粘性・糊り弱
8	暗	褐色	糊り弱	14	暗	褐色	ロームブロック・鐵滑ベニス微量、粘性・糊り弱



第57図 第1号溝跡実測図

**遺物出土状況** 繩文土器片3点、弥生土器片23点、土師質土器片2点（内耳鉢、火鉢カ）が出土している。繩文土器と弥生土器はいずれも覆土中からの出土で破断面が摩滅しており、流れ込みと考えられる。

**所見** 南東から北西方向へ降りている尾根を、傾斜に直交する形で掘り込んでいる。出土した土器の内で最新は16世紀代のもので、周囲からも同時期の遺物が出土しており、遺構の形状と合わせて判断すると、中世城郭に伴う堀切と考えられる。土層の堆積状況を見ると比較的短期間で放棄し、埋め戻されたものと考えられる。



第58図 第1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
6	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	石英	褐	普通	折り返しは縦筋に鳥居沿行、腹壁上に連続筋み、附加条一様(末部2条) 菱文彫文	覆土中	5%、後期後半 PL18
7	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	石英、長石	にぶい黄	普通	附加条一様(附加1条) 菱文彫文、粘土を有す	覆土中	5%、後期後半
8	弥生土器	壺	-	(1.9)	[9.6]	石英、長石	にぶい黄	普通	附加条一様(附加2条) 菱文彫文	覆土中	5%、近世植物構造跡のE坑後期後半
9	弥生土器	壺	-	(1.9)	[8.2]	石英、長石	にぶい黄	普通	附加条一様(附加2条) 菱文彫文	覆土中	5%、近世植物構造跡のE坑後期後半

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	土師質土器	火鉢カ	-	(2.8)	-	石英、金雲母、赤色粘土	灰褐色	普通	内外面ナゲ	覆土中	5%、内面焼付着
11	土師質土器	内耳鉢	-	(2.8)	-	石英、金雲母	にぶい黄	普通	内外面ナゲ、耳部貼り付け	覆土中	5%、外面部焼付着 PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重畠	材質	特徴	出土位置	備考
12	陶片	3.2	1.7	0.8	3.38	チャート	継長刺片	覆土中	PL18

### 3 その他の遺構と遺物

#### (1) 上坑

##### 第1号土坑(第59図)

**位置** 調査区北西部のA 1 e4 区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

**重複関係** 第1号墳を掘り込んでいる。

**規模と形状** 長軸260cm、短軸135cmの長方形で、深さは95~115cm、長軸方向はN-43°-Eである。底面は平坦で、壁は直立している。北東部の底面に長径65cm、短径50cmの楕円形で、深さ50cmのビットが1か所掘り込

まれている。

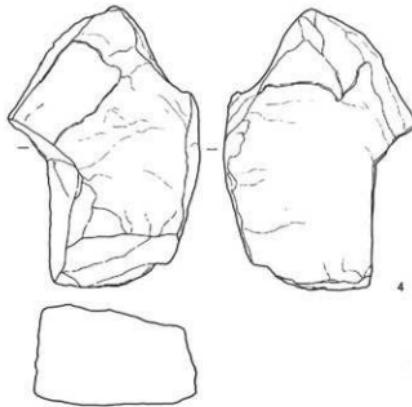
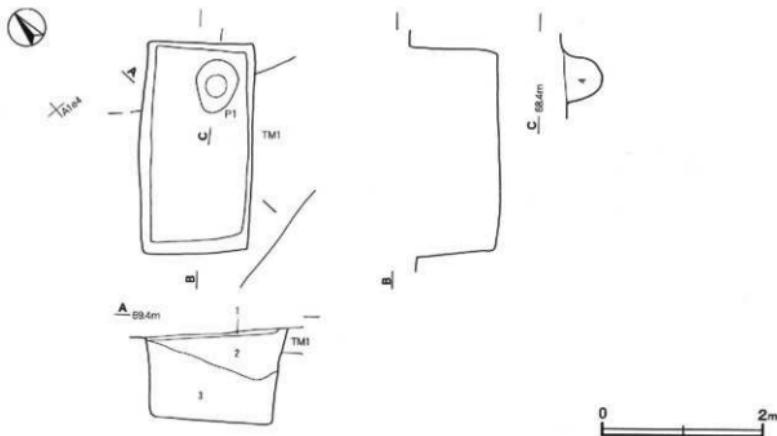
**覆土** 4層に分層される。層内にロームブロックを不均一に含んでおり、人為堆積と考えられる。

**土層解説**

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、粘性・繊り弱
- 2 黒褐色 ロームブロック、炭化粒子微量、粘性・繊り弱
- 3 黑褐色 ロームブロック多量、炭化粒子微量、粘性・繊り弱
- 4 間色 コーム粒子、鹿沼バミス微量、粘性・繊り強

**遺物出土状況** 繩文土器片1点、弥生土器片2点、土師器片1点(甕)、礫2点が出土している。土器片はいずれも覆土中からの出土で破断面が磨滅しており、流れ込みと考えられる。

**所見** 時期を判断できる遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



第59図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表(第59図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	石臼	23.2	15.5	8.4	3700	砂岩	表面に剥離痕	覆土中	

第2号土坑(第60図)

位置 調査区北西部のA 1 f2 区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第1号墳と第1号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西側が調査区域外にあり、現状で長軸480cm、短軸150cmのみ確認できた。形状は長楕円形と推測され、深さは80cmである。底面は皿状で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

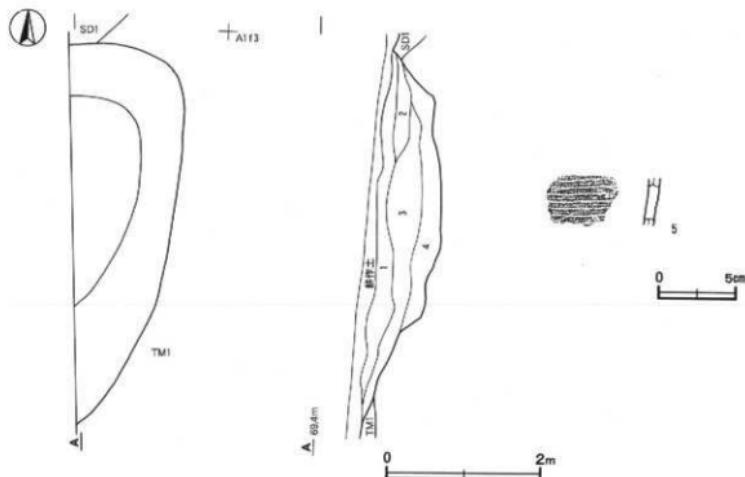
覆土 4層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

#### 土層解説

- 1 棕 色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量、粘性・縮り弱
- 2 棕 色 ロームブロック少數、炭化物微量、粘性・縮り弱
- 3 黒 色 ローム粒子微量
- 4 嫩 緑 色 ロームブロック中量、鹿沼バミス微量、粘性強

遺物出土状況 弁生土器片1点が出土している。破断面が摩滅しており、流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できる遺物が出土していないが、16世紀代と考えられる第1号溝跡を掘り込んでおり、時期はそれ以降と考えられる。



第60図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
5	弁生土器	壺	-	(3.1)	-	石英	赤褐	普通	附加条一種(附加2条)鶴文施文	覆土中	5%後期半 PLB

(2) 溝跡

第2号溝跡 (第61図)

位置 調査区北西部のA 1 f2 区からA 1 f3 区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 A 1 f2 区から北東方向 (N 35° E) へ直線的に延びている。両端は削平されており、確認された長さは約 6 m である。規模は上幅 30~120 cm、下幅 10~50 cm、深さ 20 cm である。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上っている。

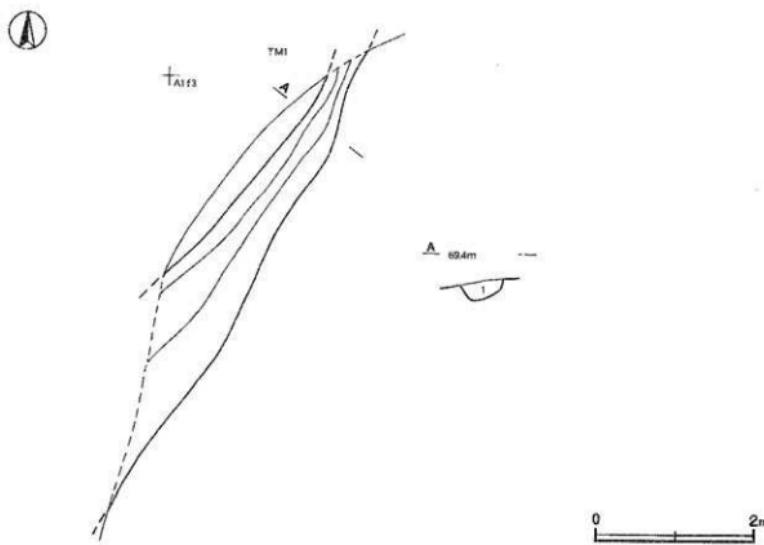
覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土質解説

1 砂 地色 ゴームブロック・炭化粒子微量、粘性・柔軟

遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



第61図 第2号溝跡尖測図

(3) 遺構外出土遺物 (第62図)



第62図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第62図)

番号	種別	器種	口径	壁高	底括	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	土師器	坪	[13.2]	(2.7)	-	真石, 金雲母, 赤色粒子	にぶい褐色	普通	外面ナデ	表探	10%
14	土師管 器	小瓶	[7.6]	1.3	[4.8]	長石	にぶい褐色	普通	内面ナデ, 底部回転糸切り	表探	15% PLB
15	瓦質土器	火鉢型	-	(4.2)	-	長石	褐灰	普通	内外面ナデ, 口唇部・内面に沈線	表探	5% PLB

#### 第4節 まとめ

今回の調査では、古墳1基、土坑2基、溝跡2条を確認した。以下、当遺跡の概要を述べてまとめとしたい。

#### 1 繩文・弥生時代

繩文時代と弥生時代の遺構は確認されていないが、他の時代の遺構や表土から土器片が確認されている。繩文時代の土器はほとんどが細片で、中期がその中心である。弥生時代の土器は後期後半のものであり、破片数も多く周囲に遺構が存在する可能性が高い。

#### 2 古墳時代

古墳時代に属する遺構は古墳1基のみで、遺物もほとんど出土していない。古墳は南部が調査区域外にあり、平面形が確定できなかった。主体部も削平されたか、調査区域外に存在しているためか、確認できなかった。当遺跡の南西約20mには径10mほどの円形の地ぶくれがあり、さらに南の煙地内には黒雲母片岩が石室状に存在し、古墳の石室か石棺であった可能性も考えられる。地元の方にうかがったところ、他にも周囲に古墳が存在し石室か石棺が見えていたということで、当遺跡は古墳群であったと考えられる。おそらく尾根上に数基による古墳群が形成されていたと考えられ、埴輪片が出土していないことや古墳の規模が小さいことなどを考えると、時期は7世紀代と推測される。

#### 3 中世

中世では溝跡が1条確認できた。時期は遺物から16世紀代と推測され、立地や形状から判断すると城郭の堀切であると考えられる。当遺跡が存在する尾根から約1.6km東に上がった山上には橋本城跡が存在し、北西約600mには中世後期の遺構・遺物が多く出土している犬田神社前遺跡が存在することを考えると、当遺跡は橋本城跡か、それに付属する小規模な城郭の一部であった可能性が考えられ、周囲にも同様な遺構の存在が予想される。

# 写 真 図 版

高 帆 遺 跡

加 茂 東 遺 跡

犬 田 山 神 古 墳

高幡遺跡

PL 1



完掘状況（北から）



完掘状況（北西から）

高 帧 遺 跡



第3号住居跡  
完掘状況



第5号住居跡  
遺物出土状況



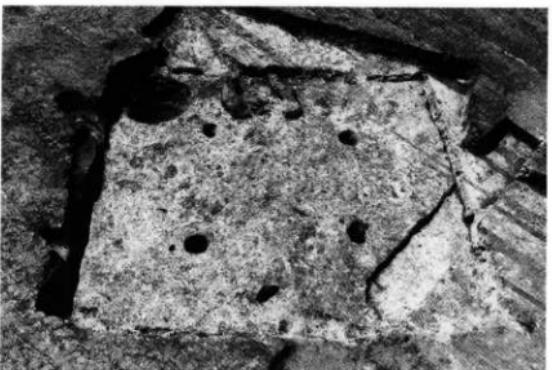
第9号住居跡  
完掘状況

高 帧 遺 跡

PL 3



第 1 号住居跡  
完 挖 状 況



第 8 号住居跡  
完 挖 状 況



第 8 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況

高 嵩 遺 跡



第 8 号住居跡竈  
遺 物 出 土 狀 況



第 8 号住居跡貯藏穴  
遺 物 出 土 狀 況



第 10 号住居跡  
完 挖 狀 況

高幅遺跡

PL 5



第10号住居跡  
遺物出土状況



第11号住居跡  
完掘状況



第11号住居跡  
遺物出土状況

高 帧 遗 蹤



第12号住居跡  
遺物出土状況



第13号住居跡  
遺物出土状況



第5号土坑  
完 挖 状 況

高 幅 遺 跡

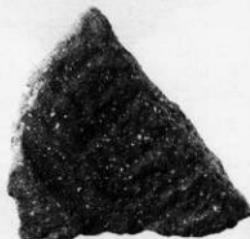
PL 7



遺構外-1



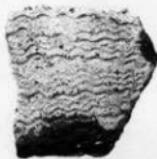
SI 3-8



遺構外-2



遺構外-104



SI 5-39



SI 5-35



SI 5-43



SI 5-33



SI 5-32



SI 9-87



遺構外-106



SI 9-86



遺構外-109



遺構外-107



SI 3-18

第 3 · 5 · 9 号住居跡、遺構外出土遺物

## 高 幅 遺 跡



SI 5-20



SI 3-9



SI 5-47



SI 5-50



造構外-113



SI 9-88



SI 9-89



造構外-117



SI 9-90



SI 3-17



SI 5-54

高 帷 遺 跡

PL 9



SI 5-22



SI 9-84



SI 5-21



SI 5-23



SI 5-29



SI 5-24



SI 5-74



SI 5-75



SI 5-73



SI 10-167

第 5 • 9 • 10 号住居跡出土遺物

PL10

高 幅 遺 跡



SI 8-147



SI 8-146



SI 8-148



SI 8-149



SI 8-145



SI 8-150



SI 8-153



SI 8-157



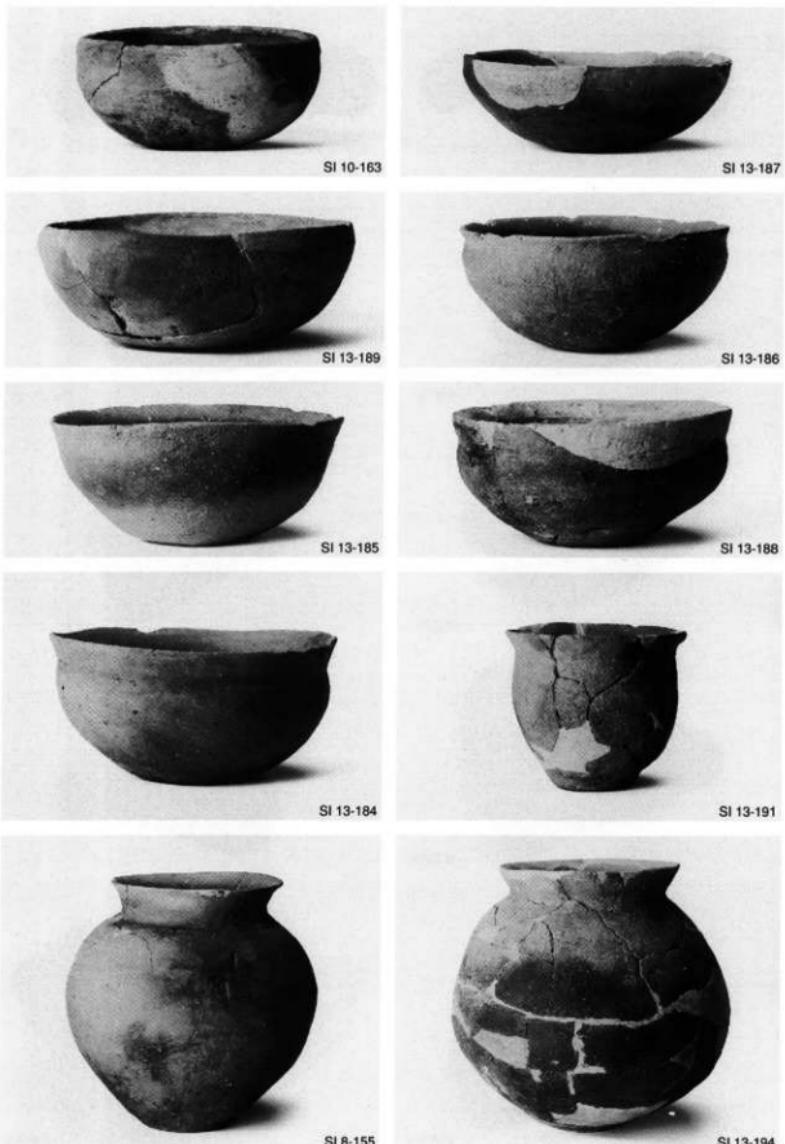
SI 8-161



第 8 号住居跡出土遺物

高 帧 遺 跡

PL11



第 8 • 10 • 13号住居跡出土遺物

## 高 帧 遺 跡



SI 11-178



SI 11-180



SI 11-179



造構外-135



SI 11-177



SI 11-176



造構外-3



SD 2-201



造構外-4



造構外-5



造構外-7



造構外-6

第11号住居跡、第2号溝、造構外出土遺物

加 茂 東 遺 跡

PL13



第 1 号住居跡  
完 振 状 況



第 2 号住居跡  
完 振 状 況

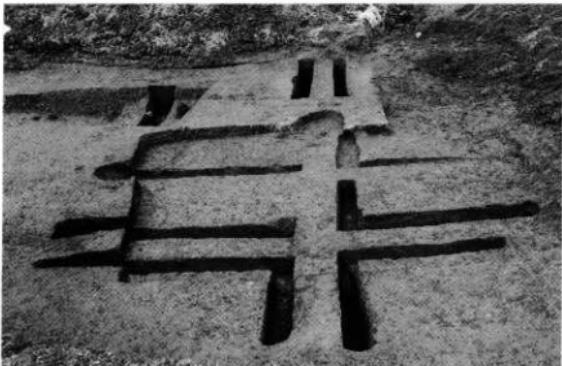


第 2 号住居跡  
遺 物 出 土 状 況

加 茂 東 遺 跡



第 2 号住居跡  
遺物出土状況



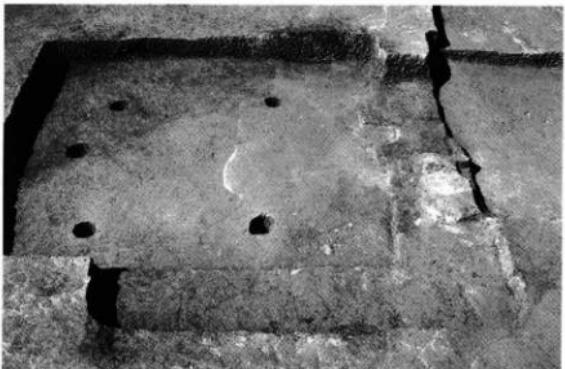
第 3 号住居跡  
完 壊 状 況



第 3 号住居跡  
遺物出土状況

加 茂 東 遺 跡

PL15



第 4 号住居跡  
完 挖 状 況



第 2 号溝  
完 挖 状 況



第 2 号 溝  
遺 物 出 土 状 況



SI 2-10



SI 3-12



SI 4-19



SI 3-15



SD 2-31



SD 2-32



SD 2-33



SI 3-18

第 2 · 3 · 4 号住居跡、第 2 号溝出土遺物

犬田山神古墳

PL17

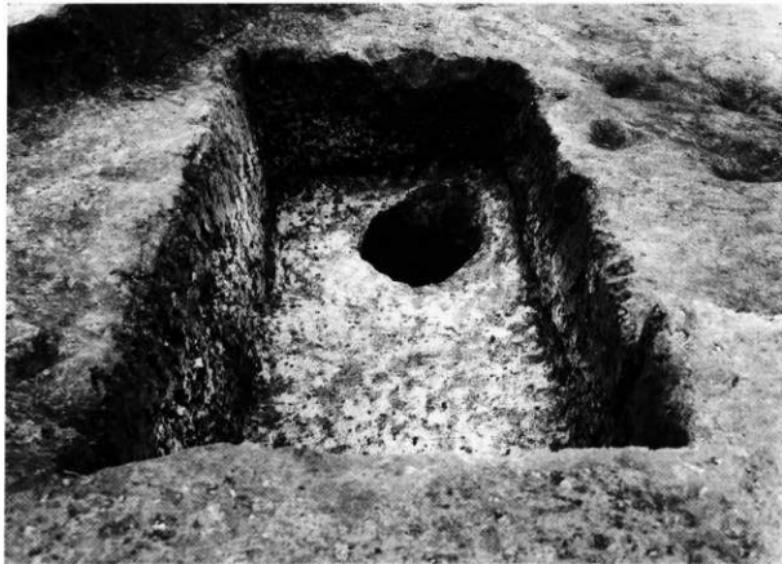


第1号墳完掘状況

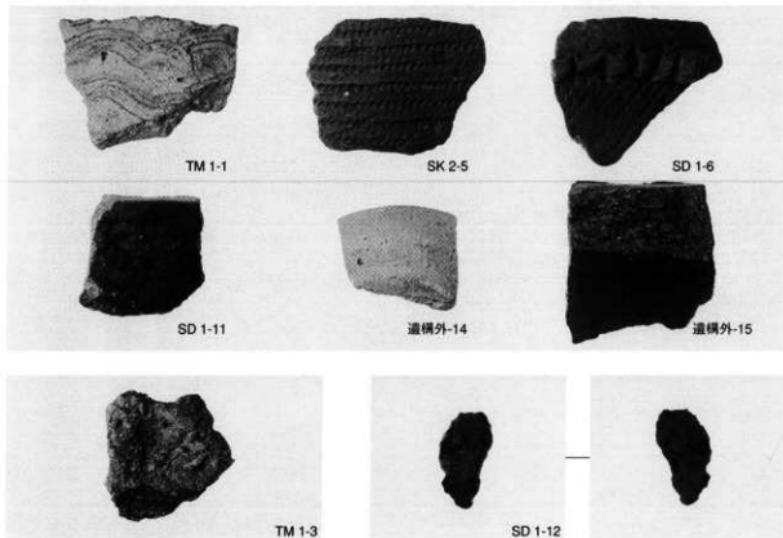


第1号溝完掘状況

## 犬田山神古墳



第1号土坑完掘状況



第1号墳、第2号土坑、第1号溝、遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第228集

高幡遺跡  
加茂東遺跡  
犬山神古墳

平成16(2004)年3月24日印刷  
平成16(2004)年3月26日発行

発行 財團法人 茨城県教育財団  
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2  
茨城県水戸生涯学習センター分館内  
TEL 029-225-6587

印刷 山二印刷株式会社  
〒311-4153 水戸市河和町4433の33  
TEL 029-252-8481